斎藤茂吉著

万葉秀歌

下巻

岩波新書

R3

万葉秀歌 下巻 斎藤茂吉著

R3

9784004000037

1920292007206

ISBN4-00-400003-3

C0292 ¥720E

定価（本体720円＋税）

万葉秀歌（下）

万葉集はわれわれ誰もが読むべき宝典であるが、巻二十まで読破しようというのは並大抵のことではない。歌壇の第一人者が、四千五百有余のなかから、すぐれた歌を選び、誰もが理解でき、味わえるように平易簡潔な解説を付した本書は、万人のための「万葉集入門」であると同時に、「万葉集精髄」を実現したことにもなる（全二冊）。

岩波新書から

英語で読む万葉集　リービ英雄著　920

和歌とは何か　渡部泰明著　1198

短歌をよむ　俵万智著　304

西行　高橋英夫著　277

日本文化史 第二版　家永三郎著　黄187

斎藤茂吉著

万葉秀歌

下巻

岩波新書

6

目次

巻第八

番号	初句	二句	作者	頁
〔一四一八〕	いはばしる・たるみのうへの		(志貴皇子)	一
〔一四一九〕	かむなびの・いはせのもりの		(鏡王女)	三
〔一四二三〕	うちなびく・はるきたるらし		(尾張連)	五
〔一四二四〕	はるのぬに・すみれつみにと		(山部赤人)	五
〔一四二一〕	くだらぬの・はぎのふるえに		(山部赤人)	七
〔一四三五〕	かはづなく・かむなびがはに		(厚見王)	八
〔一四四七〕	よのつねに・きくはくるしき		(大伴坂上郎女)	九
〔一四四四〕	なみのうへゆ・みゆるこじまの		(笠金村)	一〇
〔一四六六〕	かむなびの・いはせのもりの		(志貴皇子)	一一
〔一四九四〕	なつやまの・こぬれのしじに		(大伴家持)	一三
〔一五一一〕	ゆふされば・をぐらのやまに		(舒明天皇)	一三
〔一五一三〕	けさのあさけ・かりがねききつ		(穂積皇子)	一五

〔一五三九〕 あきのたの・ほだをかりがね（聖武天皇）……一六
〔一五五一〕 ゆふづくよ・こころもしぬに（湯原王）……一七
〔一五七七〕 あしひきの・やまのもみぢば（大伴書持）……一七
〔一六三六〕 おほくちの・まがみのはらに（舎人娘子）……一八
〔一六三九〕 あわゆきの・ほどろほどろに（大伴家人）……一九
〔一六五八〕 わがせこと・ふたりみませば（光明皇后）……二〇

巻第九

〔一六九九〕 おほくらの・いりえとよむなり（柿本人麿歌集）……二三
〔一七〇一〕 さよなかと・よはふけぬらし（柿本人麿歌集）……二三
〔一七〇四〕 うちたをり・たむのやまきり（柿本人麿歌集）……二四
〔一七〇九〕 みけむかふ・みなぶちやまの（柿本人麿歌集）……二五
〔一七一四〕 おちたぎち・ながるるみづの（作者不詳）……二六
〔一七一五〕 ささなみの・ひらやまかぜの（柿本人麿歌集）……二七
〔一七七五〕 はつせがは・ゆふわたりきて（柿本人麿歌集）……二八
〔一七九一〕 たびびとの・やどりせむぬに（遣唐使随員の母）……二九
〔一七九七〕 しほけたつ・ありそにはあれど（柿本人麿歌集）……三〇

巻第十

〔一八一一〕 ひさかたの・あめのかぐやま（柿本人麿歌集）……三三
〔一八一八〕 こらがなに・かけのよろしき（柿本人麿歌集）……三三
〔一八二一〕 はるがすみ・ながるるなべに（作者不詳）……三四
〔一八七五〕 はるされば・きのこのくれの（作者不詳）……三五
〔一八七九〕 かすがぬに・けぶりたつみゆ（作者不詳）……三五
〔一八八三〕 ももしきの・おほみやびとは（作者不詳）……三六
〔一九一七〕 はるさめに・ころもはいたく（作者不詳）……三七
〔一九七六〕 うのはなの・さきちるをかゆ（作者不詳）……三七
〔二〇九六〕 まくずはら・なびくあきかぜ（作者不詳）……三八
〔二二一八〕 あきかぜに・やまとへこゆる（作者不詳）……三九
〔二二三七〕 あさにゆく・かりのなくねは（作者不詳）……四〇
〔二二四七〕 やまのべに・いゆくさつをは（作者不詳）……四一
〔二二五八〕 あきかぜの・さむくふくなべ（作者不詳）……四一
〔二二七〇〕 あきはぎの・えだもとををに（作者不詳）……四二
〔二二八〇〕 ながつきの・しぐれのあめに（作者不詳）……四三
〔二二八五〕 おほさかを・わがこえくれば（作者不詳）……四三

〔二九〇〕わがかどの・あさぢいろづく（作者不詳）……四四
〔三二〇〕さをしかの・つまよぶやまの（作者不詳）……四五
〔三三七〕おもはぬに・しぐれのあめは（作者不詳）……四五
〔三七七〕さをしかの・いりぬのすすき（作者不詳）……四六
〔三二三〕あしひきの・やまかもたかき（柿本人麿歌集）……四七
〔三二四〕まきむくの・ひはらもいまだ（柿本人麿歌集）……四七
〔三二五〕あしひきの・やまぢもしらず（柿本人麿歌集）……四八
〔三三三〕わがせこを・いまかいまかと（作者不詳）……四九
〔三三六〕はなはだも・よふけてなゆき（作者不詳）……五〇

巻第十一

〔二五二〕にひむろを・ふみしづむこし（柿本人麿歌集）……五一
〔二五三〕はつせの・ゆつきがもとに（柿本人麿歌集）……五二
〔二五五〕うつくしと・わがもふいもは（柿本人麿歌集）……五三
〔二五七〕あさとでの・きみがあゆひを（柿本人麿歌集）……五三
〔二六八〕たらちねの・ははがてはなれ（柿本人麿歌集）……五四
〔二六九〕ひとのぬる・うまいはねずて（柿本人麿歌集）……五五
〔二九四〕あさかげに・わがみはなりぬ（柿本人麿歌集）……五五

〔二五五〕ゆけどゆけど・あはぬいもゆゑ（柿本人麿歌集）……五六
〔二九九〕あからひく・はだにふれずて（柿本人麿歌集）……五七
〔四〇一〕こひしなば・こひもしねとや（柿本人麿歌集）……五八
〔四一四〕こふること・なぐさめかねて（柿本人麿歌集）……五八
〔四一五〕やましなの・こはたのやまを（柿本人麿歌集）……五九
〔四三六〕おほふねの・かとりのうみに（柿本人麿歌集）……六〇
〔四五六〕ぬばたまの・くろかみやまの（柿本人麿歌集）……六一
〔四六五〕わがせこに・わがこひをれば（柿本人麿歌集）……六二
〔四六九〕やまちさの・しらつゆおもみ（柿本人麿歌集）……六三
〔四九五〕たらちねの・ははがかふこの（柿本人麿歌集）……六三
〔五一七〕たらちねの・ははにさはらば（作者不詳）……六四
〔五二〇〕かりごもの・ひとへをしきて（作者不詳）……六五
〔五四〇〕ふりわけの・かみをみじかみ（作者不詳）……六六
〔五四六〕おもはぬに・いたらばいもが（作者不詳）……六七
〔五四七〕かくばかり・こひむものぞと（作者不詳）……六八
〔五五四〕あひみては・おもかくさるる（作者不詳）……六八
〔五六〇〕ひともなき・ふりにしさとに（作者不詳）……六九
〔五七二〕いつはりも・につきてぞする（作者不詳）……七〇

〔二五七九〕はやゆきて・いつしかきみを（作者不詳）……七一
〔二五八〇〕おもがたの・わするとならば（作者不詳）……七二
〔二五八一〕あぢきなく・なにのたはこと（作者不詳）……七三
〔二六一六〕おくやまの・まきのいたどを（作者不詳）……七四
〔二六一八〕つくよよみ・いもにあはむと（作者不詳）……七五
〔二六四一〕ともしびの・かげにかがよふ（作者不詳）……七六
〔二六五一〕なにはびと・あしびたくやの（作者不詳）……七六
〔二六五三〕うまのとの・とどともすれば（作者不詳）……七七
〔二六七九〕まどごしに・つきおしてりて（作者不詳）……七八
〔二六八三〕をちかたの・はにふのをやに（作者不詳）……七八
〔二七三四〕しほみてば・みなわにうかぶ（作者不詳）……七九
〔二七五四〕あさがしは・うるはかはべの（作者不詳）……八〇
〔二七六〇〕あしひきの・やまさはゑぐを（作者不詳）……八一
〔二七六二〕あしがきの・なかのにこぐさ（作者不詳）……八一
〔二七七〇〕みちのべの・いつしばはらの（作者不詳）……八二
〔二七七四〕かむなびの・あさしぬはらの（作者不詳）……八三
〔二七八二〕さねかにば・たれともねめど（作者不詳）……八四
〔二七八六〕やまぶきの・にほへるいもが（作者不詳）……八四
〔二七九四〕こもりづの・さはたづみなる（作者不詳）……八五
〔二七九九〕ひとごとを・しげみときみを（作者不詳）……八六
〔二八〇二〕あしひきの・やまどりのをの（作者不詳）……八六

巻第十二

〔二八四一〕わがせこが・あさけのすがた（柿本人麿歌集）……八八
〔二八四三〕うつくしみ・わがもふいもを（柿本人麿歌集）……八九
〔二八六二〕やまがはの・みづかげにおふる（柿本人麿歌集）……八九
〔二八九三〕あさゆきて・ゆふべはきます（作者不詳）……九〇
〔二九一六〕たまかつま・あはむといふは（作者不詳）……九一
〔二九二一〕をとめごは・おなじこころに（作者不詳）……九二
〔二九二六〕いまはあは・しなむよわがせ（作者不詳）……九二
〔二九五二〕わがよはひし・おとろへぬれば（作者不詳）……九四
〔三〇〇四〕ひさかたの・あまつみそらに（作者不詳）……九五
〔三一六九〕のとのうみに・つりするあまの（作者不詳）……九六
〔三二一〇〕あしひきの・かたやまきぎし（作者不詳）……九七

巻第十三

〔三三八〕 あふさかを・うちいでてみれば （作者不詳）……九九
〔三四九〕 しきしまの・やまとのくにに （作者不詳）……一〇〇
〔三三三〕 かはのせの・いしふみわたり （作者不詳）……一〇一

巻第十四

〔三三四八〕 なつそひく・うなかみがたの （東歌）……一〇三
〔三三五一〕 つくばねに・ゆきかもふらる （東歌）……一〇五
〔三三五二〕 しなぬなる・すがのあらのに （東歌）……一〇六
〔三三五五〕 あまのはら・ふじのしばやま （東歌）……一〇八
〔三三六一〕 あしがらの・をてもこのもに （東歌）……一〇九
〔三三六六〕 まがなしみ・さねにわはゆく （東歌）……一一〇
〔三三七五〕 むさしぬの・をぐきがきぎし （東歌）……一一一
〔三三八六〕 にほどりの・かづしかわせを （東歌）……一一三
〔三三九九〕 しなぬぢは・いまのはりみち （東歌）……一一三
〔三四〇三〕 あがこひは・まさかもかなし （東歌）……一一四
〔三四〇四〕 かみつけぬ・あそのまそむら （東歌）……一一五
〔三四一四〕 いかほろの・やさかのゐでに （東歌）……一一六
〔三四一四〕 しもつけぬ・みかものやまの （東歌）……一一七

〔三四二五〕 しもつけぬ・あそのかはらよ （東歌）……一一七
〔三四三九〕 すずがねの・はゆまうまやの （東歌）……一一九
〔三四五一〕 おもしろき・ぬをばなやきそ （東歌）……一二〇
〔三四五九〕 いねつけば・かがるあがてを （東歌）……一二〇
〔三四六二〕 あしひきの・やまさはびとの （東歌）……一二一
〔三四七四〕 うゑたけの・もとさへとよみ （東歌）……一二三
〔三四八四〕 あさをらを・をけにふすさに （東歌）……一二三
〔三四九四〕 こもちやま・わかかへるでの （東歌）……一二四
〔三五一四〕 たかきねに・くものつくのす （東歌）……一二五
〔三五一五〕 あがおもの・わすれむしだは （東歌）……一二五
〔三五三二〕 きそこそは・ころとさねしか （東歌）……一二六
〔三五六九〕 さきもりに・たちしあさけの （東歌・防人）……一二七
〔三五七〇〕 あしのはに・ゆふぎりたちて （東歌・防人）……一二七

巻第十五

〔三六〇二〕 あをによし・ならのみやこに （作者不詳）……一三一
〔三六〇五〕 わたつみの・うみにいでたる （作者不詳）……一三一
〔三六九七〕 ももふねの・はつるつしまの （新羅使）……一三三

〔三六九八〕 あまざかる・ひなにもつきは （新羅使）……一三三
〔三七〇三〕 たかしきの・うへかたやまは （新羅使・大蔵麿）……一三四
〔三七一三〕 あしひきの・やまぢこえむと （狭野茅上娘子）……一三五
〔三七二四〕 きみがゆく・みちのながてを （狭野茅上娘子）……一三六
〔三七三二〕 あかねさす・ひるはものもひ （中臣宅守）……一三七
〔三七七二〕 かへりける・ひときたれりと （狭野茅上娘子）……一三八

巻第十六

〔三七八六〕 はるさらば・かざしにせむと （壮士某）……一四〇
〔三八〇六〕 ことしあらば・をはつせやまの （娘子某）……一四一
〔三八〇七〕 あさかやま・かげさへみゆる （前の采女某）……一四一
〔三八四〇〕 てらでらの・めがきまをさく （池田朝臣）……一四三
〔三八四一〕 ほとけつくる・まそほたらずは （大神朝臣）……一四四
〔三八四六〕 ほふしらが・ひげのそりぐひ （作者不詳）……一四四
〔三八七三〕 わがかどに・ちどりしばなく （作者不詳）……一四六

巻第十七

〔三九一五〕 あしひきの・やまだにこえて （山部赤人）……一四七

〔三九二二〕 ふるゆきの・しろかみまでに （橘諸兄）……一四八
〔三九八七〕 たまくしげ・ふたがみやまに （大伴家持）……一四九
〔四〇一六〕 めひのぬの・すすきおしなべ （高市黒人）……一五〇
〔四〇二九〕 すすのうみに・あさびらきして （大伴家持）……一五一

巻第十八

〔四〇八六〕 あぶらびの・ひかりにみゆる （大伴家持）……一五二
〔四〇九七〕 すめろぎの・みよさかえむと （大伴家持）……一五二
〔四一二三〕 このみゆる・くもほびこりて （大伴家持）……一五四
〔四一三四〕 ゆきのうへに・てれるつくよに （大伴家持）……一五四

巻第十九

〔四一三九〕 はるのその・くれなゐにほふ （大伴家持）……一五六
〔四一四一〕 はるまけて・ものがなしきに （大伴家持）……一五七
〔四一四三〕 もののふの・やそをとめらが （大伴家持）……一五八
〔四一四九〕 あしひきの・やつをのきぎし （大伴家持）……一五九
〔四一六五〕 ますらをは・なをしたつべし （大伴家持）……一六〇
〔四二六〕 このゆきの・けのこるときに （大伴家持）……一六一

〔四二六二〕 からくにに・ゆきたらはして （多治比鷹主）……一六二
〔四二六四〕 あらたしき・としのはじめに （道祖王）……一六三
〔四二九〇〕 はるのぬに・かすみたなびき （大伴家持）……一六三
〔四二九一〕 わがやどの・いささむらたけ （大伴家持）……一六四
〔四二九二〕 うららうらに・てれるはるびに （大伴家持）……一六六

巻第二十

〔四二九三〕 あしひきの・やまゆきしかば （元正天皇）……一六八
〔四三〇五〕 このくれの・しげきをのへを （大伴家持）……一六九
〔四三一七〕 わがつまも・ゑにかきとらむ （防　人）……一七〇
〔四三一八〕 おほきみの・みことかしこみ （防　人）……一七一
〔四三四九〕 ももくまの・みちはきにしを （防　人）……一七二
〔四三五七〕 あしがきの・くまどにたちて （防　人）……一七二
〔四三五八〕 おほきみの・みことかしこみ （防　人）……一七三
〔四三六九〕 つくばねの・さゆるのはなの （防　人）……一七四
〔四三七〇〕 あられふり・かしまのかみを （防　人）……一七五
〔四四〇七〕 ひなぐもり・うすひのさかを （防　人）……一七六
〔四四一五〕 さきもりに・ゆくはたがせと （防人の妻）……一七七
〔四四三一〕 ささがはの・さやぐしもよに （防　人）……一七七
〔四四三四〕 ひばりあがる・はるべとさやに （大伴家持）……一七八
〔四四六七〕 つるぎたち・いよよとぐべし （大伴家持）……一七九
〔四四六八〕 うつせみは・かずなきみなり （大伴家持）……一八〇
〔四四八七〕 いざこども・たはわざなせそ （藤原仲麿）……一八一
〔四四九一〕 おほきうみの・みなそこふかく （石川女郎）……一八二
〔四四九三〕 はつはるの・はつねのけふの （大伴家持）……一八三
〔四四九四〕 みづどりの・かものはのいろの （大伴家持）……一八四
〔四五二二〕 いけみづに・かげさへみえて （大伴家持）……一八五
〔四五二六〕 あらたしき・としのはじめの （大伴家持）……一八六

従属選出歌

〔六一〕 ますらをが・さつやたばさみ （舎人娘子）……一九
〔一四二五〕 あしひきの・やまさくらばな （山部赤人）……七
〔一四七一〕 こほしけば・かたみにせむと （山部赤人）……七
〔一五一五〕 ことしげき・さとにすまずは （但馬皇女）……一六
〔一七一三〕 たぎのうへの・みふねのやまゆ （作者不詳）……二七
〔一七九六〕 もみぢばの・すぎにしこらと （柿本人麿歌集）……三一

〔一七九八〕 いにしへに・いもとわがみし（柿本人麿歌集）……三一
〔一七九九〕 たまつしま・いそのうらみの（柿本人麿歌集）……三一
〔一八一三〕 まきむくの・ひはらにたてる（柿本人麿歌集）……三一
〔二四七八〕 あきがしは・うるわかはべの（柿本人麿歌集）……三三
〔一六九七〕 いもがなも・わがなもたたば（柿本人麿歌集）……八〇
〔一九二〇〕 しなむいのち・ここはおもはず（作者不詳）……一〇八
〔一九二八〕 おのがじし・ひとしにすらし（作者不詳）……九八
〔一九三四〕 うまさはふ・めにはあけども（作者不詳）……九八
〔一九四七〕 おもふにし・あまりにしかば（作者不詳）……九八
〔一九六一〕 うつせみの・つねのことばと（作者不詳）……九八
〔三〇〇二〕 あしひきの・やまよりいづる（作者不詳）……九八
〔三〇〇三〕 ゆふづくよ・あかときやみの（作者不詳）……九八
〔三三五八〕 さぬらくは・たまのをばかり（東歌）……九八
〔三三六八〕 あしがりの・とひのかふちに（東歌）……三八
〔三三七八〕 いりまぢの・おほやがはらの（東歌）……三八
〔三三七九〕 わがせこを・あどかもいはむ（東歌）……三八
〔三三九〇〕 つくばねに・かがなくわしの（東歌）……三八
〔三三九五〕 をつくばの・ねろにつくたし（東歌）……三八
〔三四一〇〕 いかほろの・そひのはりはら（東歌）……三八
〔三四一七〕 かみつけぬ・いならのぬまの（東歌）……三八
〔三四三三〕 たきぎこる・かまくらやまの（東歌）……三八
〔三四三八〕 つむがぬに・すずがおときこゆ（東歌）……三八
〔三四四三〕 うらもなく・わがゆくみちに（東歌）……三三
〔三四四七〕 くさかげの・あぬなゆかむと（東歌）……三九
〔三四六三〕 まどほくの・ぬにもあはなむ（東歌）……三九
〔三四七三〕 さぬやまに・うつやをのとの（東歌）……三九
〔三四七六〕 うべこなは・わぬにこふなも（東歌）……三九
〔三四九六〕 たちばなの・こばのはなりが（東歌）……三九
〔三四九七〕 かはかみの・ねじろたかがや（東歌）……三九
〔三四九九〕 をかによせ・わがかるかやの（東歌）……三九
〔三五〇三〕 あせかがた・しほひのゆたに（東歌）……三九
〔三五一一〕 あをねろに・たなびくくもの（東歌）……三九
〔三五二二〕 ひとねろに・いはるものから（東歌）……三九
〔三五二三〕 ゆふされば・みやまをさらぬ（東歌）……三九
〔三五二六〕 ぬまふたつ・かよはとりがす（東歌）……三九
〔三五三一〕 いもをこそ・あひみにこしか（東歌）……三九

〔三五三七〕 くへごしに・むぎはむこうまの （東　歌）……一二九
〔三五四六〕 あをやぎの・はらろかはとに （東　歌）……一三〇
〔三五四九〕 たゆひがた・しほみちわたる （東　歌）……一三〇
〔三五五六〕 しほぶねの・おかればかなし （東　歌）……一三〇
〔三五五七〕 なやましけ・ひとづまかもよ （東　歌）……一三〇
〔三五六五〕 かのころと・ねずやなりなむ （東　歌）……一三〇
〔三八四七〕 だむをちや・しかもないひそ （法師某）……四五
〔四一一四〕 なでしこが・はなみるごとに （大伴家持）……一五七
〔四一四五〕 はるまけて・かくかへるとも （大伴家持）……一五七
〔四一四六〕 よくだちに・ねざめてをれば （大伴家持）……一五八
〔四一五〇〕 あさどこに・きけばはるけし （大伴家持）……一六〇
〔四三〇九〕 あきかぜに・なびくかはびの （大伴家持）……一五七
〔四三五二〕 みちのべの・うまらのうれに （防　人）……一七三
〔四四六九〕 わたるひの・かげにきほひて （大伴家持）……一八〇
参考地名一覧……一八八
改版に際して……一八九

巻第八

○

石激る垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも　〔巻八・一四一八〕　志貴皇子

志貴皇子の懽の御歌である。一首の意は、巌の面を音たてて流れおつる、滝のほとりには、もう蕨が萌え出づる春になった、懽ばしい、というのである。「石激る」は「垂水」の枕詞として用いているが、意味の分かっているもので、形状言の形式化・様式化・純化せられたものと看做し得る。「垂水」は垂る水で、余り大きくない滝と解釈してよいようである。「垂水の上」の「上」は、ほとりというぐらいの意に取ってよいが、滝下より滝上の感じである。この初句は、「石激」で旧訓イハソゴであったのを、考でイハバシルと訓んだ。なお、類聚古集に「石灑」とあるから、「石そそぐ」の訓を復活せしめ、「垂水」をば、巌の面をば垂れて来る水、たらたら水の程度のものと解釈する説もあるが、私は、初句をイハバシルと訓み、全体の調子から、やはり垂水をば小滝ぐらいのものとして解釈したく、小さくとも激湍の特色を保存したいのである。

この歌は、志貴皇子の他の御歌同様、歌調が明朗・直線的であって、然かも平板に堕ることなく、細かい顫動を伴いつつ荘重なる一首となっているのである。御懽びの心が即ち、「さ蕨の萌えいづる春になりにけるかも」という一気に歌いあげられた句に象徴せられているのであり、小滝のほとりの蕨に主眼をとどめられたのは、感覚が極めて新鮮だからである。この「けるかも」と一気に詠みくだされたのも、容易なるが如くにして決して容易なわざではない。集中、「昔見し象の小河を今見ればいよよ清けくなりにけるかも」(巻三・三一六)、「妹として二人作りし吾が山斎は木高く繁くなりにけるかも」(巻三・四五二)、「うち上る佐保の河原の青柳は今は春べとなりにけるかも」(巻八・一四三三)、「秋萩の枝もとををに露霜おき寒くも時はなりにけるかも」(巻十・二一七〇)、「萩が花咲けるを見れば君に逢はず真も久になりにけるかも」(巻十・二二八〇)、「竹敷のうへかた山は紅の八入の色になりにけるかも」(巻十五・三七〇三)等で、皆一気に流動性を持った調べを以て歌いあげている歌であるが、万葉の「なりにけるかも」の例は実に敬服すべきものなので、煩をいとわず書抜いて置いた。そして此等の中にあっても志貴皇子の御歌は特にその感情を伝えているようにおもえるのである。此御歌は皇子の御作中でも優れており、万葉集中の傑作の一つだと謂っていいようである。

大体以上の如くであるが、「垂水」を普通名詞とせずに地名だとする説があり、その地名も摂津豊能郡の垂水、播磨明石郡の垂水の両説がある。若し地名だとしても、垂水即ち小滝を写象

の中に入れなければ此歌は価値が下るとおもうのである。次に此歌に寓意を求める解釈もある。「此御歌イカナル御懽有テヨマセ給フトハシラネド、垂水ノ上トシモヨマセ給ヘルハ、若帝ヨリ此処ヲ封戸ニ加ヘ賜ハリテ悦バセ給ヘル歟。蕨ノ根ニ隠リテカバマリヲレルガ、春ノ暖気ヲ得テ萌出ルハ、実ニ悦コバシキ譬ナリ。御子白壁王不意ニ高御座ニ昇ラセ給ヒテ、此皇子モ田原天皇ト追尊セラレ給ヒ、皇統今ニ相ツヾケルモ此歌ニモトヰセルニヤ」(代匠記)といい、考・略解・古義これに従ったが、稍穿鑿に過ぎた感じで、寧ろ、「水流れ草もえて万物の時をうるを悦び給へる御歌なるべし」(拾穂抄)の簡明な解釈の方が当っているとおもう。なお、「石走る垂水の水の愛しきやし君に恋ふらく吾が情から」(巻十二・三〇二五)という参考歌がある。

○

神奈備の伊波瀬の杜の喚子鳥いたくな鳴きそ
吾が恋益る　〔巻八・一四一九〕　鏡王女

鏡王女の歌である。鏡王女は鏡王の女で額田王の御姉に当り、はじめ天智天皇の御寵を受け、後藤原鎌足の正妻となった。此処の神奈備は竜田の神奈備で飛鳥の神奈備ではない。生駒郡竜田町の南方に車瀬という処に森がある。それが伊波瀬の森である。喚子鳥は大体閑古鳥の事として置く。一首の意は、神奈備の伊波瀬の森に鳴く喚子鳥よ、そんなに鳴くな、私の

恋しい心が増すばかりだから、というのである。

「いたく」は、強く、熱心に、度々、切実になどとも翻し得、口語なら、「そんなに鳴くな」ともいえる。喚子鳥の声は、人に愬えて呼ぶようであるから、その声を聞いて自分の身の上に移して感じたものである。この聯想から来る感じは万葉の歌に可なり多いが、当時の人々は何時の間にか斯う無理なく表現し得るようになっていたのだろう。人麿の、「夕浪千鳥汝が鳴けば」でもそうであった。それだから此歌でも、現代の読者にまでそう予備的な心構えがなくも受納れられ、極く単純な内容のうちに純粋な詠歎のこえを聞くことが出来るのである。王女は額田王の御姉であったから、額田王の歌にも共通な言語に対する鋭敏がうかがわれるが、額田王の歌よりももっと素直で才鋒の目だたぬところがある。また時代も万葉上期だから、その頃の純粋な響・語気を伝えている。巻八(一四六五)に、藤原夫人の、「霍公鳥いたくな鳴きそ汝が声を五月の玉に交へ貫くまでに」があるが、女らしい気持だけのものである。また、やはり此巻(一四八四)に、「霍公鳥いたくな鳴きそ独りゐて寐の宿らえぬに聞けば苦しも」という大伴坂上郎女の歌があるが、「吾が恋まさる」の簡浄な結句には及ばない。これは同じ女性の歌でもはや時代の相違であろうか。

○

うち靡く春来るらし山の際の遠き木末の咲き
ゆく見れば　〔巻八・一四二二〕　　尾張連

尾張連の歌としてあるが、伝不明である。一首は、山のあいの遠くまで続く木立に、きのうも今日も花が多くなって見える、もう春が来たというので、「咲きゆく」だから、次から次と花が咲いてゆく、時間的経過を含めたものだが、其処に読者を迷わせるところもなく、ゆったりとした迫らない響を感じさせている。そして、春の到来に対する感慨が全体にこもり、特に結句の「見れば」のところに集まっているようである。「木末の咲きゆく」などという簡潔ないいあらわしは、後代には跡を断った。それは、幽玄とか有心とか云って、深みを要求していながら、歌人の心の全体が常識的に分化してしまったからである。

○

春の野に菫採みにと来し吾ぞ野をなつかしみ
一夜宿にける　〔巻八・一四二四〕　　山部赤人

山部赤人の歌で、春の原に菫を採みに来た自分は、その野をなつかしく思って一夜宿た、と

いうのである。全体がむつかしくない、赤人的な清朗な調べの歌であるが、菫咲く野に対する一つの係恋といったような情調を感じさせる歌である。即ち極く広義の恋愛情調であるから、説く人によっては、恋人のことを歌ったのではないかと詮議するのであるが、其処まで云わぬ方が却っていい。また略解は「菫つむは衣摺む料なるべし」とあるが、これも主要な目的ではないであろう。本来菫を摘むというのは、可憐な花を愛するためでなく、その他の若草と共に食用として摘んだものである。和名鈔の菫菜で、爾雅に、汋食レ之滑也。疏可レ食之菜也とあるによって知ることが出来る。併し此処は、「春日野に煙立つ見ゆ嬬嬬らし春野の菟芽子採みて煮らしも」(巻十・一八七九)という歌のように直ぐ食用にして居る野菜として菫を聯想せずに、第一には可憐な菫の花の咲きつづく野を聯想すべきであり、また其処に恋人などの関係があるにしても、それは奥に潜める方が鑑賞の常道のようである。

この歌で、「吾ぞ」と強めて云っていても、赤人の歌だから余り目立たず、「野をなつかしみ」といっても、余り強く響かず、従って感情を強いられるような点も少いのだが、そのうちには少し甘くて物足りぬということが含まっているのである。赤人の歌には、「潟をなみ」、「野をなつかしみ」というような一種の手法傾向があるが、それが清潔な声調で綜合せられている点は、人の許す万葉第一流歌人の一人ということになるのであろうか。併しこの歌は、富士山の歌ほどに優れたものではない。巻七(一三三二)に、「磐が根の凝しき山に入り初めて山なつかしみ出

でがてぬかも」という歌があり、これは寄レ山歌だからこういう表現になるのだが、寧ろ民謡風に楽なもので、赤人の此歌と較れば赤人の歌ほどには行かぬのである。また、巻十(一八八九)の、「吾が屋前の毛桃の下に月夜さし下心よしうたて此の頃」という歌は、譬喩歌ということは直ぐ分かって、少しうるさく感ぜしめる。此等と比較しつつ味うと赤人の歌の好いところもおのずから分かるわけである。なお、赤人の歌には、この歌の次に、「あしひきの山桜花日ならべて斯く咲きたらばいと恋ひめやも」(巻八・一四二五)ほか二首があり、清淡でこまかい味いであるが、結句は、やはり弱い。なお、「恋しけば形見にせむと吾が屋戸に植ゑし藤浪いま咲きにけり」(同・一四七一)があり、これを模して家持が、「秋さらば見つつ偲べと妹が植ゑし屋前の石竹咲きにけるかも」(巻三・四六四)と作っているが、共に少し当然過ぎて、感に至り得ないところがある。赤人の歌でも、「今咲きにけり」が弱いのである。なお参考句に、「春の野に菫を摘むと、白妙の袖折りかへし」(巻十七・三九七三)がある。

○

百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも　〔巻八・一四三一〕　山部赤人

山部赤人の歌で、春到来の心を詠んでいる。百済野は大和北葛城郡百済村附近の原野である。

「萩の古枝」は冬枯れた萩の枝で、相当の高さと繁みになったものであろう。「春待つと居りし」あたりのいい方は、古調のいいところであるが、旧訓スミシ・ウグヒスであったのを、古義では脱字説を唱え、キキシ・ウグヒスと訓んだ。併し古い訓(類聚古集・神田本)の、ヲリシウグヒスの方がいい。この歌も、何でもないようであるが、徒らに興奮せずに、気品を保たせているのを尊敬すべきである。これも期せずして赤人の歌になったが、選んで来て印をつけると、自然こういう結果になるということは興味あることで、もっと先きの巻に於ける家持の歌の場合と同じである。

○

蝦鳴く甘南備河にかげ見えて今か咲くらむ山吹の花　〔巻八・一四三五〕　厚見王

厚見王の歌一首。厚見王は続紀に、天平勝宝元年に従五位下を授けられ、天平宝字元年に従五位上を授けられたことが記されている。甘南備河は、甘南備山が飛鳥(雷丘)か竜田かによって、飛鳥川か竜田川かになるのだが、それが分からないからいずれの河としても味うことが出来る。一首は、蝦(河鹿)の鳴いている甘南備河に影をうつして、今頃山吹の花が咲いて居るだろう、というので、こだわりの無い美しい歌である。

此歌が秀歌として持てはやされ、六帖や新古今に載ったのは、流麗な調子と、「かげ見えて」、「今か咲くらむ」という、幾らか後世ぶりのところがあるためで、これが本歌になって模倣せられたのは、その後世ぶりが気に入られたものである。「逢坂の関の清水にかげ見えて今や引くらむ望月の駒」(拾遺・貫之)、「春ふかみ神なび川に影見えてうつろひにけり山吹の花」(金葉集)等の如くに、その歌調なり内容なりが伝播している。この歌は、全体としては稍軽いので、実際をいえば、このくらいの歌は万葉に幾つもあるのだが、この種類の一代表として選んだのである。参考歌に、「安積香山影さへ見ゆる山井の浅き心を吾が念はなくに」(巻十六・三八〇七)がある。

○

平常に聞くは苦しき喚子鳥こゑなつかしき時にはなりぬ　〔巻八・一四四七〕　大伴坂上郎女

大伴坂上郎女が、天平四年三月佐保の宅で詠んだ歌である。普段には、身につまされて寧ろ苦しいくらいな喚子鳥の声も、なつかしく聞かれる春になった、というので、奇もなく鋭いところもないが、季節の変化に対する感じも出ており、春の女心に触れることも出来るようなところがある。「時にはなりぬ」だけで詠歎のこもることは既にいった。佐保の宅というのは、

郎女の父大伴安麿の宅である。「春日なる羽易の山ゆ佐保の内へ鳴き行くなるは誰喚子鳥」(巻十・一八二七)、「答へぬにな喚び響めそ喚子鳥佐保の山辺を上り下りに」(同・一八二八)、「卯の花もいまだ咲かねば霍公鳥佐保の山辺に来鳴き響もす」(巻八・一四七七)等があって、佐保には鳥の多かったことが分かる。

○

波の上ゆ見ゆる児島の雲隠りあな気衝かし相別れなば　(巻八・一四五四)　笠金村

天平五年春閏三月、入唐使(多治比真人広成)が立つ時に、笠金村が贈った長歌の反歌である。一首は、あなたの船が出帆して、波の上から見える小島のように、遠く雲がくれに見えなくなって、いよいよお別れということになるなら、嗚呼吐息の衝かれることだ、悲しいことだ、というのである。此処でも、「波の上ゆ見ゆる」と「ゆ」を使っている。児島は備前児島だろうという説があるが、序の形式だから必ずしも固有名詞とせずともいい。「気衝かし」は、息衝くような状態にあること、溜息を衝かせるようにあるというので、いい語だとおもう。「味鴨の住む須佐の入江の隠り沼のあな息衝かし見ず久にして」(巻十四・三五四七)の用例がある。訣別の歌だから、稍形式になり易いところだが、海上の小島を以て来てその気持を形式化から救っている。

第四句が中心である。

○

神名火の磐瀬の杜のほととぎすならしの岳に何時か来鳴かむ　(巻八・一四六六)　志貴皇子

志貴皇子の御歌。磐瀬の杜は既にいった如く、竜田町の南方車瀬にある。ならしの丘は諸説あって一定しないが、磐瀬の杜の東南にわたる岡だろうという説があるから、一先ずそれに従って置く。この歌は、「ならしの丘に何時か来鳴かむ」と云って、霍公鳥の来ることを希望しているのだが、既に出た皇子の御歌の如く、おおどかの中に厳かなところがあり、感傷に淫せずになお感傷を暗指している点は独特の御風格というべきである。他の皇子の御歌と較べるから左程に思わぬが、そのあたりの歌を読んで来ると、やはり選は此歌に逢着するのである。此歌は一首に三つも地名が詠込まれている。「朝霞たなびく野べにあしひきの山ほととぎすいつか来鳴かむ」(巻十・一九四〇)の例があるが、民謡風だから「個」の作者が隠れて居り、それだけ呑気である。この近くにある、「もののふの磐瀬の杜の霍公鳥いまも鳴かぬか山のと陰に」(巻八・一四七〇)でも内容が似ているが、これも呑気である。

○

夏山の木末の繁にほととぎす鳴き響むなる声の遙けさ　〔巻八・一四九四〕　大伴家持

大伴家持の霍公鳥の歌であるが、「夏山の木末の繁」は作者の観たところであろうが、前出の、「山の際の遠きこぬれ」の方が旨いようにもおもう。「こゑの遙けさ」というのが此一首の中心で、現実的な強味がある。この巻（一五五〇）に、湯原王の、「秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴くなる鹿の声の遙けさ」も家持の歌に似ているが、家持の歌のまさっているのは、実際的のひびきがあるためである。然るに巻十（一九五二）に、「今夜のおぼつかなきに霍公鳥鳴くなる声の音の遙けさ」というのがあり、家持はこれを模倣しているのである。併し、「夏山の木末の繁に」といって生かしているのを後代の吾等は注意していい。「繁に」は槻落葉にシゲニと訓んでいる。

○

夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かず寝宿にけらしも　〔巻八・一五一一〕　舒明天皇

秋雑歌、崗本天皇（舒明天皇）御製歌一首である。小倉山は恐らく崗本宮近くの山であろうが、その辺に小倉山の名が今は絶えている。一首の意は、夕がたになると、いつも小倉の山で鳴く鹿が、今夜は鳴かない、多分もう寝てしまったのだろうというのである。いつも妻をもとめて鳴いている鹿が、妻を得た心持であるが、結句は、必ずしも率寝の意味に取らなくともいい。御製は、調べ高くして潤いがあり、豊かにして弛まざる、万物を同化包摂したもう親愛の御心の流露であって、「いねにけらしも」の一句はまさに古今無上の結句だとおもうのである。第四句で、「今夜は鳴かず」と、其処に休止を置いたから、結句は独立句のように、豊かにして逼らざる重厚なものとなったが、よく読めばおのずから第四句に縷の如くに続き、また一首全体に響いて、気品の高い、いうにいわれぬ歌調となったものである。「いねにけらしも」は、親愛の大御心であるが、素朴・直接・人間的・肉体的で、後世の歌にこういう表現のないのは、総べてこういう特徴から歌人の心が遠離して行ったためである。此御歌は万葉集中最高峰の一つとおもうので、その説明をしたい念願を持っていたが、実際に当ると好い説明の文を作れないのは、この歌は渾一体の境界にあってこまごまし い剖析をゆるさないからであろうか。

此歌の第三句、旧板本「鳴鹿之」となっているから、訓は「ナクシカノ」である。然るに古鈔本（類・神・西・温・矢・京）には、「之」の字が「者」となって居り、また訓も「ナクシカハ」（類・神・温・矢・京）となって居るのがある。注釈書では既に拾穂抄でこれを注意し、代匠記で、

官本之作レ者、点云、ナクシカハ。別校本或同レ此。幽斎本之作レ者、点云、ナクシカノ、と注した。そこで近時、「ナクシカハ」の訓に従うようになったが、古今六帖には、「鳴く鹿の」となって居り、又幽斎本では鳴鹿者と書いて、「ナクシカノ」と訓んで、また旧板本は鳴鹿之であるから、「ナクシカノ」という訓も古くからあったことが分かる。もっとも、「鳴鹿之」は巻九巻頭の、「臥鹿之」の「之」に拠って直したとも想像することも出来るが、兎も角長い期間「鳴く鹿の」として伝わって来ている。今となって見れば、「鳴く鹿は」の方は、「今夜は」と続いて、古調に響くから、「鳴く鹿は」の方が原作かも知れないけれども、「鳴く鹿の」としても、充分味うことの出来る歌である。

なお、一寸前言した如く、巻九(一六六四)に、雄略天皇御製歌として、「ゆふされば小倉の山に臥す鹿の今夜は鳴かず寐ねにけらしも」という歌が載っていて、二つとも類似歌であるがどちらが本当だか審でないから、累ねて載せたという左注がある。併し歌調から見て、雄略天皇御製とせば少し新し過ぎるようだから、先ず舒明天皇御製とした方が適当だろうという説が有力である。なお小倉山であるが、「白雲の竜田の山の、滝の上の小鞍の峯」(巻九・一七四七)は、竜田川(大和川)の亀の瀬岩附近、竜田山の一部である。それから、この(一六六四)が雄略天皇の御製とせば、朝倉宮近くであるから、今の磯城郡朝倉村黒崎*に近い山だろうということも出来る。それに舒明天皇の高市岡本宮近くにある小倉山と、仮定のなかに入る小倉山が三つある

わけである。併し、舒明天皇の御製でも、若しも行幸でもあって竜田の小鞍峯あたりでの吟咏とすると、小倉山考証の疑問はおのずから氷釈するわけであるけれども、「今夜は鳴かず」とことわっているから、ふだんにその鹿の声を御聞きになったことを示し、従って岡本宮近くに小倉山という名の山があったろうと想像することとなるのである。

○

今朝の朝け雁がね聞きつ春日山もみぢにけらし吾がこころ痛し　〔巻八・一五一三〕　穂積皇子

穂積皇子の御歌二首中の一つで、一首の意は、今日の朝に雁の声を聞いた、もう春日山は黄葉したであろうか。身に沁みて心悲しい、というので、作者の心が雁の声を聞き黄葉を聯想しただけでも、心痛むという御境涯にあったものと見える。そしてなお推測すれば但馬皇女との御関係があったのだから、それを参考するとおのずから解釈出来る点があるのである。何れにしても、第二句で「雁がね聞きつ」と切り、第四句で「もみぢにけらし」と切り、結句で「吾が心痛し」と切って、ぽつりぽつりとしている歌調はおのずから痛切な心境を暗指するものである。前の志貴皇子の「石激る垂水の上の」の御歌などと比較すると、その心境と声調の差別を明らかに知ることが出来るのである。もう一つの皇子の御歌は、「秋萩は咲きぬべからし吾

が屋戸の浅茅が花の散りぬる見れば」（巻八・一五一四）というのである。なお、近くにある、但馬皇女の、「言しげき里に住まずは今朝鳴きし雁にたぐひて行かましものを」（同・一五一五）という御歌がある。皇女のこの御歌も、穂積皇子のこの御歌と共に読味うことが出来る。共に恋愛情調のものだが、皇女のには甘く逼る御語気がある。

○

秋の田の穂田を雁がね闇けくに夜のほどろに
も鳴き渡るかも　〔巻八・一五三九〕　聖武天皇

天皇御製とあるが、聖武天皇御製だろうと云われている。「秋の田の穂田を」までは序詞で、「刈り」と「雁」とに掛けている。併しこの序詞は意味の関聯があるので、却って序詞としては巧みでないのかも知れない。御製では、「闇けくに夜のほどろにも鳴きわたるかも」に中心があり、闇中の雁、暁天に向う夜の雁を詠歎したもうたのに特色がある。「夜のほどろ我が出てくれば吾妹子が念へりしくし面影に見ゆ」（巻四・七五四）等の例がある。

○

夕月夜心も萎に白露の置くこの庭に蟋蟀鳴く
も　〔巻八・一五五二〕　湯原王

湯原王の蟋蟀の歌で、夕方のまだ薄い月の光に、白露のおいた庭に蟋蟀が鳴いている。それを聞くとわが心も萎々とする、というのである。後世の歌なら、助詞などが多くて弛むところであろうが、そこを緊張せしめつつ、句と句とのあいだに、間隔を置いたりして、端正で且つ感の深い歌調を全うしている。「心も萎に」は、直ぐ、「白露の置く」に続くのではなく、寧ろ、「蟋蟀鳴く」に関聯しているのだが、そこが微妙な手法になっている。いずれにしても、分かりよくて、平凡にならなかった歌である。

○

あしひきの山の黄葉今夜もか浮びゆくらむ山
川の瀬に　〔巻八・一五八七〕　大伴書持

大伴書持の歌である。書持は旅人の子で家持の弟に当る。天平十八年に家持が書持の死を痛んだ歌を作っているから大体その年に死去したのであろう。此一首は天平十年冬、橘宿禰奈

良麿の邸で宴をした時諸人が競うて歌を詠んだ。皆黄葉を内容としているが書持の歌い方が稍趣を異にし、夜なかに川瀬に黄葉の流れてゆく写象を心に浮べて、「今夜もか浮びゆくらむ」と詠歎している。ほかの人々の歌に比して、技巧の足りない稚拙のようなところがあって、何時か私の心を牽いたものだが、今読んで見ても幾分象徴詩的なところがあっておもしろい。また所謂万葉的常套を脱しているのも注意せらるべく、万葉末期の、次の時代への移行型のようなものかも知れぬが、そういう種類の一つとして私は愛惜している。そして天平十年が家持二十一歳だとせば、書持はまだ二十歳にならぬ頃に作った歌ということになる。

書持の兄、家持が天平勝宝二年に作った歌に、「夜くだちに寝覚めて居れば河瀬尋め情もしぬに鳴く千鳥かも」(巻十九・四一四六)というのがある。この「河瀬尋め」あたりの観照の具合に、「浮びゆくらむ」と似たところがあるのは、この一群歌人相互の影響によって発育した歌境だかも知れない。

○

大口の真神の原に降る雪はいたくな降りそ家もあらなくに　〔巻八・一六三六〕　舎人娘子

舎人娘子の雪の歌である。舎人娘子の伝は未詳であるが、巻二(一一八)に舎人皇子に和え奉

った歌があり、大宝二年の持統天皇参河行幸従駕の作、「丈夫が猟矢たばさみ立ち向ひ射る的形は見るにさやけし」(巻一・六一)があるから、持統天皇に仕えた宮女でもあろうか。真神の原は高市郡飛鳥*にあった原で、「大口の」は、狼(真神)の口が大きいので、真神の枕詞とした。

この歌は、独詠歌というよりも誰かに贈った歌の如くである。そして、持統天皇従駕作の如くに、儀容を張らずに、ありの儘に詠んでいて、贈った対者に対する親愛の情のあらわれている可憐な歌である。「家もあらなくに」の結句ある歌は既に記した。

○

沫雪のほどろほどろに零り重けば平城の京師し念ほゆるかも　〔巻八・一六三九〕　大伴旅人

大伴旅人が筑紫太宰府にいて、雪の降った日に京を憶った歌である。「ほどろほどろ」は、沫雪の降った形容だろうが、沫雪は降っても消え易く、重量感からいえば軽い感じである。厳冬の雪のように固着の感じの反対で消え易い感じである。そういう雪を、ハダレといい、副詞にしてハダラニともいい、ホドロニと転じたものであろうか。「夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭もはだらにみ雪降りたり」(巻十・二三一八)とあって、一に云う、「庭もほどろに雪ぞ降りたる」とあるから、「はだらに」、「ほどろに」同義に使ったもののようである。また、「吾背子を今か

今かと出で見れば沫雪ふれり庭もほどろに」(同・二三二三)とあり、軽く消え易いように降るので、分量の問題でなく感じの問題であるようにおもえる。沫雪は消え易いけれども、降る時には勢いづいて降る。そこで、旅人の此歌も、「ほどろほどろに」と繰返しているのは、旅人はそう感じて繰返したのであろうから、分量の少い、薄く降るという解釈とは合わぬのである。特に「零り重けば」であるから、単に「薄い雪」をハダレというのでは解釈がつかない。また、「はだれ降りおほひ消なばかも」(同・二三三七)の例も、薄く降るというよりも盛に降る心持である。そこで、ハダレは繊細に柔かに降り積る雪のことで、ホドロホドロニは、そういう柔かい感じの雪が、勢いづいて降るということになりはしないか。ホドロホドロと繰返したのは旅人のこの一首のみで、模倣せられずにしまった。

この一首は、前にあった旅人の歌同様、線の太い、直線的な歌いぶりであるが、感慨が浮調子でなく真面目な歌いぶりである。細かく顫う哀韻を聴き得ないのは、憶良などの歌もそうだが、この一団の歌人の一つの傾向と看做し得るであろう。

○

吾背子と二人見ませば幾許かこの零る雪の懽しからまし　〔巻八・一六五八〕　光明皇后

藤皇后(光明皇后)が聖武天皇に奉られた御歌である。皇后は藤原不比等の女、神亀元年二月聖武天皇夫人。ついで、天平元年八月皇后となられたまい、天平宝字四年六月崩御せられた。御年六十。この美しく降った雪を、若しお二人で眺めることが叶いましたならば、どんなにかお懽しいことでございましょう、というのである。斯く尋常に、御おもいの儘、御会話の儘を伝えているのはまことに不思議なほどである。特に結びの、「懽しからまし」の如き御言葉を、皇后の御生涯と照らしあわせつつ味い得るということの、多幸を私等はおもわねばならぬのである。「見ませば」は、「草枕旅ゆく君と知らませば」(巻一・六九)、「悔しかも斯く知らませば」(巻五・七九七)、「夜わたる月にあらませば」(巻十五・三六七一)等の例と同じく、マセはマシという助動詞の将然段に条件づけた云い方で、知らましせば、あらましせば、見ましせばぐらいの意であろうか。精しいことは専門の書物にゆずる。なお「あしひきの山より来せば」(巻十・二一四八)も参考になろうか。ウレシという語も、「何すとか君を厭はむ秋萩のその初花の歓しきものを」(同・二二七三)などの用法と殆ど同じである。

○

巨椋の入江響むなり射部人の伏見が田居に雁渡るらし　〔巻九・一六九九〕　柿本人麿歌集

宇治河にて作れる歌二首の一つで、人麿歌集所出の歌である。巨椋の入江は山城久世郡の北にあり、今の巨椋池である。「射部人」は、鹿猟の時に、隠れ臥して弓を射るから、「伏」に聯ねて枕詞とした。「高山の峯のたをりに、射部立てて猪鹿待つ如」(巻十三・三二七八)の例がある。一首の意は、いま巨椋の入江に大きい音が聞こえている。これは群雁が伏見の水田の方に渡ってゆく音らしい、というので、「入江響むなり」と、ずばりと云い切って、雁の群れ立つその羽音と鳴声とを籠めているのも古調のいいところである。そして、斯ういう使い方は万葉にも少く、普通は、鳴きとよむ、榜ぎとよむ、鳥が音とよむ等、或は「山吹の瀬の響むなべ」(巻九・一七〇〇)、「藤江の浦に船ぞ動める」(巻六・九三九)ぐらいの用例である。それも響、動をトヨムと訓むことにしての例である。そうして見れば、「入江響むなり」の用例は簡潔で巧なものだと云わねばならない。この句は旧訓ヒビクナリであったのを、代匠記で先ず注意訓をして「響ハトヨムトモ読ベシ」と云い、略解から以降こう訓むようになったのである。調べが大きく、そして何処かに鋭い響を持っているところは、或は人麿的だと謂うことが出来るであろう。ついでに云うと、この歌の、「田居に」の「に」は方嚮をも含んでいる用例で、「小野ゆ秋津に立ちわたる雲」(巻七・一三六八)、「京方に立つ日近づく」(巻十七・三九九九)、「山の辺にい行く猟師は」(巻十・二一四七)等の「に」と同じである。

○

さ夜中と夜は深けぬらし雁が音の聞ゆる空に月渡る見ゆ　〔巻九・一七〇一〕　柿本人麿歌集

弓削皇子に献った歌三首中の一つで、人麿歌集所出である。一首は、もう夜が更けたと見え、雁の鳴きつつとおる空に、月も低くなりかかっている、というので、「月わたる」は、月が段々移行する趣で、傾きかかるということになる。ありの儘に淡々といい放っているのだが、決してただの淡々ではない。これも本当の日本語で日本的表現だということも出来るほどの、流暢にしてなお弾力を失わない声調である。先学はこの歌にも寓意を云々し、「弓削皇子にたてまつる歌なれば、をのをのふくめる心あるべし」(代匠記初稿本)、「いかで早く御恩沢を下したまへかし。と身のほどを下心に訴るならむ」(古義)等と云うが、これだけの自然観照をしているの

に、寓意寓意といって、官位の事などを混入せしめるのは、歌の鑑賞の邪魔物である。

○

うちたをり多武の山霧しげみかも細川の瀬に波の騒げる　〔巻九・一七〇四〕　柿本人麿歌集

舎人皇子に献った歌二首中の一首で、「拑手折」をウチタヲリと訓むにつき未だ精確な考証はない。「打手折撓む」という意から、同音の、「多武」に続けた。多武峰は高市郡にある、今の塔の峯、談山神社のある談山である。細川は飛鳥川の支流、多武峰の西にあって、細川村と南淵村の間を過ぎて飛鳥川に注いでいる。一首の意は、多武の峰に雲霧しげく風が起って居るのか、細川の瀬に波が立って音が高い、というのである。

こういう自然観入は、既に、「弓月が岳に雲たちわたる」の歌でも云った如く、余程鋭敏に感じたものと見える。そして人麿歌集所出の歌だから、恐らく人麿の作であろう。なおこの歌の傍に、「ぬばたまの夜霧は立ちぬ衣手を高屋の上に棚引くまでに」(巻九・一七〇六)という舎人皇子の御歌がある。「衣手を」を、枕詞として「たか」に続けたのは、タク(カカグ)という意だろうという説がある。高屋は地名であろうが、その存在は未詳である。この御歌の調べ高いのは、やはり時代的関係で人麿などを中心とする交流のためだかも知れない。この歌にも寓意を考え、

「此歌上句ハ佞人ナドノ官ニ在テ君ノ明ヲクラマシテ恩光ヲ隔ルニ喩ヘ、下句ハソレニ依テ細民ノ所ヲ得ザルヲ喩フル歟」(代匠記)等というが、こういう解釈の必要は毫も無い。

○

御食むかふ南淵山の巌には落れる斑雪か消え残りたる　〔巻九・一七〇九〕　柿本人麿歌集

弓削皇子に献った歌一首という題があり、人麿歌集所出の歌である。「御食むかふ」は、御食に供える物の名に冠らせる詞で、此処の南淵山に冠らせたのは、蜷貝か、御魚かのミナの音に依ってであろう。当時は蜷貝を食用としたから、こういう枕詞が出来たものである。南淵山は高市郡高市村字冬野から稲淵にかけた山である。

一首の意は、南淵山を見ると、巌の上に雪が残っておる、これは先ごろ降った春の斑雪であろう、というので、叙景の歌で、こういう佳景を歌に詠んで、皇子に献じたもので、寓意などは無かろうのに、先学等は「下心あるべし」などと云って、寓意を「皇子の御恩光にもれしを訴るやうによみて献れるにや、さてこの作者南淵氏の人などにてありしにや」(古義)と云々しているのは、学者等の一つの迷いである。この歌は叙景歌として、しっとりと落着いて、重厚にして単純、清厳とも謂うべき一首の味いである。「巌には」の「には」、「降れる斑雪か」の

「か」のあたりに、微かに息を休めてしずかな感情を湛え、結句の、「消え残りたる」は、迫らない静かなゆらぎを持った句で、清厳の気は大体ここに発している。

この歌は、結局原本、「削遺有」とあるので、旧訓チルナミ・タレカ・ケヅリ・ノコセルであったのを、真淵の考で、千蔭の説により、「削」は「消」だとして、フレルハダレカ・キエノコリタルと訓んだ。この真淵の訓以前は、甚だしく面倒な解釈をしていたので、無理が多くて、一首の妙味を発揮することの出来なかったものである。作者と南淵山との位置関係は、「弓削皇子ノオハシマス宮ヨリ南淵山ノマヂカク指向ヒテ見ユル」(代匠記)ところであったかとおもう。

○

落ちたぎち流るる水の磐に触り淀める淀に月の影見ゆ　〔巻九・一七一四〕　作者不詳

芳野宮に行幸あった時の歌だが、その御代も不明だし作者もまた不明である。一首の意は、いきおいよく激って流れて来た水が、一旦巌石に突当って、其処に淵をなしている。その淵に月影が映っている、というので、水面の月光を現に見て居る光景だが、その水面の説明をも加えている。淵の出来ている具合と、激流との関係をも叙しているから、全体が益々印象明瞭と

なった。前半を直線的に云い下したから、「淀める淀」と云って曲線的に緊めている。以前この「淀める淀」という繰返しを気にしたが、或はこれが自然的な技法なのかも知れないし、それから「水の磐に触り」の「の」などもやはり、「の」が最も適切な助詞として受取るべきもののようである。結句もまた落付いていて大家の風格を持ったものである。此歌と一しょにある一首は、「滝の上の三船の山ゆ秋津べに来鳴きわたるは誰喚子鳥」(巻九・一七一三)というのだが、これも相当な作で、恐らく藤原宮時代のものであろうか。真淵などもこの二首を人麿作ではなかろうかとさえ云っているほどである。

○

楽浪の比良山風の海吹けば釣する海人の袂かへる見ゆ　〔巻九・一七一五〕　柿本人麿歌集

槐本歌一首とあるもので、槐本は柿本の誤写で人麿の作だろうという説がある。一首の意は、近江の楽浪の比良山を吹きおろして来る風が、湖水のうえに至ると、釣している漁夫の袖の翻るのが見える、という極く単純な内容であるが、張りある清潔音の連続で、ゆらぎの大きい点も人麿調を聯想せしめるし、人麿歌集出の歌だから、先ず人麿作と云っていいものであろう。この歌の上の句ほどの程度の、諧調音でも吾々が作るとなれば、なかなか容易のわざではない。

○

泊瀬河夕渡り来て我妹子が家の門に近づきにけり　〔巻九・一七七五〕　柿本人麿歌集

舎人皇子に献った歌二首中の一つで、人麿歌集に出でたものである。「門」をカナドと訓んだのは、「金門にし人の来立てば」(巻九・一七三九)等の例に拠ったので、「金門」で単に「門」という意味に使っている。一首の意味は、恋歌で、恋しい女の家に近づいた趣だが、快い調子を持って居り、伸々と、無理なく情感を湛えている点で、選ぶとせば選ばれる歌である。ただ舎人皇子に献った歌だというので、何か寓意を考え、「此歌モ亦下意アル歟。君ガ恩恵ヲ近ク蒙ルベキ事ハ、譬ヘバ人ノ夕去バ必ラズ逢ハムト契リタラムニ、泊瀬川ノ早キ瀬ヲカラウジテ渡リ来テ其家近ク成タルガ如シトヨメル歟」(代匠記)等と詮索しがちであるが、これは何かの機に作ったもので、自分でも稍出来の好い歌だというので、皇子に献ったものでもあろうか。さすれば、普通の恋歌として味っていいわけである。泊瀬川は長谷の谿を流れ、遂に佐保川に合する川である。

○

旅人の宿りせむ野に霜降らば吾が子羽ぐくめ天の鶴群　〔巻九・一七九一〕　遣唐使随員の母

天平五年夏四月、遣唐使(多治比真人広成)の船が難波を出帆した時、随行員の一人の母親が詠んだ歌である。長歌は、「秋萩を妻問ふ鹿こそ、一子に子持たりといへ、鹿児じもの吾が独子の、草枕旅にし行けば、竹珠を繁に貫き垂り、斎戸に木綿取り垂でて、斎ひつつ吾が思ふ吾子、真幸くありこそ」(巻九・一七九〇)というのである。

この短歌の意は、私の一人子が、遠く唐に行って宿るだろう、その野原に霜が降ったら、天の群鶴よ、翼を以て蔽うて守りくれよ、というのである。この歌の「はぐくむ」は翼で蔽うて愛撫する意だが、転じて養育することとなった。史記周本紀に、「飛鳥其翼を以て之を覆薦す」の例がある。「武庫の浦の入江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし」(巻十五・三五七八)、「大船に妹乗るものにあらませば羽ぐくみもちて行かましものを」(同・三五七九)があり、新羅に行く使者等の歌だから同じような心持があらわれている。なお、「天飛ぶや雁のつばさの覆羽の何処漏りてか霜の零りけむ」(巻十・二二三八)の例がある。

母親がひとり子の遠い旅を思う心情は一とおりでないのだが、天の群鶴にその保護を頼むと

いうのは、今ならば文学的の技巧を直ぐ聯想するし、実際また詩的に表現しているのである。けれども当時の人々は吾々の今感ずるよりも、もっと自然に直接にこういうことを感じていたものに相違ない。それは万葉の他の歌を見ても分かるし、物に寄する歌でも、序詞のある歌でも、吾等の考えるよりももっと直接に感じつつああいう技法を取ったものに相違ない。そこで此歌でも、毫もこだわりのない純粋な響を伝えているのである。もの云いに狐疑が無く不安が無く、子をおもうための願望を、ただその儘に云いあらわし得たのである。併し、歌調は天平に入ってからの他の歌とも共通し、概して分かりよくなっている。

○

潮気たつ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とぞ来し　〔巻九・一七九七〕　柿本人麿歌集

「紀伊国にて作れる歌四首」という、人麿歌集出の歌があるが、その中の一首である。「行く水の」は、「過ぎ」に続く枕詞。「過ぐ」は死ぬる事である。一首の意は、潮煙の立つ荒寥たるこの磯に、亡くなった妻の形見と思って来た、というのだが、句々緊張して然かも情景ともに哀感の切なるものがある。この歌は、巻一(四七)の人麿作、「真草苅る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ来し」というのと類似しているから、その手法傾向の類似によって、此歌

も亦人麿作だろうと想像することが出来るであろう。巻二(一六二)に、「塩気のみ香れる国に」の例がある。

他の三首は、「黄葉の過ぎにし子等と携はり遊びし磯を見れば悲しも」(巻九・一七九六)、「古に妹と吾が見しぬばたまの黒牛潟を見ればさぶしも」(同・一七九八)、「玉津島磯の浦回の真砂にも染ひて行かな妹が触りけむ」(同・一七九九)というので、いずれも哀深いものである。

○

ひさかたの天の香具山このゆふべ霞たなびく
春立つらしも　〔巻十・一八一二〕　柿本人麿歌集

春雑歌、人麿歌集所出である。この歌は、香具山を遠望したような趣である。少くも歌調からいえば遠望であるが、香具山は低い山だし、実際は割合に近いところ、藤原京あたりから眺めたのであったかも知れない。併し一首全体は伸々としてもっと遠い感じだから、現代の人はそういう具合にして味ってかまわぬ。それから、「この夕べ」とことわっているから、はじめて霞がかかった、はじめて霞が注意せられた趣である。春立つというのは暦の上の立春というのよりも、春が来るというように解していいだろう。

この歌は或は人麿自身の作かも知れない。人麿の作とすれば少し楽に作っているようだが、極めて自然で、佶屈でなく、人心を引入れるところがあるので、有名にもなり、後世の歌の本歌ともなった。併しこの歌は未だ実質的で写生の歌だが、万葉集で既にこの歌を模倣したらしい形跡の歌も見つかるのである。

○

子等が名に懸けのよろしき朝妻の片山ぎしに
霞たなびく　〔巻十・一八一八〕　柿本人麿歌集

人麿歌集出。朝妻山は、大和南葛城郡葛城村大字朝妻*にある山で、金剛山の手前の低い山である。「片山ぎし」は、その朝妻山の麓で、一方は平地に接しているところである。「子等が名に懸けのよろしき」までは序詞の形式だが、朝妻という山の名は、いかにも好い、なつかしい名の山だというので、この序詞は単に口調の上ばかりのものではないだろう。この歌も一気に詠んでいるようで、ゆらぎのあるのは或は人麿的だと謂っていいだろう。気持のよい、人をして苦を聯想せしめない種類のもので、やはり万葉集の歌の一特質をなしているものである。

この歌と一しょに、「巻向の檜原に立てる春霞おほにし思はばなづみ来めやも」(巻十・一八一三)というのがある。これは、上半を序詞とした恋愛の歌だが、やはり巻向の檜原を常に見ている人の趣向で、ただ口の先の技巧ではないようである。それが、「おほ」という、一方は霞がほんのりとかかっていること、一方はおろそかに思うということの両方に掛けたので、此歌も歌調がいかにも好く棄てがたいのであるから、此処に置いて味うことにした。

○

春霞ながるるなべに青柳の枝くひもちて鶯鳴くも　〔巻十・一八二一〕　作者不詳

春雑歌、作者不詳。春霞が棚引きわたるにつれて、鶯が青柳の枝をくわえながら鳴いているというので、春の霞と、萌えそめる青柳と、鶯の声とであるが、鶯が青柳をくわえるように感じて、その儘こうあらわしたものであろうが、まことに好い感じで、細かい詮議の立入る必要の無いほどな歌である。併し、少し詮議するなら、はやくも萌えそめた柳を鶯が保持している感じである。柳の萌えに親しんで所有する感じであるが、鶯だから啄んで持つといったので、「くひもつ」は鶯にかかるので、「鳴く」にかかるのではない。また、ただ鶯といわずに、青柳の枝を啄えている鶯というのだから、写象もその方が複雑で気持がよい。その鶯がうれしくて鳴くというのである。詮議すればそうだが、それを単純化してかく表わすのが万葉の歌の一つの特色でもあり、佳作の一つと謂うべきである。この歌と一しょに、「うち靡く春立ちぬらし吾が門の柳の末に鶯鳴きつ」(巻十・一八一九)があるが、平凡で取れない。また、「うち靡く春さり来れば小竹の末に尾羽うち触りて鶯鳴くも」(同・一八三〇)というのもあり、これも鶯の行為をこまかく云っている。鶯に親しむため、「尾羽うち触り」などというので、「枝くひもちて」という

のと同じ心理に本づくのであろう。

○

春されば樹の木の暗の夕月夜おぼつかなしも山陰にして　〔巻十・一八七五〕　作者不詳

作者不詳。春になって木が萌え茂り、またそれが山陰であるので、そうでなくとも光のうすい夕月夜が、一層薄くほのかだという歌である。巧みでない寧ろ拙な部分の多い歌であるが、「おぼつかなしも」の句に心ひかれて此歌を抜いた。「この夜のおぼつかなきに霍公鳥」(巻十・一九五二)の例がある。

○

春日野に煙立つ見ゆ嫗媼等し春野の菟芽子採みて煮らしも　〔巻十・一八七九〕　作者不詳

菟芽子は巻二の人麿の歌にもあった如く、和名鈔に薺蒿で、今の嫁菜である。春日野は平城の京から、東方にひろがっている野で、その頃人々は打連れて野遊に出たものであった。「春日野の浅茅がうへに思ふどち遊べる今日は忘らえめやも」(巻十・一八八〇)という歌を見ても分か

る。この歌で注意をひいたのは、野遊に来た娘たちが、嫁菜を煮て食べているだろうというので、嫁菜などは現代の人は余り珍重しないが、当時は野菜の中での上品であったものらしい。和かな春の野に娘等を配し、それが野菜を煮ているところを以て一首を作っているのが私の心を牽いたのであった。

○

百礒城の大宮人は暇あれや梅を挿頭してここに集へる　〔巻十・一八八三〕　作者不詳

「百礒城の」は大宮にかかる枕詞で、百石城即ち、多くの石を以て築いた城という意で大宮の枕詞とした。一首の意は、今日は御所に仕え申す人達も、お閑であろうか、梅花を挿頭にして、此処の野に集っていられる、というので、長閑な光景の歌である。「大宮人は暇あれや」の「は」は、一寸聞くと、御役人などというものは暇なものであるだろう、というように取れるが、実はそういう意味でなく、現在大宮人の野遊を見て推量したのだから、「今日は御役人は暇があるのか」ぐらいに解釈すべきところで、奈良朝の太平豊楽を讃美する気持が作歌動機にあるのである。

○

春雨に衣は甚く通らめや七日し零らば七夜来じとや　〔巻十・一九一七〕　作者不詳

これは、女から男にやった歌の趣で、あなたは春雨が降ったので来られなかったと仰しゃるけれど、あのくらいの雨なら、そんなに衣が沾れ通るという程ではございますまい。そういう事なら、若し雨が七日間降りつづいたら、七晩とも御いでにならぬと仰しゃるのでございますか、というのである。女が男に迫る語気まで伝わる歌で、如何にもきびきびと、才気もあっておもしろいものである。こういう肉声をさながら聴き得るようなものは、平安朝になるともう無い。和泉式部がどうの、小野小町がどうのと云っても、もう間接な機智の歌になってしまって居る。

○

卯の花の咲き散る岳ゆ霍公鳥鳴きてさ渡る君は聞きつや　〔巻十・一九七六〕　作者不詳

問答歌で、この歌は問で、答歌は「聞きつやと君が問はせる霍公鳥しぬぬに沾れて此ゆ鳴き

わたる」(巻十・一九七七)というのであるが、問の方がやはり旨く、答の方は「鳴きわたる」などを繰返しているが、余程劣るようである。問答歌で、相手があるのだから、「君は聞きつや」で好い筈だが、こう単純にはなかなか行かぬものである。また、「卯の花の咲き散る岳ゆ」と云って印象を鮮明にしているのも、技巧がなかなか旨いのである。「岳ゆ」の「ゆ」は、「より」の意で、「鳴きてさ渡る」という運動してゆく語に続いている。「咲き散る」という云いあらわし方も、時間を含めたもので、咲くのもあり散るのもあるからであるが、簡潔で旨い。「梅の花咲き散る苑にわれ行かむ」(同・一九〇〇)、「秋萩の咲き散る野べの夕露に」(同・二二五二)等の例がある。普通は、「梅の花わぎへの苑に咲きて散る見ゆ」(巻五・八四一)という具合に、「て」の入っているのが多い。

○

真葛原なびく秋風吹くごとに阿太の大野の萩が花散る　〔巻十・二〇九六〕　作者不詳

「阿太の野」は、今の吉野、下市町の西に大阿太村*がある。その附近一帯の原野であっただろう。葛の生繁っているのを靡かす秋風が吹く度毎に、阿太の野の萩が散るというのだが、二つとも初秋のものだし、一方は広葉の翻えるもの、一方はこまかい紅い花というので、作者の

頭には両方とも感じが乗っていたものである。それを、「吹く毎に」で融合させているので、稚拙なところに、却って古調の面目があらわれて居る。特に、「阿太の大野の萩が花散る」の、諸調音はいうに云われぬものである。

○

秋風に大和へ越ゆる雁がねはいや遠ざかる雲がくりつつ　〔巻十・二一二八〕　作者不詳

「大和へ越ゆる」であるから、大和に接した国、山城とか、紀伊とか、或は旅中にあって、遠く大和の方へ行く雁を見つつ詠んだものであろう。空遠く段々見えなくなる光景で、家郷をおもう情がこもっているのである。初句の、「秋風に」という云い方は、簡潔で特色のあるものだが、後世こういう云い方が繰返されたので陳腐になった。やはりこの巻(二一三六)に、「秋風に山飛び越ゆる雁がねの声遠ざかる雲隠るらし」というのがあるが、この方は声を聞いて、「雲がくるらし」と推量しているので、伝誦のあいだに変化して通俗的に分かりよくなったものであろう。即ち二一三六の方が劣るのである。

○

朝にゆく雁の鳴く音は吾が如くもの念へかも
声の悲しき　〔巻十・二一三七〕　作者不詳

作者不明。初句、旧訓ツトニユク、古鈔本中、ケサ又はアサと訓んだのがある。いま朝早く、飛んで行く雁の鳴く声は、何となく物悲しい。彼等もまた私のように物思しているからだろう、というのである。どういう物思かというに、妻恋をして、妻を慕いつつ飛んで行くという気持で、自分の心持を雁に引移して感じて居るのである。この歌の、「朝に」は時間をあらわすので、「朝に日に出で見る毎に」(巻八・一五〇七)、「朝な夕なに潜くちふ」(巻十一・二七九八)等の「に」と同じい。「物念へかも」は疑問の「かも」である。そう大した歌でないようでも、惻々とした哀韻があって棄てがたい。「鳴く音は」、「声の悲しき」で重複しているようだが、前は稍一般的、後は実質的で、他にも例がある。旅人の歌に、「湯の原に鳴く葦鶴はわが如く妹に恋ふれや時分かず鳴く」(巻六・九六一)というのがある。

○

山の辺にい行く猟夫は多かれど山にも野にも
さを鹿鳴くも　〔巻十・二一四七〕　作者不詳

作者不明。野にも山にもしきりに牡鹿が鳴いている。山のべに行く猟師は随分多いのだが、というので、猟師は恐ろしいものだが、それでも妻恋しさにあんなに鳴いているという、哀憐のこころで詠んだもので、西洋的にいうと、恋の盲目とでもいうところであろうか。そのあわれが声調のうえに出ている点がよく、第三句で、「多かれど」と感慨を籠めている。結句の、「鳴くも」の如きは万葉に甚だ多い例だが、古今集以後、この「も」を段々嫌って少くなったが、こう簡潔につめていうから、感傷の厭味に陥らぬとも謂うことが出来る。この歌の近くに、「山辺には猟夫のねらひ恐けど牡鹿鳴くなり妻の眼を欲り」(巻十・二一四九)というのがあるが、この方は常識的に露骨で、まずいものである。

○

秋風の寒く吹くなべ吾が屋前の浅茅がもとに
蟋蟀鳴くも　〔巻十・二一五八〕　作者不詳

「吹くなべ」は、吹くに連れてという意味なること、既に云った。この歌は既に選出した、「夕月夜心もしぬに白露のおくこの庭に蟋蟀鳴くも」(巻八・一五五二)に似ているが、「浅茅がもとに」というのが実質的でいいから取って置いた。結句の「も」は「さを鹿鳴くも」の「も」に等しい。万葉にはこの種類の歌がなかなか多いが皆相当なものだというのは、実質的で誤魔化さぬのと、奥に恋愛の心を潜めているからであるだろう。

○

秋萩の枝もとををに露霜置き寒くも時はなりにけるかも　〔巻十・二一七〇〕　作者不詳

初冬の寒露のことをツユジモと云った。宣長は玉勝間で単にツユのことだと考証しているが、必ずしもそう一徹に極めずに味うことの出来る語である。萩の枝が撓うばかりに露の置いた趣で、そう具体的に眼前のことを云って置いて、そして、「寒くも時はなりにけるかも」と主観を云っているが、感の深い云い方であるのは、「も」、「は」などの助詞を持っているからである。

○

九月の時雨の雨に沾れとほり春日の山は色づきにけり　〔巻十・二一八〇〕　作者不詳

この歌も伸々として、息をふかめて歌いあげて居る。「時雨のあめに沾れ通り」の句がこの歌を平板化から救って居るし、全体の具合から作者はこう感じてこう云って居るのである。「君が家の黄葉の早く落りにしは時雨の雨に沾れにけらしも」(巻十・二二一七)という歌があるが平板でこの歌のように直接的なずばりとしたところがない。また「霍公鳥しぬぬに沾れて」(同・一九七七)等の例もあり人間以外の沾れた用例の一つである。結句の「色づきにけり」というのは集中になかなか例も多く、「時雨の雨間なくし零れば真木の葉もあらそひかねて色づきにけり」(同・二一九六)もその一例である。

○

大坂を吾が越え来れば二上にもみぢ葉流る時雨零りつつ　〔巻十・二一八五〕　作者不詳

大坂は大和北葛城郡下田村*で、大和から河内へ越える坂になっている。二上山が南にあるか

ら、この坂を越えてゆくと、二上山辺の黄葉が時雨に散っている光景が見えたのである。「もみぢ葉ながる」の「ながる」は水の流ると同じ語原で、流動することだから、水のほかに、「沫雪ながる」というように雪の降るのにも使っている。併し、水の流るるように、幾らか横ざまに斜に降る意があるのであろう。「天の時雨の流らふ見れば」(巻一・八二)、「ながらふるつま吹く風の」(同・五九)を見ても、雨・風にナガルの語を使っていることが分かる。「二上に」と云って、「二上山に」と云わぬのもこの歌の一特色をなしている。

○

吾が門の浅茅色づく吉隠の浪柴の野のもみぢ
散るらし　〔巻十・二一九〇〕　作者不詳

「吉隠の浪柴の野」は、大和磯城郡、初瀬町*の東方一里にあり、持統天皇もこの浪芝野のあたりに行幸あらせられたことがある。自分の家の門前の浅茅が色づくを見ると、もう浪柴の野の黄葉が散るだろうと推量するので、こういう心理の歌が集中なかなか多いが、浪柴の野は黄葉の美しいので名高かったものの如く、また人の遊楽するところでもあったのであろう。そこでこの聯想も空漠でないのだが、私は、「浪柴の野のもみぢ散るらし」という歌調に感心したのであった。そして、「もみぢ散るらし」という結句の歌は幾つかあるような気がしていたが、実

際当って見ると、この歌一首だけのようである。

○

さを鹿の妻喚ぶ山の岳辺なる早田は苅らじ霜
は零るとも　〔巻十・二二二〇〕　作者不詳

早稲田だからもう稔っているのだが、牡鹿が妻喚ぶのをあわれに思って、それを驚かすに忍びないという歌である。それをば、「霜は降るとも」と念を押して、あわれに思うとか、同情してとかいう、主観語の無いのをも注意していい。岡辺という語は、「竜田路の岳辺の道に」(巻六・九七一)、「岡辺なる藤浪見には」(巻十・一九九一)等の例にある。こういう人間的とも謂うべき歌は万葉には多い。人間的というのは、有情非情に及ぼす同感が人間的にあらわれるという意味である。

○

思はぬに時雨の雨は零りたれど天雲霽れて月
夜さやけし　〔巻十・二二二七〕　作者不詳

思いがけず時雨が降ったけれど、いつのまにか天雲が無くなって、月明となったというだけ

のものであるが、言葉がいかにも精煉せられているようにおもう。それも専門家的の苦心惨憺というのでなくて、尋常の言葉で無理なくすらすらと云っていて、これだけ充実したものになるということは時代の賜といわなければならない。

○

さを鹿の入野のすすき初尾花いづれの時か妹が手まかむ　〔巻十・二二七七〕　作者不詳

この歌は、「いづれの時か妹が手まかむ」だけが意味内容で、何時になったら、恋しいあの児の手を纏いて一しょに寝ることが出来るだろうか、という感慨を漏らしたものだが、上は序詞で、鹿の入って行く入野、入野は地名で山城乙訓郡大原野村上羽*に入野神社がある。その入野の薄と初尾花と、いずれであろうかと云って、いずれの時かと続けたので、随分煩いほどな技巧を凝らしている。こういう凝った技巧は今となっては余り感心しないものだが、当時の人は骨折ったし、読む方でも満足した。併しこの歌で私の心を引いたのは、そういう序詞でなく、「いづれの時か妹が手纏かむ」の句にあったのである。聖徳太子の歌に、「家にあらば妹が手纏かむ草枕旅に臥せるこの旅人あはれ」(巻三・四一五)があった。

○

あしひきの山かも高き巻向の岸の子松にみ雪降り来る　〔巻十・二三一三〕　柿本人麿歌集

巻向は高い山だろう。山の麓の崖に生えている小松にまで雪が降って来る、というので、巻向は成程高い山だと感ずる気持がある。「岸」は前にもあったが、川岸などの岸と同じく、山と平地との境あたりで、なだれになっているのを云うのである。「山かも高き」というような云い方は既に幾度も出て来て、常套手段の如き感があるが、当時の人々は、いつもすうっとそういう云い方に運ばれて行ったものだろうから、吾々もそのつもりで味う方がいいだろう。「岸の小松にみ雪降り来る」の句を私は好いているが、小松は老松ではないけれども相当に高くとも小松といったこと、次の歌がそれを証している。

○

巻向の檜原もいまだ雲ゐねば子松が末ゆ沫雪流る　〔巻十・二三一四〕　柿本人麿歌集

巻向の檜林は既に出た泊瀬の檜林のように、広大で且つ有名であった。その檜原に未だ雨雲

が掛かっていないに、近くの松の梢にもう雪が降ってくる、という歌で、「うれゆ」の「ゆ」は、「ながる」という流動の動詞に続けたから、現象の移動をあらわすために「ゆ」と使った。消え易いだろうが、勢いづいて降ってくる沫雪の光景が、四三調の結句でよくあらわされている。この歌は人麿歌集出の歌だから、恐らく人麿自身の作であろう。

○

あしひきの山道も知らず白檀の枝もとををに
雪の降れれば　〔巻十・二三一五〕　柿本人麿歌集

これも人麿歌集出で、「山道も知らず」は道も見えなくなるまで盛に雪の降る光景だが、近くにある白檀の樹の枝の撓むまで降るのを見ている方が、もっと直接だから、そういう具合にひどく雪が降ったというのを原因のようにして、それで山道も見えなくなったと云いあらわしている。前に人麿の、「矢釣山木立も見えず降りみだる」(巻三・二六二)云々の歌があったが、歌調に何処かに共通の点があるようである。この一首は、或本には三方沙弥の作になっているという左注がある。

○

吾が背子を今か今かと出で見れば沫雪ふれり
庭もほどろに　〔巻十・二三二三〕　作者不詳

「庭もほどろに」は、「夜を寒み朝戸を開き出で見れば庭もはだらにみ雪降りたり」(巻十・二三一八)とあって、一云、「庭もほどろに雪ぞ降りたる」となって居るから、ハダラニ、ホドロニ同義であろう。既に旅人の歌のところで解釈した如く、柔かく消え易いような感じに降ったのをハダラニ、ホドロニというのであって、ただ「薄すらと」というのとは違うようである。「ハダレ霜」と熟したのも、消ゆるという感じと関聯している云いあらわしであろう。またハダラニ、ホドロニの例は、単に雪霜の形容であろうが、対手を憶い、慕い、なつかしむような場合に使っているのは注意すべきで、これも消え易いという特色から、おのずから其処に関聯せしめたものであろうか。この一首も、女が男の来るのを、今か今かと思って屢家から出て見る趣であるが、男が来ずに、夜にもなり、庭には、うら悲しいような、消え易いような、柔かい雪が降っている、というのである。どうしても、この「ほどろに」には、何かを慕い、何かを要求し、不満を充たそうとねがうような語感のあるとおもうのは、私だけの錯覚であろうか。「今か今か」と繰返したのも、女の語気が出ていてあわれ深い。

巻十二(二八六四)に、「吾背子を今か今かと待ち居るに夜の更けぬれば嘆きつるかも」。巻二十(四三一一)に、「秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月かたぶきぬ」がある。

○

はなはだも夜深けてな行き道の辺の五百小竹が上に霜の降る夜を　〔巻十・二三三六〕　作者不詳

「五百小竹」は繁った笹のことで、五百小竹の意だと云われている。もう繁った笹に霜が降ったころです、こんなに夜更にお帰りにならずに、暁になってからにおしなさい、といって、女が男の帰るのを惜しむ心持の歌である。全体が民謡風で、万人の唄うのにも適っているが、はじめは誰か、女一人がこういうことを云ったものであろう、そこに切にひびくものがあり、愛情の纏綿を伝えている。女が男の帰るのを惜しんでなるべく引きとめようとする歌は可なり万葉に多く、既に評釈した、「あかときと夜鳥鳴けどこのをかの木末のうへはいまだ静けし」(巻七・一二六三)などもそうだが、万葉のこういう歌でも実質的、具体的だからいいので、後世の「きぬぎぬのわかれ」的に抽象化してはおもしろくないのである。

巻第十一

○

新室を踏み鎮む子し手玉鳴らすも玉の如照り
たる君を内へと白せ　〔巻十一・二三五二〕　柿本人麿歌集

旋頭歌で、人麿歌集所出である。一首の意は、新しく家を造るために、その地堅め地鎮の祭を行うので、大勢の少女等が運動に連れて手飾の玉を鳴らして居るのが聞こえる。あの玉のように立派な男の方をば、この新しい家の中へおはいりになるように御案内申せ、というのである。この歌は大勢の若い女の心持が全体を領しているのであるが、そこに一人の美しい男を点出して、その男を中心として大勢の女の体も心も運動循環する趣である。一首の形式は、旋頭歌だから、「手玉鳴らすも」で休止となる。短歌なら第三句で序詞になるところであろうが、旋頭歌では第四句から新に起す特色がある。民謡風な労働につれてうたう労働歌というようなもので、重々しい調べのうちに甘い潤いもあり珍しいものだが、明かに人麿作と記されている歌に旋頭歌は一つもないのに、人麿歌集には纏まって旋頭歌が載って居り、相当におもしろいものばかりであるのを見れば、或は人麿自身が何かの機縁にこういう旋頭歌を作り試みたもので

あったのかも知れない。

○

長谷の五百槻が下に吾が隠せる妻茜さし照れ
る月夜に人見てむかも　〔巻十一・二三五三〕　柿本人麿歌集

旋頭歌。人麿歌集出。長谷は今の磯城郡初瀬町を中心とする地、泊瀬。五百槻は五百槻のことで、沢山の枝ある槻のことである。そこで、一首の意は、長谷(泊瀬)の、槻の木の茂った下に隠して置いた妻。月の光のあかるい晩に誰かほかの男に見つかったかも知れんというので、上と下と意味が関聯している。併し旋頭歌だから、下から読んでも意味が通じるのである。この歌も民謡的だが、素朴でいかにも当時の風俗が分かっておもしろい。旋頭歌の調子は短歌の調子と違ってもっと大きく流動的にすることが出来る。内容もまた複雑にすることが出来るが、それをするといけない事を意識して、却って単純にするために繰返しを用いている。

○

愛しと吾が念ふ妹は早も死ねやも生けりとも吾に
依るべしと人の言はなくに　〔巻十一・二三五五〕　柿本人麿歌集

旋頭歌。人麿歌集出。一首の意。可哀くおもう自分のあの女は、いっそのこと死んでしまわないか、死ぬ方がいい。縦い生きていようとも、自分に靡き寄る見込が無いから、というので、これも旋頭歌だからどちらから読んでもいい。強く愛している女を独占しようとする気持の歌で、今読んでも相当におもしろいものである。「うつくし」は愛することで、「妻子みればめぐしうつくし」(巻五・八〇〇)の例がある。「死ねやも」は、「雷神の少し動みてさしくもり雨も降れやも」(巻十一・二五一三)と同じである。併しこの訓には異説もある。この愛するあまり、「死んでしまえ」と思う感情の歌は後世のものにもあれば、俗謡にもいろいろな言い方になってひろがって居る。

○

朝戸出の君が足結を潤らす露原早く起き出で
つつ吾も裳裾潤らさな　〔巻十一・二三五七〕　柿本人麿歌集

同前。朝早くお帰りになるあなたの足結を潤らす露原よ。私も早く起きてその露原で御一しょに裳の裾を潤らしましょう、というのである。別を惜しむ気持でもあり、愛着する気持でもあって、女の心の濃やかにまつわるいいところが出て居る。「吾妹子が赤裳の裾の染め湿ぢむ今日の小雨に吾さへ沾れな」(巻七・一〇九〇)は男の歌だが同じような内容である。

○

垂乳根の母が手放れ斯くばかり術なき事はい
まだ為なくに　〔巻十一・二三六八〕　柿本人麿歌集

人麿歌集出。正述心緒という歌群の中の一つである。一首の意は、物ごころがつき、年ごろになって、母の哺育の手から放れて以来、こんなに切ないことをしたことはない、というので、恋の遣瀬無いことを歌ったものである。これは、男の歌か女の歌か字面だけでは分からぬが、女の歌とする方が感に乗ってくるようである。術なき事というのは、どうしていいか為方の分からぬ気持で、「術なきものは」、「術の知らなく」、「術なきまでに」等の例があり、共に心のせっぱつまった場合を云っている。下の句の切実なのは読んでいるうち分かるが、上の句にもやはりその特色があるので、此上の句のためにも一首が切実になったのである。憶良が熊凝を悲しんだものに、「たらちしや母が手離れ」(巻五・八八六)といったのは、此歌を学んだものであろう。なお、「黒髪に白髪まじり老ゆるまで斯る恋にはいまだ逢はなくに」(巻四・五六三)という類想の歌もある。第二句、「母之手放」は、ハハノテソキテ、ハハガテカレテ等の訓もあるが、今契沖訓に従った。

○

人の寐る味宿は寐ずて愛しきやし君が目すら
を欲りて歎くも　〔巻十一・二三六九〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。一首の意は、このごろはいろいろと思い乱れて、世の人のするように安眠が出来ず、恋しいあなたの眼をばなお見たいと思って歎いて居ります、というので、これも女の歌の趣である。「目すら」は「目でもなお」の意で、目を強めている。今の口語になれば、「目でさえも」ぐらいに訳してもいい。「言問はぬ木すら妹と背ありとふをただ独り子にあるが苦しさ」(巻六・一〇〇七)がある。一首は、取りたててそう優れているという程ではないが、感情がとおって居り、「目すらを」と云って、「目」に集注したいい方に注意したのであった。こういういい方は、憶良の、「たらちしの母が目見ずて」(巻五・八八七)はじめ、他にも例があり、なお、「人の寝る味眠は寝ずて」(巻十三・三二七四)等の用例を参考とすることが出来る。

○

朝影に吾が身はなりぬ玉耀るほのかに見えて
去にし子故に　〔巻十一・二三九四〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。「朝影」というのは、朝はやく、日出後間もない日の光にうつる影が、細長くて恰も恋に痩せた者のようだから、そのまま取って、「朝影になる」という云い方をしたのである。その頃の者は朝早く女の許から帰るので、こういう実際を幾たびも経験してこういう語を造るようになったのは興味ふかいことである。「玉かぎる」は玉の光のほのかな状態によって、「ほのか」にかかる枕詞とした。一首は、これまでまだ沁々と逢ったこともない女に偶然逢って、その後逢わない女に対する恋の切ないことを歌ったものである。「玉かぎるほのかにだにも見えぬおもへば」(巻二・二一〇)、「玉かぎるほのかに見えて別れなば」(巻八・一五二六)等の例がある。この歌は男の心持になって歌っている。

○

行けど行けど逢はぬ妹ゆゑひさかたの天の露
霜に濡れにけるかも　(巻十一・二三九五)　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。行きつつ幾ら行っても逢う当のない恋しい女のために、こうして天の露霜に濡れた、というのである。苦しい調子でぽつりぽつりと切れるのでなく、連続調子でのびのびと云いあらわしている。それは謂ゆる人麿調ともいい得るが、それよりも寧ろ、この歌は民謡的の歌だからと解釈することも出来るのである。併し、この種類の歌にあっては目立つも

のだから、その一代表のつもりで選んで置いた。「ぬばたまの黒髪山を朝越えて山下露に沾れにけるかも」(巻七・一二四一)などと較べると、やはり此歌の方が旨い。

○

朱らひく膚に触れずて寝たれども心を異しく
我が念はなくに　(巻十一・二三九九)　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。一首の意は、今夜は美しいお前の膚にも触れずに独寝したが、それでも決して心がわりをするようなことはないのだ、今夜は故障があってついお前の処に行かれず独りで寝てしまったが、私の心に別にかわりがない、というのであろう。「心を異しく」は、心がわりするというほどの意で、集中、「逢はねども異しき心をわが思はなくに」(巻十四・三四八二)、「然れども異しき心をあがおもはなくに」(巻十五・三五八八)等の例がある。女の美しい膚のことをいい、覚官的に身体的に云っているのが、ただの平凡な民謡にしてしまわなかった原因であろう。アカラヒク・ハダに就き、代匠記初稿本に、「それは紅顔のにほひをいひ、今は肌の雪のごとくなるに、すこし紅のにほひあるをいへり」といい、精撰本に、「朱引秦トハ、紅顔ニ応ジテ肌モニホフナリ」と云ったのは、契沖の文も覚官的で旨い。

○

恋ひ死なば恋ひも死ねとや我妹子が吾家の門を過ぎて行くらむ　〔巻十一・二四〇一〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。一首の意は、恋死をするなら、勝手にせよというつもりで、あの恋しい女はおれの家の門を素通りして行くのだろう、というのである。こういうのも恋の一心情で、それを自然に誰の心にも這入って行けるように歌うのが民謡の一特徴であるが、鋭敏に心の働いたところがあるので、共鳴する可能性も多いのである。「恋ひ死なば恋も死ねとや玉桙の道ゆく人にことも告げなく」(巻十一・二三七〇)、「恋ひ死なば恋も死ねとや霍公鳥もの念ふ時に来鳴き響むる」(巻十五・三七八〇)等のあるのは、やはり模倣だとおもうが、こう比較してみると、人麿歌集のこの歌の方が旨い。

○

恋ふること慰めかねて出で行けば山も川をも知らず来にけり　〔巻十一・二四一四〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。一首の意は、この恋の切ない思を慰めかね、遣りかねて出でて来たから、

山をも川をも夢中で来てしまった、というのである。「いで行けば」といったり、「来にけり」と云ったりして、調和しないようだが、そういう巧緻でないようなところがあっても、真率な心があらわれ、自分の心をかえりみるような態度で、「来にけり」と詠歎したのに棄てがたい響がある。第二句、「こころ遣りかね」とも訓んでいる。これは、「おもふどち許己呂也良武等」(巻十七・三九九一)等の例に拠ったものであるが、「恋しげみ奈具左米可禰氐」(巻十五・三六二〇)の例もあるから、いずれとも訓み得るのである。今旧訓に従って置いた。それから、「ゆく」も「くる」も、主客の差で、根本の相違でないことがこの例でも分かるし、前出の、「大和には鳴きてか来らむ呼子鳥」(巻一・七〇)の歌を想起し得る。石上卿の、「ここにして家やもいづく白雲の棚引く山を越えて来にけり」(巻三・二八七)の例がある。

○

山科の木幡の山を馬はあれど歩ゆ吾が来し汝を念ひかね　〔巻十一・二四二五〕　柿本人麿歌集

寄物陳思という部類の歌に入れてある。人麿歌集出。「山科の木幡の山」は、山城宇治郡、現在宇治村木幡*で、桃山御陵の東方になっている。前の歌に、強田とあったのと同じである。一首の意は、山科の木幡の山道をば徒歩でやって来た。おれは馬を持っているが、お前を思う

思いに堪えかねて徒歩で来たのであるぞ、というのである。旧訓ヤマシナノ・コハダノヤマニ。考ヤマシナノ・コハダノヤマヲ。つまり、「木幡の山を歩み吾が来し」となるので、なぜ、「馬はあれど」と云ったかというに、馬の用意をする暇もまどろしくて、取るものも取あえず、というのであろう。本来馬で来れば到着が早いのであるが、それは理論で、まどろしく思う情の方は直接なのである。詩歌では情の直接性を先にするわけになるから、こういう表現となったものである。女にむかっていう語として、親しみがあっていい。

○

大船の香取の海に碇おろし如何なる人か物念

はざらむ　〔巻十一・二四三六〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。「大船の香取の海に碇おろし」までは、「いかり」から「いかなる」に続けた序詞であるから、一首の内容は、「いかなる人か物念はざらむ」、即ち、おれはこんなに恋に苦しんで居るが、世の中のどんな人でも恋に苦しまないものはあるまい、というだけの歌である。序詞は意味よりも声調にあるので、何か重々しいような声調で心持を暗指するぐらいに解釈すればいい。「香取の海」は、近江にも下総にもあるが、「高島の香取の浦ゆ榜ぎでくる舟」（巻七・一一七二）とある近江湖中の香取の浦としていいだろう。なおこの巻（二七三八）に、「大船

のたゆたふ海に碇おろし如何にせばかも吾が恋ひ止まむ」とあるのと類似して居り、この二七三八の方は異伝であろう。

○

ぬばたまの黒髪山の山菅に小雨零りしきしく

しく思ほゆ　〔巻十一・二四五六〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。この歌の内容は、ただ、「しくしく思ほゆ」だけで、そのうえは序詞である。ただ黒髪山の山菅に小雨の降るありさまと相通ずる、そういううら悲しいような切なおもいを以て序詞としたものであろう。山菅は山に生えるスゲのたぐい、或はヤブラン、リュウノヒゲ一類、どちらでも解釈が出来、古人はそういうものを一つ草とおもっていたものと見えるから、今の本草学の分類などで律しようとすると解釈が出来なくなって来るのである。この歌も取りわけ秀歌という程のものでないが、ただ結句だけで内容とする歌も珍しいので選んで置いた。

○

我背子に吾が恋ひ居れば吾が屋戸の草さへ思ひうらがれにけり　〔巻十一・二四六五〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。一首の意は、私の夫を待遠しく恋しがって居ると、家の庭の草さえも思い悩んで枯れてしまいました、というので女の歌である。「吾が恋ひ居れば吾が屋戸の」という具合に、「わが」を繰返しているのは、意識的らしく、少しく軽く聞こえるが、「草さへ思ひうらがれにけり」という息の長い、伸々した調によって落着を得ているのは注意すべきである。特にこの下の句は伸びているうちに、悲哀の感動を含めたものだから、上の句の稍小きざみになったのは自然の調べなのか、よく分らないが、「我が」を三つも繰返したのは感心しない。そこに行くと、「君待つと吾が恋ひ居ればわが屋戸の簾うごかし秋の風吹く」（巻四・四八八）の方が旨い。似ているが初句の「君待つと」で緊っている。結句は、近時橋本氏によって、ウラブレニケリの訓が唱えられた。

○

山萵苣の白露おもみうらぶるる心を深み吾が恋ひ止まず　〔巻十一・二四六九〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。山萵苣は食用にする萵苣で、山に生えるのを山萵苣といったものであろう。エゴの木だという説もあるが、白露おくという草に寄せた歌だから、大体食用の萵苣と解釈していいようである。露のために花のしなっているように心の萎える心持で序詞とした。この歌も取りたてていう程のものでないが、「心を深みわが恋ひ止まず」の句が棄てがたいから選んで置いたし、萵苣は食用菜で、日常生活によって見ているものを持って来たのがおもしろいと思ったのである。

○

垂乳根の母が養ふ蚕の繭隠りこもれる妹を見むよしもがも　〔巻十一・二四九五〕　柿本人麿歌集

同上、人麿歌集出。第三句迄は序詞で、母の飼っている蚕が繭の中に隠るように、家に隠って外に出ない恋しい娘を見たいものだ、というので、この繭のことを云うのも日常生活の経験

を持って来ている。蚕に寄する恋といっても、題詠ではなく、斯ういう歌が先ず出来てそれから寄レ物恋と分類したものである。この歌は序詞のおもしろみというよりも、全体が実生活を離れず、特に都会生活でない農民生活を示すところがおもしろいのである。巻十二(二九九一)に、「垂乳根の母が養ふ蚕の繭隠りいぶせくもあるか妹にあはずて」というのがあり、巻十三(三二五八)の長歌に、「たらちねの母が養ふ蚕の、繭隠り気衝きわたり」というのがあるが、やはり此歌の方が旨い。「いぶせく」では続きが突如としても居り、不自然で妙味がないようである。

○

垂乳根の母に障らばいたづらに汝も吾も事成るべしや　〔巻十一・二五一七〕　作者不詳

正述二心緒一。作者不明。一首の意は、母に遠慮して気兼してぐずぐずしているなら、お前も私もこの恋を遂げることが出来んではないかというので、男が女を促す趣の歌である。男が気を急いで女に向って斯くまで強いことをいうのも或場合の自然であり、娘の方で母のことをいろいろ気を揉むことも背景にあって、なかなかおもしろい歌である。やはりこの巻(二五五七)に、「垂乳根の母に申さば君も我も逢ふとはなしに年ぞ経ぬべき」というのもあるが、これも母に

話して承諾を得る趣で、これも娘心であるが、「母に障らば」という方が直截でいい。

この「障らば」をば、母の機嫌を害うならばと解する説がある。これは「障」の用例に本づく説であるが、「障りあらめやも」、「障り多み」、「障ることなく」等だけに拠るとそうなるかも知れないが、「石の上ふるとも雨に関らめや妹に逢はむと云ひてしものを」(巻四・六六四)。「他言はまこと煩くなりぬともそこに障らむ吾ならなくに」(巻十二・二八八六)。「あしひきの山野さはらず」(巻十七・三九七三)等は、巻四の例に「関」の字を当てた如く、「それに拘わることなく、関係することなく」の意があるので、「山野さはらず」の如くに、そのために礙げらるることなくというのは第二に導かれる意味になるのであるから、この歌はやはり、「母に関わることなく、拘泥することなく」と解釈していいと思う。また歌もそう解釈する方がおもしろい。

○

苅薦の一重を敷きてさ寐れども君とし寝れば寒けくもなし　〔巻十一・二五二〇〕　作者不詳

作者不明。薦席をただ一枚敷いて寝ても、あなたと御一しょですから、ちっともお寒くはありません、「君とし」とあるから大体女の歌として解していいであろう。第四句原文が、「君共宿者」であるから、キミガムタ。キミトモ。等の訓があるが、「伎美止之不在者」(巻十八・四〇七

四）などを参考して、平凡にキミトシヌレバと訓むのに従った。これも民謡風に率直に覚官的にいいあらわしている。「蒸被なごやが下に臥せれども妹とし宿ねば肌し寒しも」（巻四・五二四）というのは、同じような気持を反対に云ったものだが、この歌の方が、寧ろ実際的でそこに強みがあるのである。

○

振分の髪を短み春草を髪に綰くらむ妹をしぞ
おもふ　〔巻十一・二五四〇〕　作者不詳

振分髪というのは、髪を肩のあたり迄垂らして切るので、まだ髪を結ぶまでに至らない童女、また童男の髪の風を云う。「綰く」は加行下二段の動詞で、髪を束ねあげることである。一首の意は、あの児は短い振分髪で、まだ髪を結えないので、春草を足して髪に束ねてでもいるだろうか、可哀いいあどけないあの児のことがおもいだされる、というくらいの意とおもう。童女のことを歌っているのが珍しいのであるが、あの時代には随分小さくて男女の関係を結んだこともあったと見做してこの歌を解釈することも出来る。真間の手児名なども、ようやくおとめになったかならぬころではなかっただろうか。いずれにしても珍しい歌である。第三句流布本「青草」であったのを古義で「春草」としたが、古鈔本中（温・京）に「春」とあるし、契沖既に

注意している。

○

念はぬに到らば妹が歓しみと笑まむ眉引おも
ほゆるかも　〔巻十一・二五四六〕　作者不詳

作者不明。一首の意。突然に女のところに行ったら、嬉しいと云ってにこにこする様子が想像せられて云いようなく楽しい、というので、昔も今もかわりない人情の機微が出て居る歌である。ただ現代語と違って古語だから、軽薄に聞こえずに濃厚に聞こえるのである。おもいがけず、突然に、というのを「念はぬに」という。「念はぬに時雨の雨は降りたれど」（巻十・二二二七）。「念はぬに妹が笑ひを夢に見て」（巻四・七一八）等の例がある。「歓しみと」の「と」の使いざまは、「歓しみと紐の緒解きて」（巻九・一七五三）とある如く、「と云って」の意である。にこにこと匂うような顔容をば、「笑まむ眉引」というのも、実に旨いので、古語の優れている点である。やはり此巻（二五二六）に、「待つらむに到らば妹が歓しみと笑まむすがたを行きて早見む」というのがあり、大に似ているが、この方は常識的で、従って感味が浅い。なお、巻十二（三一三八）に、「年も経ず帰り来なむと朝影に待つらむ妹が面影に見ゆ」というのもある。

○

斯くばかり恋ひむものぞと念はねば妹が袂を
纏かぬ夜もありき　〔巻十一・二五四七〕　作者不詳

作者不明。こんなに恋しいものだとは思わなかったから、妹といっしょに寝ない晩もあったのだが、こうして離れてしまうと堪えがたく恋しい。容易く逢われた頃になぜ毎晩通わなかったのか、と歎く気持の歌である。当時の男女相逢う状態を知ってこの歌を味うとまことに感の深いものがある。ただこのあたりの歌は作者不明で皆民謡的なものだから、そのつもりで味うこともまた必要である。巻十二(二九二四)に、「世のなかに恋繁けむと思はねば君が袂を纏かぬ夜もありき」というのがあり、どちらかが異伝だろうが、巻十一の此歌の方が稍素直である。

○

相見ては面隠さるるものからに継ぎて見まくの欲しき君かも　〔巻十一・二五五四〕　作者不詳

作者不明。お目にかかれば、お恥かしくて顔を隠したくなるのですけれど、それなのに、度々あなたにお目にかかりたいのです、という女の歌である。つつましい女が、身を以て迫るよ

うな甘美なところもあり、なかなか以て棄てがたい歌である。「面隠さるる」は「面隠をするように自然になるという意。「玉勝間逢はむといふは誰なるか逢へる時さへ面隠する」(巻十二・二九一六)の例がある。「ものからに」は、「ものながらに」、「ものであるのに」の意。「路遠み来じとは知れるものからに然かぞ待つらむ君が目を欲り」(巻四・七六六)の「ものからに」も同様で、おいでにならないとは承知していますのに、それでも私はあなたをお待ちしていますという歌である。白楽天の琵琶行に、猶抱二琵琶一半遮レ面の句がある。

○

人も無き古りにし郷にある人を愍くや君が恋に死なする　〔巻十一・二五六〇〕　作者不詳

作者不明であるが、旧都にでもなったところに残り住んでいる女から、京にいる男にでも遣った歌のように受取れる。もう寂しくなって人も余り居らないこの旧都に残って居ります私に、可哀そうにも恋死をさせるおつもりですか、とでもいうのであろう。「めぐし」は、「妻子見ればめぐし愛し」(巻五・八〇〇)、「妻子見ればかなしくめぐし」(巻十八・四一〇六)等の「めぐし」は愛情の切なことをあらわしているが、「今日のみはめぐしもな見そ言も咎むな」(巻九・一七五九)、「こころぐしめぐしもなしに」(巻十七・三九七八)の「めぐし」は、むごくも可哀想にもの意で前

と意味が違う、その意味は此処でも使っている。語原的にはこの方が本義で、心ぐし、目ぐしの「ぐし」も皆同じく、「目ぐし」は、目に苦しいまでに附くことから来たものであろうか。結句従来シナセムであったのを、新考でシナスルと訓んだ。

○

偽も似つきてぞする何時よりか見ぬ人恋ふに
人の死せし　〔巻十一・二五七二〕　作者不詳

一首の意。嘘をおっしゃるのも、いい加減になさいまし、まだ一度もお逢いしたことがないのに、こがれ死するなどとおっしゃる筈はないでしょう。何時の世の中にまだ見ぬ恋に死んだ人が居りますか、というような意味のことを、こういう簡潔な古語でいいあらわしているのは実に驚くべきである。「偽も似つきてぞする」は、偽をいうにも幾らか事実に似ているようにすべきだ、余り出鱈目の偽では困る、というようなことを、斯う簡潔にいうので日本語の好いところが遺憾なく出ているのである。一首全体が、きびきびとした女の語気から成り皮肉のような言葉のうちに男に寄ろうとする親密の心をも含めて、まことに珍しい歌の一つである。結句、古鈔本中、ヒトノシニスルの訓あり、略解でヒトノシニセシと訓んだ。第四句コフルニ(沢瀉)の訓がある。

○

早行きて何時しか君を相見むと念ひし情今ぞ
和ぎぬる　〔巻十一・二五七九〕　作者不詳

いそいで行って、一時もはやくお前に逢いたいとおもっていたのだったが、こうしてお前を見るとやっと心が落着いた、というのだろうが、「君」を男とすると、解釈が少し不自然になるから、やはり此歌は、男が女に向って「君」と呼んだことに解する方が好いだろう。私は、「今ぞ和ぎぬる」という句に非常に感動してこの歌を選んだ。このナギヌルの訓は従来からそうであるが、嘉暦本にはイマゾユキヌルと訓んでいる。「あが念へる情和ぐやと、早く来て見むとおもひて」(巻十五・三六二七)、「相見ては須臾しく恋は和ぎむかとおもへど弥々恋ひまさりけり」(巻四・七五三)、「見る毎に情和ぎむと、繁山の谿べに生ふる、山吹を屋戸に引植ゑて」(巻十九・四一八五)、「天ざかる鄙とも著く許多くもしげき恋かも和ぐる日もなく」(巻十七・四〇一九)等の例に見るごとく、加行上二段に活用する動詞である。

○

面形の忘るとならばあぢきなく男じものや恋
ひつつ居らむ　〔巻十一・二五八〇〕　作者不詳

あの女の顔貌が忘られてしまうものなら、男子たるおれが、こんなに甲斐ない恋に苦しんで居ることは無いのだが、どうしてもあの顔を忘れることが出来ぬ、というのである。「男じもの」の「じもの」は「何々の如きもの」というので、「鹿じもの」は鹿の如きもの、でつまりは、鹿たるものとなるから、「男じもの」は、男の如きもの、男らしきもの、男子たるもの、男子として、大丈夫たるもの等の言葉に訳することも出来るのである。結句の「居らむ」は形は未来形だが、疑問があり詠歎に落着く語調である。この歌の真率であわれな点が私の心を牽いたので選んで置いた。単に民謡的に安易に歌い去っていない個的なところのある歌である。それから、「面形」云々という用語も注意すべきであるが、これは、「面形の忘れむ時は大野ろに棚引く雲を見つつ偲ばむ」(巻十四・三五二〇)という歌もあり、一しょにして味うことが出来る。

○

あぢき無く何の枉言いま更に小童言する老人
にして　〔巻十一・二五八二〕　作者不詳

枉言はマガコトと訓んでいたが、略解で狂言としてタハコトと訓んだ。一首は、何という愚な戯痴たことを俺は云ったものか、この老人が年甲斐もなく、今更小供等のような真似をして、というので、それでも、あの女が恋しくて堪えられないという意があるのである。これは女に対って恋情を打明けたのちに、老体を顧みた趣の歌だが、初句に、「あぢきなく」とあるから、遂げられない恋の苦痛が一番強く来ていることが分かる。これは老人の恋でまことに珍らしいものである。「あぢきなく」は「あづきなく」ともいい、「なかなかに黙もあらましをあぢきなく相見始めても吾は恋ふるか」(巻十二・二八九九)の例がある。実に甲斐のない、まことにつまらないという程の語である。「わらは」は童男童女いずれにもいい、「老人も女童児も、其が願ふ心足ひに」(巻十八・四〇九四)の例がある。

恋愛の歌は若い男女のあいだの独占で、それゆえ寒山詩にも、老翁娶二少婦一、髪白婦不レ耐、老婆嫁二少夫一、面黄夫不レ愛、老翁娶二老婆一、一一無二棄背一、少婦嫁二少夫一、両両相憐態、とあるのだが、万葉には稀にこういう老人の恋の歌もあるのは、人間の実際を虚偽なく詠歎したのが残

っているので、賀茂真淵が、「古への世の歌は人の真心なり」云々というのは、こういうところにも触れているのである。なお万葉には、竹取翁と娘子等の問答（巻十六）のほかに、石川女郎の、「古りにし嫗にしてや斯くばかり恋にしづまむ手童の如」（巻二・一二九）があり、「いそのかみ布留の神杉神さびて恋をも我は更にするかも」（巻十一・二四一七）、「現にも夢にも吾は思はざりき旧りたる君に此処に会はむとは」（同・二六〇一）等があり、老人の恋でおもしろい。

○

奥山の真木の板戸を音速み妹があたりの霜の
上に宿ぬ　〔巻十一・二六一六〕　作者不詳

「音速み」は、音がひどいのでの意で、今なら音響の鋭敏などというところを、「音速み」と云っているのは旨いものである。「奥山の真木の」までは序詞。一首の意は、折角女の家まで行って板戸をたたいたが、その音が余り大きく響くので、家人に気づかれるのを怖れて、近くの霜の上に寝た、というので、民謡風のものだが、そう簡単に片付けてしまわれぬものがある。「霜の上に寝ぬ」は民謡的に誇張があり文学的ないい方である。けれどもそれをただの誇張として素通り出来ぬものを感ずるのはどういうわけであろうか。「妹ガ閨ノ板戸ヲ開ムトスレバ、音ノ高クテ人ノ聞付ム事ヲ恐レ、サリトテ帰リモエヤラデ其アタリノ霜ノ上ニ一夜寝タルトナリ」（代匠記）の解は簡潔でよいから記して置く。新考で、「音速」を、「押し難み」だろうといったが、それは古今集ばり常識である。

○

月夜よみ妹に逢はむと直道から吾は来つれど
夜ぞふけにける　〔巻十一・二六一八〕　作者不詳

「直道」は、真直な道、まわり道しない道のこと、近道。「から」は「より」と同じで、「之乎路から直越え来れば羽咋の海朝なぎしたり船楫もがも」（巻十七・四〇二五）、「直に行かず此ゆ巨勢路から石瀬踏み求めぞ吾が来し恋ひて術なみ」（巻十三・三三二〇）、「ほととぎす鳴きて過ぎにし岡傍から秋風吹きぬよしもあらなくに」（巻十七・三九四六）などの「から」は皆「より」の意味だから、只今私等の使う「から」は既にこの頃からあったのである。この歌は、急いでまわり道もせずに来たが、それでも夜が更けたという、そこに感慨があるのである。直接に女に愬えていない客観的ないい方だけれども民謡的な特徴が其処に存じている。

○

燈のかげに耀ふうつせみの妹が咲しおもかげに見ゆ　〔巻十一・二六四二〕　作者不詳

寄レ物述レ思の中に分類せられている。自分の恋しい女が燈火のもとにいて、嬉しそうにここにしていた時の、何ともいえぬ美しく耀くような現身即ち体そのものの女が、今おもかげに立って来ている、というのである。この歌は嬉しい心持で女身を讃美しているのだから、幾分誇張があって、美麗過ぎる感があるけれども、本人は骨折っているのだからそれに同情して味う方がいい。「年も経ず帰り来なむと朝影に待つらむ妹が面影に見ゆ」(巻十二・三一三八)などと較べると、「燈のかげに」の方は覚官的に直接に云っている。

○

難波人葦火焚く屋の煤してあれど己が妻こそ常めづらしき　〔巻十一・二六五一〕　作者不詳

寄レ物述レ思の一首。難波の人が葦火を焚くので家が煤けるが、おれの妻もそのようにもう古び煤けた。けれどもおれの妻はいつまで経っても見飽きない、おれの妻はやはりいつまでも一

番いい、というので、若い者の甘い恋愛ともちがって落着いたうちに無限の愛情をたたえている。軽い諧謔を含めているのも親しみがあって却って好いし、万葉の歌は万事写生であるから、縦い平凡のようでも人間の実際が出ているのである。「青山の嶺の白雲朝にけに常に見れどもめづらし吾君」(巻三・三七七)、「住吉の里行きしかば春花のいやめづらしき君にあへるかも」(巻十・一八八六)等の例がある。結句ツネメヅラシキと訓んで居り、いずれでも好い。

○

馬の音のとどともすれば松蔭に出でてぞ見つる蓋し君かと　〔巻十一・二六五三〕　作者不詳

結句、原文「若君香跡」で、旧訓モシハ・キミカト、考モシモ・キミカトであったのを古義でケダシ・キミカトと訓んだ。「若雲」(巻十二・二九二九)、「若人見而」(巻十六・三八六八)の例がある。なお額田王の「古に恋ふらむ鳥は霍公鳥蓋しや鳴きし吾が恋ふるごと」(巻二・一一二)があること既にいった。一首は女が男を待つ心で何の奇も弄しない、つつましい佳い歌である。そしていろいろと具体的に云っているので、読者にもまたありありと浮んで来るものがあっていい。なおこの歌の次に、「君に恋ひ寝ねぬ朝明に誰が乗れる馬の足音ぞ吾に聞かする」(巻十一・二六五四)、「味酒の三諸の山に立つ月の見が欲し君が馬の音ぞする」(同・二五一二)の例がある。

○

窓ごしに月おし照りてあしひきの嵐吹く夜は
君をしぞ念ふ　〔巻十一・二六七九〕　作者不詳

第二句原文「月臨照而」で、旧訓ツキサシイリテであったのを、契沖がツキオシテリテと訓んだ。窓から月が部屋までさし込んで、嵐の吹いてくる今晩は、身に沁みてあなたが恋しゅうございます、というので、月の光と山の風とが特に恋人をおもう情を切実にすることを云っている。私はこの歌で、「窓ごしに月おし照りて」の句に心を牽かれている。普通「窓越しに月照る」というと、窓外の庭あたりに月の照る趣のように解するが、「おし照る」が作用をあらわしたから、月光が窓から部屋までさし込んでくることとなり、まことに旨い云いかたである。月光を機縁とした恋の歌に、「吾背子がふり放け見つつ嘆くらむ清き月夜に雲な棚引き」(巻十一・二六六九)、「真袖もち床うち払ひ君待つと居りし間に月かたぶきぬ」(同・二六六七)等がある。

○

彼方の赤土の小屋に霖降り床さへ沾れぬ身
に副へ我妹　〔巻十一・二六八三〕　作者不詳

これは寄雨歌だから、こういう云い方をするようになったもので、「赤土の小屋」即ち、土のうえに建ててある粗末な家に小雨が降って来て床までも沾れた趣である。そこで結句が導かれるわけで、つまりは、「身に副へ我妹」が一首の主眼となるのである。上の句などは大体の意味を心中に浮べて居れば好いので、小説風に種々解釈する必要はなかろうとおもう。民謡的で、労働に携わりながらうたうことも出来る歌である。

○

潮満てば水沫に浮ぶ細砂にも吾は生けるか恋
ひは死なずて　〔巻十一・二七三四〕　作者不詳

海の潮が満ちて来ると、水の沫に浮んでいる細かい砂の如くに、恋死もせずに果敢なくも生きているのか、というので、物に寄せた歌だから細砂のことなどを持って来たものだろうとおもうが、この点はひどく私の心をひいている。近代の象徴詩などというと雖、かくの如くに自然に行かぬものが多い。「細砂にも」をば、細砂にも自分の命を托して果敢無くも生きていると解するともっと近代的になる。真淵は「み沫の如く浮ぶまさごといひて、我生もやらず死もはてず、浮きてたゞよふこゝろをたとへたり」(考)といっている。

この第四句は、原文「吾者生鹿」で、旧訓ワレハナリシカ、代匠記ワレハナレルカ。略解ワ

レハイケルカである。この句を旧訓に従って、ナリシカと訓み、解釈を「細砂になりたいものだ」とする説もある(新考)。いずれにしても、細砂の中に自分の命を托する意味で同一に帰着する。「解衣の恋ひ乱れつつ浮沙浮きても吾はありわたるかも」(巻十一・二五〇四)、「白細砂三津の黄土の色にいでて云はなくのみぞ我が恋ふらくは」(同・二七二五)等の中には、「浮沙」、「白細砂」とあって、やはり砂のことを云っているし、なお、「八百日ゆく浜の沙も吾が恋に豈まさじか奥つ島守」(巻四・五九六)、「玉津島磯の浦廻の真砂にも染ひて行かな妹が触りけむ」(巻九・一七九九)、「相模路の淘綾の浜の真砂なす児等は愛しく思はるるかも」(巻十四・三三七二)等の例がある。皆相当によいもので、万葉歌人の写生力・観入態度の雋敏に驚かざることを得ない。

○

朝柏閏八河辺の小竹の芽のしぬびて宿れば夢に見えけり　〔巻十一・二七五四〕　作者不詳

此歌は「しぬびて宿れば夢に見えけり」だけが意味内容で、その上は序詞である。やはり此巻に、「秋柏潤和川辺のしぬのめの人に偲べば君に堪へなく」(巻十一・二四七八)というのがある。この「君に堪へなく」という句はなかなか佳句であるから、二つとも書いて置く。このあたりの歌は、序詞を顧慮しつつ味う性質のもので、取りたてて秀歌というほどのものではない。

○

あしひきの山沢回具を採みに行かむ日だにも逢はむ母は責むとも　〔巻十一・二七六〇〕　作者不詳

山沢に生えている回具を採みにゆく日なりと都合してあなたにお逢いしましょう。母に叱られても、というので、当時も母が娘をいろいろ監視していたことが分かる。結句の、「母は責むとも」は、前にあった、「母に障らば」などと同じ気持である。新考で、「逢はせ」と訓み、新訓で其に従ったが、そうすると、男の方で女にむかっていうことになる。「逢ってください」となるが、少し智的になるだろう。新考のアハセ説は、第四句の「相将」が、古鈔本中(嘉・類)に、「相為」になっているためであった。

○

蘆垣の中の似児草莞爾に我と笑まして人に知らゆな　〔巻十一・二七六二〕　作者不詳

「似児草」は箱根草、箱根歯朶という説が有力である。「に」の音で「にこよか」(莞爾)に続けて序詞とした。「我と笑まして」は吾と顔合せてにこにこして、吾と共ににこにこしての意。

一首の意は、わたしと御一しょにこうしてにこにこしておいでになるところを、人に知られたくないのです、というので、身体的に直接な珍らしい歌である。此は民謡風な読人不知の歌だが、後に大伴坂上郎女が此歌を模倣して、「青山を横ぎる雲のいちじろく吾と笑まして人に知らゆな」(巻四・六八八)という歌を作った。これも面白いが、巻十一の歌ほど身体的で無いところに差違があるから、どちらがよいか鑑別せねばならない。

○

道のべのいつしば原のいつもいつも人の許さ
むことをし待たむ　〔巻十一・二七七〇〕　作者不詳

この歌は、「人の許さむことをし待たむ」というのが好いので選んだ。男が女の許すのを待つ、気長に待つ気持の歌で、こういう心情もまた女に対する恋の一表現である。この巻の、「梓弓引きてゆるさずあらませばかかる恋にはあはざらましを」(巻十一・二五〇五)は、女の歌で、やはり身を寄せたことを「許す」と云っている。なお、巻十二(三一八二)に、「白妙の袖の別は惜しけども思ひ乱れて赦しつるかも」というのがある。この、「赦す」は稍趣が違うが、つまりは同じことに帰着するのである。

○

神南備の浅小竹原のうるはしみ妾が思ふ君が
声の著けく　〔巻十一・二七七四〕　作者不詳

一首の、「神南備の浅小竹原のうるはしみ」は下の「うるはしみ」に続いて序詞となった。併し現今も飛鳥の雷岳あたり、飛鳥川沿岸に小竹林があるが、そのころも小竹林は繁って立派であったに相違ない。当時の人(この歌の作者は女性の趣)はそれを観察していて、「うるはし」に続けたのは、詩的力量として観察しても驚くべく鋭敏で、特に「浅小竹原」と云ったのもこまかい観察である。もっとも、この語は古事記にも、「阿佐士怒波良」とある。併しそれよりも感心するのは、一首の中味である、「妾が思ふ君が声の著けく」という句である。自分の恋しく おもう男、即ち夫の声が人なかにあってもはっきり聞こえてなつかしいというので、何でもないようだが短歌のような短い抒情詩の中に、こう自由にこの気持を詠み込むということはむつかしい事なのに、万葉では平然として成し遂げている。

○

さ寝かにば誰とも宿めど沖つ藻の靡きし君が
言待つ吾を　〔巻十一・二七八二〕　作者不詳

おれと一しょに寝ね兼ねるというのなら、おれは誰とでも寝よう。併し一旦おれに靡き寄ったお前のことだから、お前の決心を待っていよう、もう一度思案して、おれと一しょに寝ないかというので、男が女にむかっていうように解釈した。そうすれば「君」は女のことで、今の口語なら、「お前」ぐらいになる。この歌もなかなか複雑している内容だが、それを事も無げに詠み了せているのは、大体そのころの男女の会話に近いものであったためでもあろうが、それにしても吾等にはこうは自由に詠みこなすことが出来ないのである。初句、「さ寝かにば」は、「さ寝兼ねば」で、寝ることが出来ないならばである。結句の「吾を」の「を」は「よ」に通う詠歎の助詞である。

○

山吹のにほへる妹が唐棣花色の赤裳のすがた
夢に見えつつ　〔巻十一・二七八六〕　作者不詳

この歌は、一首の中に山吹と唐棣即ち庭梅とを入れてそれの色彩を以て組立てている歌だが、少しく単純化が足りないようである。それにも拘わらず此歌を選んだのは、夢に見た恋人が、唐棣色の赤裳を着けていたという、そういう色までも詠み込んでいるのが珍しいからである。万葉集の歌は夢をうたうにしても、かく具体的で写象が鮮明であるのを注意すべきである。

○

こもりづの沢たづみなる石根ゆも通しておも
ふ君に逢はまくは　〔巻十一・二七九四〕　作者不詳

この歌も、谿間の水の具合をよく観ていて、それを序詞としたのに感心すべく、隠れた水、沢にこもり湧く水が、石根をも通し流れるごとくに、一徹におもっております、あなたに逢うまでは、というので山の歌らしくおもえる。この巻に、「こもりどの沢泉なる石根をも通してぞおもふ吾が恋ふらくは」（巻十一・二四四三）というのがあるが、二四四三の方が原歌で、二七九四の方は分かり易く変化したものであろう。そうして見れば、「石根ゆも」は「石根をも」と類似の意味か。

○

人言を繁みと君を鶉鳴く人の古家に語らひて
遣りつ　〔巻十一・二七九九〕　作者不詳

人の噂がうるさいので、鶉鳴く古い空家のようなところに連れて行って、そこでいろいろとお話をして帰したというので、「君」をば男と解釈していいだろう。この歌で、「語らひて遣りつ」の句は、まことに働きのあるものである。訓は大体考・略解に従った。

○

あしひきの山鳥の尾の垂り尾の長き長夜を一
人かも宿む　〔巻十一・二八〇二〕　作者不詳

この歌は、「念へども念ひもかねつあしひきの山鳥の尾の永きこの夜を」(巻十一・二八〇二)の別伝として載っているが、拾遺集恋に人麿作として載り小倉百人一首にも選ばれたから、此処に選んで置いた。内容は、「長き長夜をひとりかも寝む」だけでその上は序詞であるが、この序詞は口調もよく気持よき聯想を伴うので、二八〇二の歌にも同様に用いられた。なお、「あしひきの山鳥の尾の一峰越え一目見し児に恋ふべきものか」(同・二六九四)の如き一首ともなっている。「尾の一峰」と続き山を越えて来た趣になっている。この「あしひきの山鳥の尾の」の歌は序詞があるため却って有名になったが、この程度の序詞ならば万葉に可なり多い。

○

わが背子が朝けの形能く見ずて今日の間を恋ひ暮らすかも　〔巻十二・二八四一〕　柿本人麿歌集

私の夫が朝早くお帰りになる時の姿をよく見ずにしまって、一日じゅう物足りなく心寂しく、恋しく暮しております、というのである。「朝明の形」という語は、朝別れる時の夫の事をいうのだが、簡潔に斯ういったのは古語の好い点である。「今日のあひだ」という語も好い語で、「梅の花折りてかざせる諸人は今日の間は楽しくあるべし」(巻五・八三二)、「真袖もち床うち払ひ君待つと居りし間に月かたぶきぬ」(巻十一・二六六七)、「行方無みこもれる小沼の下思に吾ぞもの思ふ此の頃の間」(巻十二・三〇二二)等の例がある。なお、「朝戸出の君が光儀をよく見ずて長き春日を恋ひや暮らさむ」(巻十・一九二五)があって、外形は似ているが此歌に及ばないのは、此歌は未だ個的なところが失せないからであろうか。

○

愛しみ我が念ふ妹を人みなの行く如見めや手に纏かずして　〔巻十二・二八四三〕　柿本人麿歌集

おれの恋しくおもう女が、今彼方を歩いているが、それをば普通並の女と一しょにして平然と見て居られようか、手にも纏くことなしに、というのである。あの女を手にも纏かずに居るのはいかにも辛いが、人目が多いので致し方が無いということが含まっている。これだけの意味だが、こう一首に為上げられて見ると、まことに感に乗って来て棄てがたいものである。「人皆の行くごと見めや」の句は強くて情味を湛え、情熱があってもそれを抑えて、傍観しているような趣が、この歌をして平板から脱却せしめている。無論民謡風ではあるが、未だ語気が求心的である。

○

山河の水陰に生ふる山草の止まずも妹がおもほゆるかも　〔巻十二・二八六二〕　柿本人麿歌集

上句は序詞で、中味は、「やまずも妹がおもほゆるかも」だけの歌で別に珍らしいものではな

い。また、「山菅のやまずて君を」、「山菅のやまずや恋ひむ」等の如く、「山菅の・やまず」と続けたのも別して珍らしくはない。ただ、山中を流れている水陰にながく靡くようにして群生している菅という実際の光景、特に、「水陰」という語に心を牽かれて私はこの歌を選んだ。この時代の人は、幽玄などとは高調しなかったけれども、こういう幽かにして奥深いものに観入していて、それの写生をおろそかにしてはいないのである。此歌は人麿歌集出だから人麿或時期の作かも知れない。「あまのがは水陰草の」(巻十・二〇一三)とあるのも、こういう草の趣であろうか。

○

朝去きて夕は来ます君ゆゑにゆゆしくも吾は
歎きつるかも　〔巻十二・二八九三〕　作者不詳

「君ゆゑに」は、屢出てくる如く、「君によって恋うる」、即ち「君に恋うる」となるのだが、もとは、「君があるゆえにその君に恋うる」という意であったのであろうか。一首の意は、朝はお帰りになっても夕方になるとまたおいでになるあなたであるのに、我ながら忌々しくおもう程に、あなたが恋しいのです、待ちきれないのです、という程の歌で、此処の「ゆゆし」は忌々し、厭わしぐらいの意。「言にいでて言はばゆゆしみ山川の激つ心をせかへたるかも」(巻十

一・二四三二)の如き例がある。この巻十一の歌の結句訓は、「せきあへてけり」(略解)、「せきあへにたり」(新訓)、「せきあへてあり」(総釈)等がある。「ゆゆし」は、慎しみなく、憚らずという意もあって、結局同一に帰するのだから、此歌の場合も、「慎しみもなく」と翻してもいいが、忌々しいの方がもっと直接的に響くようである。

○

玉勝間逢はむといふは誰なるか逢へる時さへ
面隠しする　〔巻十二・二九一六〕　作者不詳

「玉勝間」は逢うの枕詞で、タマは美称、カツマはカタマ(籠・筐)で、籠には蓋があって蓋と籠とが合うので、逢うの枕詞とした。一首の意は、一体逢おうといったのは誰でしょう。それなのに折角逢えば、顔を隠したり何かして、というので、男女間の微妙な会話をまのあたり聞くような気持のする歌である。これは男が女に向っていっているのだが、云われて居る女の甘い行為までが、ありありと眼に見えるような表現である。女の男を回避するような行為がひどく覚官的であるが、それが毫も婬靡でないのは簡浄な古語のたまものである。前にも、「面隠さるる」というのがあったが、また、「面無み」というのもあり、実体的で且つ微妙な味いのあるいい方である。

○

幼婦は同じ情に須臾も止む時も無く見むとぞ
念ふ　〔巻十二・二九二一〕　作者不詳

この幼婦のわたくしも、あなた同様、暫らくも休むことなく、絶えずあなたにお逢いしたいのです、というのであるが、男から、絶えずお前を見たいと云って来たのに対して、こういうことを云ったものであろう。この歌では、「同じこころに」と云ったのが好い。「死も生も同じ心と結びてし友や違はむ我も依りなむ」(巻十六・三七九七)、「紫草を草と別く別く伏す鹿の野は異にして心は同じ」(巻十二・三〇九九)等が参考になるだろう。なお、この歌で注意すべきは、「幼婦は」といったので、これは「わたくしは」というのと同じだが、客観的に「幼婦は」というのに却って親しみがあるようであり、「幼婦」というから此歌がおもしろいのである。

○

今は吾は死なむよ我背恋すれば一夜一日も安
けくもなし　〔巻十二・二九三六〕　作者不詳

一首の意は、あなたよ、もう私は死んでしまう方が益しです、あなたを恋すれば日は日じゅ

う夜は夜じゅう心の休まることはありませぬ、というので、女が男に愬えた趣の歌である。「死なむよ」は、「死なむ」に詠歎の助詞「よ」の添わったもので、「死にましょう」となるのであるが、この詠歎の助詞は、特別の響を持ち、女が男に愬える言葉としては、甘くて女の声その儘を聞くようなところがある。この歌を選んだのは、そういう直接性が私の心を牽いたためであるが、後世の恋歌になると、文学的に間接に堕ち却って悪くなった。

巻四(六八四)、大伴坂上郎女の、「今は吾は死なむよ吾背生けりとも吾に縁るべしと言ふといはなくに」という歌は、恐らく此歌の模倣だろうから、当時既に古歌として歌を作る仲間に参考せられていたことが分かる。なお集中、「今は吾は死なむよ吾妹逢はずして念ひわたれば安けくもなし」(巻十二・二八六九)、「よしゑやし死なむよ吾妹生けりとも斯くのみこそ吾が恋ひ渡りなめ」(巻十三・三二九八)というのがあり、共に類似の歌である。「死なむよ」の語は、前云ったように直接性があって、よく響くので一般化したものであろう。併し、「死なむよ我背」と女のいう方が、「死なむよ我妹」と男のいうよりも自然に聞こえるのは、後代の私の僻眼からか。ただ他の歌が皆この歌に及ばないところを見ると、「今は吾は死なむよ我背」が原作で、従って、「死なむよ我背」が当時の人にも自然であっただろうと謂うことが出来る。

○

吾が齢し衰へぬれば白細布の袖の狎れにし君
をしぞ念ふ　〔巻十二・二九五二〕　作者不詳

一首の意は、おれも漸く年をとって体も衰えてしまったが、今しげしげと通わなくとも、長年狎れ親しんだお前のことが思出されてならない、という程の意で、「君」というのを女にして、男の歌として解釈したのであった。無論民謡的にひろがり得る性質の歌だから、「君」をば男にして女の歌と解釈することも出来るが、やはり老人の述懐的な恋とせば男の歌とする方が適当ではなかろうか。さすれば、女のことを「君」といった一例である。それから、「白細布の袖の」までは「狎れ」に続く序詞であるが、やはり意味の相関聯するものがあり、衣の袖を纏き交した時の情緒がこの序詞にこもっているのである。

万葉に老人の恋を詠んだ歌のあることは既に前にも云ったが、なお巻十三には、「天橋も長くもがも、高山も高くもがも、月読の持たる変若水、い取り来て君に奉りて、変若得しむもの」(三二四五)、反歌に、「天なるや月日の如く吾が思へる公が日にけに老ゆらく惜しも」(三二四六)があり、なお、「沼名河の底なる玉、求めて得し玉かも、拾ひて得し玉かも、惜しき君が、老ゆらく惜しも」(三二四七)というのもある。これは女が未だ若く、男の老いゆく状況の歌であるが、

男を玉に比したり、日月に比したりして大切にしている女の心持が出ていて珍しいものである。なお、「悔しくも老いにけるかも我背子が求むる乳母に行かましものを」(巻十二・二九二六)というのもある。これは女の歌だが、諧謔だから、女はいまだ老いてはいないのであろう。略解に、「袖のなれにしとは、年経て袖のなれしと、その男の馴来しとを兼言ひて、君も我も齢のおとろへ行につけて、したしみのことになれるを言へり」とあって、女の作った歌の趣にしているのは契沖以来の説である。

○

ひさかたの天つみ空に照れる日の失せなむ日
こそ吾が恋止まめ　〔巻十二・三〇〇四〕　作者不詳

この恋はいつまでも変らぬ、空の太陽が無くなってしまうならば知らぬこと、というのであるが、恋に苦しんでいるために、自然自省的なような気持で、こういう云い方をしているのである。後代の読者には、何か思想的に歌ったようにも感ぜられるけれども、いい方の動機はそういうのではなく、もっと具体的な気持があるのである。この種のものには、「天地に少し至らぬ丈夫と思ひし吾や雄心もなき」(巻十二・二八七五)、「大地も採らば尽きめど世の中に尽きせぬものは恋にしありけり」(巻十一・二四四二)、「六月の地さへ割けて照る日にも吾が袖乾めや君に

逢はずして」(巻十・一九九五)等は、同じような発想の為方の歌として味うことが出来る。心持が稍間接だが、先ず万葉の歌の一体として珍重していいだろう。なお、「外目にも君が光儀を見てばこそ吾が恋やまめ命死なずは」(巻十二・二八八三)があり、「わが恋やまめ」という句が入って居る。

○

能登の海に釣する海人の漁火の光にい往く月
待ちがてり　〔巻十二・三一六九〕　作者不詳

まだ月も出ず暗いので、能登の海に釣している海人の漁火の光を頼りにして歩いて行く、月の出を待ちながら、というので、やはり相聞の気持の歌であろう。男が通ってゆく時の或時の逢遭を詠んだものと解釈していいだろうが、比較的独詠的な分子がある。「光に」の「に」という助詞は此歌の場合には注意していいもので、「み空ゆく月の光にただ一目あひ見し人し夢にし見ゆる」(巻四・七一〇)、「玉だれの小簾の隙に入りかよひ来ね」(巻十一・二三六四)、「清き月夜に見れど飽かぬかも」(巻二十・四四五三)、「夜のいとまに摘める芹これ」(同・四四五五)等の「に」と同系統のもので色調の稍ちがうものである。なお、「夕闇は道たづたづし月待ちて往かせ吾背子その間にも見む」(巻四・七〇九)と此歌と気持が似て居る。いずれにしても燈火を余り使わず

に女のもとに通ったころのことが思出されておもしろいものである。

○

あしひきの片山雉立ちゆかむ君におくれて顕しけめやも　〔巻十二・三一一〇〕　作者不詳

旅立ってゆく男にむかって女の云った歌の趣である。「片山雉」までは「立つ」につづく序詞である。旅立たれるあなたと離れて私ひとりとり残されて居るなら、もう心もぼんやりしてしまいましょう、というので、「顕しけめやも」、現ごころに、正気で、確りして居ることが出来ようか、それは出来ずに、心が乱れ、茫然として正気を失うようになるだろうという意味に落着くのである。この雉を持って来た序詞は、鑑賞の邪魔をするようでもあるが、私は、意味よりも音調にいいところがあるので棄て難かったのである。「偽りも似つきてぞする現しくもまこと吾妹子われに恋ひめや」(巻四・七七一)、「高山と海こそは、山ながらかくも現しく」(巻十三・三三三二)、「大丈夫の現心も吾は無し夜昼といはず恋ひしわたれば」(巻十一・二三七六)等が参考となるだろう。なお、「春の日のうらがなしきにおくれゐて君に恋ひつつ顕しけめやも」(巻十五・三七五二)という、狭野茅上娘子の歌は全くこの歌の模倣である。おもうに当時の歌人等は、家持などを中心として、古歌を読み、時にはかく露骨に模倣したことが分かり、模倣心理の昔も今

もかわらぬことを示している。「丹波道の大江の山の真玉葛絶えむの心我が思はなくに」（巻十二・三〇七一）というのも序詞の一形式として書いておく。

以上で巻十二の選は終ったが、従属的にして味ってもいいものが若干首あるから序に書記しておこう。たいして優れた歌ではない。

死なむ命此は念はずただにしも妹に逢はざる事をしぞ念ふ　（巻十二・二九二〇）
各自ひと死すらし妹に恋ひ日に日に痩せぬ人に知らえず　（同・二九二八）
うまさはふ目には飽けども携はり問はれぬことも苦しかりけり　（同・二九三四）
思ふにし余りにしかば術を無み吾はいひてき忌むべきものを　（同・二九四七）
現身の常の辞とおもへども継ぎてし聞けば心惑ひぬ　（同・二九六一）
あしひきの山より出づる月待つと人にはいひて妹待つ吾を　（同・三〇〇二）
夕月夜あかとき闇のおぼほしく見し人ゆゑに恋ひわたるかも　（同・三〇〇三）

巻第十三

○

相坂をうち出でて見れば淡海の海白木綿花に
浪たちわたる　（巻十三・三二三八）　作者不詳

長歌の反歌で、長歌は、「山科の石田の森の、皇神に幣帛とり向けて、吾は越えゆく、相坂山を」云々。もう一つのは、「我妹子に淡海の海の、沖つ浪来寄す浜辺を、くれぐれと独ぞ我が来し、妹が目を欲り」云々というので、大和から近江の恋人の処に通う趣の歌である。この短歌の意味は、相坂（逢坂）山を越えて、淡海の湖水の見えるところに来ると、白木綿で作った花のように白い浪が立っている、というので、大きい流動的な調子で歌っている。この調子は、はじめて湖の見え出した時の感じに依るもので、従って恋人に近づいたという情緒にも関聯するのである。そこで、「うち出でて見れば」と云って、「浪たちわたる」と結んでいるのである。即ちこの歌では「見れば」が大切だということになり、源実朝の、「箱根路をわが越え来れば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」との比較の時にも伊藤左千夫がそう云っている。実際、万葉の此歌に較べると実朝の歌が見劣りのするのは、第一声調がこの歌ほど緊張していないか

らであった。この歌は、「白木綿花(神に捧げる幣の代用とした造花)に」などと現代の人の耳に直ぐには合わないような事を云っているが、はじめて見え出した湖に対する感動が極めて自然にあらわれているのが好いのである。第三句は、アフミノミでもアフミノウミでもどちらでも好い。それから、「淡海の海」と、「伊豆の海や」との比較にもなるのであるが、やはり「淡海の海」とした方がまさっているだろう。次にこの歌では、「相坂をうち出でて見れば」と云っているが、これを赤人の、「田児の浦ゆうち出でて見れば」と比較することも出来る。「打出でて見れば」は「打出の浜」という名とは関係なく、若しあっても後世の命名であろう。

○

敷島の日本の国に人二人ありとし念はば何か
嗟かむ　(巻十三・三二四九)　　作者不詳

一首の意は、若しもこの日本の国にあなたのような方がお二人おいでになると思うことが出来ますならば、何してこんなに嗟きましょう。恋しいあなたが唯お一人のみゆえこんなにも悲しむのです、というので、この歌の「人」は貴方というぐらいの意味である。この歌は女としての心の働き方が特殊で、今までの相聞歌の心の動き方と違うところがあっていい。この歌の長歌は、「敷島の大和の国に、人さはに満ちてあれども、藤波の思ひ纏はり、若草の思ひつきに

し、君が目に恋ひやあかさむ、長きこの夜を」(三二四八)というので、この反歌と余り即き過ぎぬところが旨いものである。この長歌の「人」は人間というぐらいの意だが、やはり男という意味が勝っているであろう。

略解で、「わがおもふ人のふたりと有ものならば、何かなげくべきと也」と云ったのは簡潔でいい。なお、この短歌の、「人二人」云々につき、代匠記で遊仙窟の「天上無レ双人間有レ一」という句を引いていたが、この歌の作られた頃に、遊仙窟が渡来したか奈何も定めがたいし、「人二人ありとし念はば」というようないい方は相聞心の発露としてそのころでも云い得たものであろう。明治新派和歌のはじめの頃、服部躬治氏は、「天地の間に存在せるはたゞ二人のみ。二人のみと観ぜむは、夫婦それ自身の本能なり。観ぜざるべからざるにあらず、おのづからにして観ずべしとす。夫婦はしかも一体なり。大なる我なり。我を離れて天地あらず、天地の相は我の相なり。既に我の相を自識し、我の存在を自覚せらば、何をもとめて何かなげかむ。我は長へに安かるべく、世は時じくに楽しかるべし。蓋しこの安心は絶対なり」(恋愛詩評釈)と解釈し、古義の解釈を、「何ぞそれ鑑識のひくきや」等と評したのであったが、やはり従来の解釈(略解・古義等)の方が穏当であった。併し新派和歌当時の万葉鑑賞の有様を参考のために示そうとしてここに引用したのである。

○

川の瀬の石ふみ渡りぬばたまの黒馬の来る夜は常にあらぬかも　（巻十三・三三一三）作者不詳

長歌の反歌で、長歌は、「こもりくの泊瀬小国に、よばひせす吾がすめろぎよ」云々という女の歌である。この短歌は、川瀬の石を踏渡って私のところに黒馬の来る晩はいつでも変らずこうあらぬものか、毎晩御通いになることを御願しております、というので、「常にあらぬかも」は疑問をいって、願望になっているのである。「我が命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため」（巻三・三三二）の「常にあらぬか」がやはりそうである。巻四（五二五）、坂上郎女の、「佐保河の小石踏み渡りぬばたまの黒馬の来る夜は年にもあらぬか」は、恐らくこの歌の模倣だろうと想像すれば、既に古歌として伝誦せられ、作歌の時の手本になったものと見える。「黒馬」といったのは印象的でいい。

巻十三から選んだ短歌は以上のごとく少いが、巻十三は長歌で特色のあるものが多い。然るにこの選は長歌を止めたから、その結果がかくのごとくになった。

巻第十四

○

夏麻引く海上潟の沖つ渚に船はとどめむさ夜ふけにけり　（巻十四・三三四八）　東歌

この巻十四は、いわゆる「東歌」になるのであるが、東歌は、東国地方に行われた、概して民謡風な短歌を蒐集分類したもので、従って巻十・十一・十二あたりと同様作者が分からない。併し、作者も単一でなく、中には京から来た役人、旅人等の作もあろうし、京に住んだことのある遊行女婦のたぐいも交っていようし、或は他から流れこんだものが少しく変形したものもあり、京に伝達せられるまで、（折口博士は、大倭宮廷に漸次に貯留せられたものと考えている。）幾らか手を入れたものもあるだろう。そういう具合に単一でないが、大体から見て東国の人々によって何時のまにか作られ、民謡として行われていたものが大部分を占めるようである。従って巻十四の東歌だけでも、年代は相当の期間が含まれているものの如く、歌風は、大体訛語を交えた特有の歌調であるが、必ずしも同一歌調で統一せられたものではない。

「夏麻ひく」は夏の麻を引く畑畝のウネのウからウナカミのウに続けて枕詞とした。「海上

潟」は下総に海上郡があり、即ち利根川の海に注ぐあたりであるが、この東歌で、「右一首、上総国の歌」とあるのは、古え上総にも海上郡があり、今市原郡に合併せられた、その海上であろう。そうすれば東京湾に臨んだ姉ケ崎附近だろうとせられて居る。一首の意は、海上潟の沖にある洲のところに、船を泊めよう、今夜はもう更けてしまった、というのである。単純素朴で古風な民謡のにおいのする歌である。「船はとどめむ」はただの意響でなく感慨が籠っていてそこで一たび休止している。それから結句を二たび起して詠歎の助動詞で止めているから、下の句で二度休止がある。此歌は、伸々とした歌調で特有な東歌ぶりと似ないので、略解などでは、東国にいた京役人の作か、東国から出でて京に仕えた人の作ででもあろうかと疑っている。また巻七(一一七六)に、「夏麻引く海上潟の沖つ洲に鳥はすだけど君は音もせず」というのがあって、上の句は全く同一である。この巻七の歌も古い調子のものだから、どちらかが原歌で他は少し変化したものであろう。巻七の歌も「羇旅にて作れる」の中に集められているのだから、東国での作だろうと想像せられるにより、二つとも伝誦せられているうち、一つは東歌として蒐集せられたものの中に入ったものであろう。二つ較べると巻七の方が原歌のようでもある。

この歌の次に、「葛飾の真間の浦廻を榜ぐ船の船人さわぐ浪立つらしも」(巻十四・三三四九)という東歌(下総国歌)があるのに、巻七(一二二八)に、「風早の三穂の浦廻を榜ぐ船の船人さわぐ

浪立つらしも」という歌があって、下の句は全く同じであり、風早の三穂は風早を風の強いことに解し、三穂を駿河の三保だとせば、どちらかが原歌で、伝誦せられて行った近国の地名に変形したもので、巻七の歌の方が原歌らしくもある。併し、此等の東歌というのも、やはり東国で民謡として行われていたことは確かであろう。仙覚抄に、「ヨソヘヨメル心アルベシ」云々とあるのは、民謡的なものに感じての説だとおもう。

○

筑波嶺に雪かも降らる否をかも愛しき児ろが
布乾さるかも　(巻十四・三三五一)　東歌

常陸国の歌という左注が附いている。一首の意は、白く見えるのは筑波山にもう雪が降ったのか知ら、いやそうではなかろう、可哀いい娘が白い布を干しているのだろう、というほどの意で、「否をかも」は「否かも」で「を」は調子のうえで添えたもの、文法では感歎詞の中に入れてある。「相見ては千歳や去ぬる否をかも我や然念ふ君待ちがてに」(巻十一・二五三九)の「否をかも」と同じである。古樸な民謡風のもので、二つの聯想も寧ろ原始的である。それに、「降れる」というところを「降らる」と訛り、「乾せる」というところを「乾さる」と訛り、「かも」という助詞を三つも繰返して調子を取り、流動性進行性の声調を形成しているので、一種の快

感を以て労働と共にうたうことも出来る性質のものである。「かなしき」は、心の切に動く場合に用い、此処では可哀いくて為方のないという程に用いている。「児ろ」の「ろ」は親しんでつけた接尾辞で、複数をあらわしてはいない。この歌はなかなか愛すべきもので、東歌の中でもすぐれて居る。

ニヌは原文「爾努」で旧訓ニノ。仙覚抄でニヌと訓み、考でニヌと訓んだ。布の事だが、古鈔本中、「爾」が「企」になっているもの(類聚古集)があるから、そうすれば、キヌと訓むことになる。即ち衣となるのである。

○

信濃なる須賀の荒野にほととぎす鳴く声きけば時過ぎにけり　〔巻十四・三三五二〕　東　歌

「すがの荒野」を地名とすると、和名鈔の筑摩郡苧賀郷で、梓川と楢井川との間の曠野だとする説(地名辞書)が有力だが、他にも説があって一定しない。元は普通名詞即ち菅の生えて居る荒野という意味から来た土地の名だろうから、此処は信濃の一地名とぼんやり考えても味うことが出来る。一首の意は、信濃の国の須賀の荒野に、霍公鳥の鳴く声を聞くと、もう時季が過ぎて夏になった、というのである。霍公鳥の鳴く頃になったという詠歎で、この季節の移動を

詠歎する歌は集中に多いが、この歌は民謡風なものだから、何か相聞的な感じが背景にひそまっているだろう。「秋萩の下葉の黄葉花につぐ時過ぎ行かば後恋ひむかも」(巻十・二二〇九)、次に評釈する、「このくれの時移りなば」(巻十四・三三五五)、「わたつみの沖つ縄海苔来る時と妹が待つらむ月は経につつ」(巻十五・三六六三)、「恋ひ死なば恋ひも死ねとやほととぎす物思ふ時に来鳴き響むる」(同・三七八〇)等の心持を参照すれば、此歌の背後にある恋愛情調をも感じ得るのである。つまり誰かを待つという情調であろう。そして信濃国でこういう歌が労働のあいまなどに歌われたものであろう。民謡だから自分等のうたう歌に地名を入れるので、他にも例が多く、必ずしも羈旅にあって詠んだとせずともいいであろう。「アラノ」(安良能)といって「アラヌ」(安良努)と云わなかったのは、この歌ではアラノと発音していたことが分かる。一種の地方訛であっただろう。この歌の調子はほかの東歌と似ていないが、こういう歌をも信濃でうたっていたと解釈すべきで、共に日本語だから共通していて毫もかまわぬのである。賀茂真淵が、この歌を模倣して、「信濃なる菅の荒野を飛ぶ鷲の翼もたわに吹く嵐かな」と詠んだが、未だ万葉調になり得なかった。「吹く嵐かな」などという弱い結句は万葉には絶対に無い。

○

天の原富士の柴山木の暗の時移りなば逢はず
かもあらむ　〔巻十四・三三五五〕　東　歌

これは駿河国歌で相聞として分類している。「天のはら富士の柴山木の暗の」までは「暮」(夕ぐれ)に続く序詞で、空に聳えている富士山の森林のうす暗い写生から来ているのである。一首の意は夕方に逢おうと約束したから、こうして待っているがなかなか来ず、この儘時が移って行ったら逢うことが出来ないのではないか知らん、というので、この内容なら普通であるが、そのあたりで歌った民謡で、富士の森林を入れてあるし、ウツリ(移り)をユツリと訛っていたりするので、東歌として集められたものであろう。この歌の、「時移りなば」の句は、時間的には短いが、その気持は、前の「信濃なる」の歌を解釈する参考となるものである。取りたてていう程の歌でないが、「妹が名も吾が名も立たば惜しみこそ富士の高嶺の燃えつつわたれ」(巻十一・二六九七)などと共に、富士山を詠みこんでいるので注意したのであった。

○

足柄の彼面此面に刺す絹のかなる間しづみ児
ろ我紐解く　〔巻十四・三三六一〕　東　歌

相模国歌で、足柄は範囲はひろかったが、此処は足柄山とぼんやり云っている。「彼面此面」は熟語で、あちらにもこちらにもというのであろう。下に、「筑波嶺のをてもこのもに」(三三九三)という例があり、東歌的訛の口調である。巻十七(四〇一一)の長歌で家持が、「あしひきのをてもこのもに鳥網張り」云々と使ったのは、此歌の模倣で必ずしも都会語ではなかっただろう。「かなる間しづみ」はよく分からない。代匠記では鹿鳴間沈で、鹿の鳴いて来る間に屏息して待っている意に取ったが、或は、「か鳴る間しづみ」で、絹に動物がかかって音立てること、鳴子のような装置でその音響を知ることで、「か鳴る」の「か」は接頭辞であろう。その動物のかかる間、じっと静かにして、息をこらしてということになるであろう。

一首の意は、「かなる間しづみ」までは序詞で、いろいろとうるさい噂などが立つが、じっとこらえて、こうしてお前とおれは寝るのだよ、というのである。代匠記に、「シノビテ通フ所ニモ皆人ノ臥シヅマルヲ待テ児等モ吾モ共ニ下紐解トナリ」と云っている。結句の、八音の中に、「児ろ吾紐解く」即ち、可哀い娘と己とがお互に着物の紐を解いて寝る、という複雑なことを

入れであり、それが一首の眼目なのだから、調子がつまってなだらかに伸びていない。それに上の方も順じて調子がやはり重く圧搾されているが、全体としては進行的な調子で、労働歌の一種と感ずることが出来る。恐らく足柄山中の樵夫などの間に行われたものであっただろう。調子も古く感じ方材料も古樸でおもしろいものである。

「荒男のい小箭手挾み向ひ立ちかなる間しづみ出でてと我が来る」(巻二十・四四二〇)は「昔年の防人の歌」とことわってあるが、此歌にも、「かなる間しづみ」という語が入っている。併し此語は巻十四の歌語を踏まえて作ったものと看做すことも出来るから、この語の原意は巻十四の方にあるだろう。なお、「はろばろに家を思ひ出、負征箭のそよと鳴るまで、歎きつるかも」(巻二十・四三九八)、「この床のひしと鳴るまで嘆きつるかも」(巻十三・三二七〇)がある。

○

ま愛しみさ寝に吾は行く鎌倉の美奈の瀬河に
潮満つなむか　〔巻十四・三三六六〕　東歌

相模国歌で、「みなの瀬河」は今の稲瀬川で坂の下の東で海に入る小川である。一首は、恋しくなってあの娘の処に寝に行くが、途中の鎌倉のみなのせ川に潮が満ちて渡りにくくなっているだろうか、というのである。「潮満つなむか」は、「潮満つらむか」の訛である。内容は古樸な

民謡で取りたてていう程のものではないが、歌調が快く音楽的に運ばれて行くのが特色で、こういう独特の動律で進んでゆく歌調は、人麿の歌などにも無いものである。例えば、「玉裳の裾に潮みつらむか」(巻一・四〇)でもこう無邪気には行かぬところがある。また、「ま愛しみ寝らく愛けらくさ寝らくは伊豆の高嶺の鳴沢なすよ」(三三五八或本歌)などでも東歌的動律だが、この方には繰返しが目立つのに、鎌倉の歌の方はそれが目立たずに快い音のあるのは不思議である。

○

武蔵野の小岫が雉立ち別れ往にし宵より夫ろに逢はなふよ　〔巻十四・三三七五〕　東歌

「岫」は和名鈔に山穴似袖云々といっているが、小山に洞などがあって雉子の住む処を聯想せしめる。雉が飛立つので、「立ち別れ」に続く序詞とした。「逢はなふよ」は「逢わず・よ」「逢わぬ・よ」、「逢わない・よ」である。一首の意は、あの晩に別れたきり、いまだに恋しい夫に逢わずに居ります、という女の歌であるが、結句の訛と、「よ」なども特殊なものにしている。東歌には、結句に、「鳴沢なすよ」などもあり、他に余りない結句である。この歌の結句は、「崩岸辺から駒の行こ如す危はども人妻児ろをまゆかせらふも」(巻十四・三五四一)(目ゆかせざらむや)のに似ている。一首全体として見れば、武蔵野と丘陵と雉の生活と、別れた夫を慕う心と合

体して邪気の無い快い歌を形成している。

○

鳰鳥の葛飾早稲を贄すとも其の愛しきを外に立てめやも　〔巻十四・三三八六〕　東　歌

下総国の歌。鳰鳥(かいつぶり)は水に潜くので、葛飾のかずへの枕詞とした。葛飾は今の葛飾区一帯。「贄」は神に新穀を供え祭ること、即ち新嘗の祭をいう。「にへ」は贄で、「にひなめ」は、「にへのいみ」(折口博士)の義だとしてある。一首の意は、今は縦い葛飾で出来た早稲の新米を神様に供えてお祭をしている大切な、身を潔くしていなければならない時であっても、あの恋しいお方のことですから、空しく家の外に立たせては置きませぬ、というので、「その愛しき」の「その」は憶良の歌にもあった、「そのかの母も」(巻三・三三七)の場合と同じである。軽く「あの」ぐらいにとればいい。それにしても、自分の恋しいあのお方ということを、「その愛しきを」という、簡潔でぞくぞくさせる程の情味もこもりいる、まことに旨い言葉である。農業民謡で、稲扱などをしながら大勢して歌うこともまた可能である。

○

信濃路は今の墾道刈株に足踏ましむな履著け我が夫　〔巻十四・三三九九〕　東　歌

信濃国歌。「今の墾道」は、まだ最近の墾道というので、「新治の今つくる路さやかにも聞きにけるかも妹が上のことを」(巻十二・二八五五)が参考になる。一首の意は、信濃の国の此処の新開道路は、未だ出来たばかりで、木や竹の刈株があってあぶないから、踏んで足を痛めてはなりませぬ、吾が夫よ、履をお穿きなさい、というのである。履は藁靴であっただろう。これも、旅人の気持でなく、現在其処にいても、「信濃路は」といっていること、前の、「信濃なる須賀の荒野に」と同じである。山野を歩いて為事をする夫の気持でやはり農業歌の一種と看ていい。「かりばね」は「苅れる根を言ふべし」(略解)だが、原意はよく分からぬ。近時「刈生根」の転(井上博士)だろうという説をたてた。私の郷里では足を踏むことをカックイ・フムといっている。

○

吾が恋はまさかも悲し草枕多胡の入野のおく
もかなしも　〔巻十四・三四〇三〕　東　歌

上野国歌。「多胡」は上野国多胡郡。今は多野郡に属した。「草枕」を「多胡」の枕詞としたのは、タビの夕に続けたので変則の一つである。垂水之水能早敷八師（巻十二・三〇二五）で、ハヤシのハとハシキヤシのハに続けたたぐいである。「入野」は山の方へ深く入りこんだ野という意味であろう。「まさか」は「正か」で、まさしく、現に、今、等の意に落着くだろう。「梓弓するはし知らず然れどもまさかは君に縁りにしものを」（巻十二・二九八五）、「しらがつく木綿は花物ことこそは何時のまさかも常忘らえね」（同・二九九六）、「伊香保ろの傍の榛原ねもころに奥をな兼ねそまさかし善かば」（巻十四・三四一〇）、「さ百合花後も逢はむと思へこそ今のまさかも愛しみすれ」（巻十八・四〇八八）等の例がある。一首の意は、自分の恋は、いま現にこんなにも深く強い。多胡の入野のように（序詞）奥の奥まで相かわらずいつまでも深くて強い、というのである。「まさかも」、それから、「おくも」と続いており、「かなし」を繰返しているが、このカナシという音は何ともいえぬ響を伝えている。民謡的に誰がうたってもいい。多胡郡に働く人々の口から口へと伝わったものと見えるが、甘美でもあり切実の悲哀もあり、不思議にも身

に沁みるいい歌である。この歌は男の歌か女の歌か、略解も古義も女の歌として居り、「夫の旅別の其際もかなし、別て末に思はむも悲しといふ也」（略解）とあるが、却って男の歌として解し易いようでもある。併しこういうのになると、男でも女でも、その境界を超えたひびきがあり、無論作者がどういう者だろうかなどという個人を絶してしまっている。

○

上毛野安蘇の真麻むら掻き抱き寝れど飽かぬ
を何どか吾がせむ　〔巻十四・三四〇四〕　東　歌

上野国歌。「安蘇」は下野安蘇郡であろうが、もとは上野に入っていたと見える。この巻に、「下毛野安素の河原よ」（三四二五）とあるのは隣接地で下野にもかかっていたことが分かる。「真麻むら」は、真麻の群で、それを刈ったものを抱きかかえて運ぶから、「抱き」に続く序詞とした。一首の意は、真麻むらの麻の束を抱きかかえるように（序詞）可哀いお前を抱いて寝たが、飽きるということがない、どうしたらいいのか、というのである。これも農民のあいだに伝わったものであろうが、序詞も無理でなく、実際生活を暗指しつつ恋愛情緒を具体的にいって、少しもみだらな感を伴わず、嫉ましい感をも伴わないのは、全体が邪気なく快いものだからであろう。それにはアドカ・アガセムという訛も手伝っているらしく思われるけれども、単

にそれのみでなく、「何か吾がせむ」という切実な句が此歌の価値を高めているからであろう。この句は万葉に「あどせろとかもあやに愛しき」(巻十四・三四六五)の例があるのみで、ほかは、「家に行きて如何にか吾がせむ枕づく嬬屋さぶしく思ほゆべしも」(巻五・七九五)、「斯くばかり面影のみに思ほえばいかにかもせむ人目繁くて」(巻四・七五二)、「今のごと恋しく君が思ほえばいかにかもせむ為るすべのなさ」(巻十七・三九二八)等の例があるのみである。東歌の中でも私はこの歌を愛している。

○

伊香保ろのやさかの堰に立つ虹の顕ろまでも
さ寝をさ寝てば　〔巻十四・三四一四〕　東　歌

「やさかの堰」は八坂という処にあった河水を湛え止めた堰(いぜき・せき・つつみ)であろう。八坂は今の伊香保温泉の東南に水沢という処がある、其処だろうと云われている。一首の意は、伊香保の八坂の堰に虹があらわれた(序詞)どうせあらわれるまでは(人に知れるまでは)、お前と一しょにこうして寝ていたいものだ、というのであるが、これも「さ寝をさ寝てば」などと云っても、不潔を感ぜぬのみならず、河の井堰の上に立った虹の写象と共に、一種不思議な快いものを感ぜしめる。虹の歌は万葉集中此一首のみだからなお珍重すべきものである。虹

は此歌では、努自と書いてあるが、能自、禰自、爾自等と変化した。古事記に、「うるはしとさ寝しさ寝てば苅薦の乱れば乱れさ寝しさ寝てば」という歌謡があり、この巻にも、「河上の根白高萱あやにあやにさ寝さ寝てこそ言に出にしか」(三四九七)というのがあって参考になる。「顕ろまで」は、「顕るまで」の訛で、こういう訛もまた一首の鑑賞に関係あらしめている。虹の如き鮮明な視覚写象と、男女相寝るということとの融合は、単に常識的合理な聯想に依らぬ場合があり、こういう点になると古代人の方が我々よりも上手のようである。

○

下毛野みかもの山の小楢如す目細し児ろは誰が笥か持たむ　〔巻十四・三四二四〕　東　歌

下毛野安蘇の河原よ石踏まず空ゆと来ぬよ汝が心告れ　〔巻十四・三四二五〕　東　歌

下野歌を二つ一しょに此処に書いた。第一の歌、「みかも」は、延喜式の都賀郡三鴨駅、今、下都賀郡、岩舟駅の近くにある。下野の三鴨の山に茂っている小楢の葉の美しいように、美しく可哀らしいあの娘は、誰の妻になって、食事の器を持つだろう、御飯の世話をするだろう、

というのだが、やはりつまりはおれの妻になるのだということになる。疑問に云っているがつまりは自らに肯定する云い方である。古代民謡は、ただ悲観的に反省し諦念してしまわないのが普通だからである。それからこの小檜の如く美しいというのは、檜の若葉の感じである。結句多賀家可母多牟は、「手カケカモタム」(仙覚抄)、「高キカモタムニテ、高キハ夫ナリ。夫ハ妻ノタメニハ天ナレバ高キト云ヘリ」(代匠記)等と解したが、大神真潮が、誰笥敷将持の意に解し、古義で紹介した。「香具山は畝火を愛しと」の解と共に永久不滅である。但し、拾穂抄に既に、「誰が家か持たむ」の説があるが、「笥」までは季吟も思い及ばなかったのである。

第二の歌は、前にあった安蘇と同じ土地で、そこの河である。安蘇河の河原の石も踏まず、空から飛んでお前のところにやって来たのだ、何が何だか分からず宙を飛ぶような気持でやって来たのだから、これ程おもう俺にお前の気持をいって呉れ、というので、「空ゆと来ぬ」が特殊ないい方で、今の言葉なら、「宙を飛んで来た」ぐらいになる。巻十二(二九五〇)に、「吾妹子が夜戸出の光儀見てしよりこころ空なり地は踏めども」も、足が地に着かず、宙を歩いているような気持をあらわしている。

こういう歌は、当時の人々は楽々と作り、快く相伝えていたものとおもうが、現在の吾々は、ただそれを珍らしいと思うばかりでなく、技巧的にもひどく感心するのである。小檜の若葉の日光に透きとおるような柔かさと、女の膚膩の健康な血をとおしている具合とを合体せしめる

感覚にも感心せしめられるし、「誰が笥か持たむ」という簡潔で、女の行為が男に接触する程な鮮明を保持せしめているいい方も、石も踏まずとことわって、さて虚空を飛んで来たという云い方も、一体何処にこういう技法力があるのだろうとおもう程である。ただもともと民謡だから、全体が軽妙に運ばれたもので、そこが個人的独詠歌などと違う点なのである。

○

鈴が音の早馬駅の堤井の水をたまへな妹が直手よ　〔巻十四・三四三九〕　東歌

雑歌。「早馬駅」は、早馬を準備してある駅という意。「堤井」は、湧いている泉を囲った井で、古代の井は概ねそれであった。一首の意は、鈴の音の聞こえる、早馬のいる駅(宿場)の泉の水は、どうか美しいあなたの直接の手でむすんで飲ましてください、というのである。この歌も、早馬を引く馬方などの口でうたわれたものか、少くともそういう場処が作歌の中心であっただろう。そして駅には古もかわらぬ可哀い女がいただろうから、そこで、「妹が直手よ」という如き表現が出来るので、実にうまいものである。「直手よ」の「よ」は「より」で、直接あなたの手からというのである。いずれにしても快い歌である。

○

おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじり
生ひは生ふるがに　〔巻十四・三四五二〕　東　歌

こころよいこの春の野を焼くな。去年の冬枯れた古草にまじって、新しい春の草が生えて来るから、というので、「生ふるがに」は、生うべきものだからというぐらいの意である。「おもしろし」も今の語感よりも、もっと感に入る語感で、万葉で何怜の字を当てているのを以ても分かる。こころよい、なつかしい、身に沁みる等と翻していい場合が多い。何怜を「あはれ」とも訓むから、その情調が入っているのである。この歌の字面はそれだけだが、この歌は民謡で、野の草を哀憐する気持の歌だから、引いて人事の心持、古妻というような心持にも聯想が向くのであるが、現在の私等はあっさりと鑑賞して却って有益な歌なのかも知れない。

○

稲舂けば蹕る我が手を今宵もか殿の稚子が取
りて嘆かむ　〔巻十四・三四五九〕　東　歌

「蹕る」は、蹕のきれることで、アカガリ、アカギレともいう。「殿の稚子」は、地方の国守

とか郡守とか豪族とかいう家柄の若君をいうので、歌う者はそれよりも身分の賤しい農婦として使われている者か、或は村里の娘たちという種類の趣である。一首の意は、稲を舂いてこんなに蹕の切れた私の手をば、今夜も殿の若君が取られて、可哀そうだとおっしゃることでしょう、御一しょになる時にお恥しい心持もするという余情がこもっている。内容が斯く稍戯曲的であるから、いろいろ敷衍して解釈しがちであるが、これも農民のあいだに行われた労働歌の一種で、農婦等がこぞってうたうのに適したものである。それだから「殿の若子」も、この「我が手」の主人も、誰であってもかまわぬのである。ただこの歌には、身分のいい青年に接近している若い農小婦の純粋なつつましい語気が聞かれるので、それで吾々は感にたえぬ程になるのだが、よく味えばやはり一般民謡の特質に触れるのである。併しこれだけの民謡を生んだのは、まさに世界第一流の民謡国だという証拠である。なおこの巻に、「都武賀野に鈴が音きこゆ上志太の殿の仲子し鳥狩すらしも」(三四三八)というのがあって、一しょにして鑑賞することが出来る。「仲子」は次男のことである。

○

あしひきの山沢人の人多にまなといふ児があ
やに愛しさ　〔巻十四・三四六二〕　東　歌

足引の山沢人の」までは「人さはに」に続く序詞で、山の谿沢に住んで居る人々、樵夫などのたぐいをいう。「まなといふ児」は、可哀いと評判されている娘ということである。そこで一首は、山沢人だち(序詞)おおぜいの人々が美しい可哀いと評判しているあの娘は、私にはこの上もなく可哀い、恋しい、というのである。この歌も普通と違ったところがある。自分の恋しているあの娘は人なかでも評判がいいというので内心喜ぶ心持もあり、人なかで評判のいい娘を私も恋しているので不安で苦しくもあるという気持もあるのである。山間に住ついて働く人々の中にこういう民謡があったものと見える。「多麻河に曝す手作さらさらに何ぞこの児のここだ愛しき」(巻十四・三三七三)、「高麗錦紐解き放けて寝るが上に何ど為ろとかもあやに愛しき」(同・三四六五)、「垣越しに麦食む小馬のはつはつに相見し児らしあやに愛しも」(同・三五三七)等の例がある。

○

植竹の本さへ響み出でて去なば何方向きてか
妹が嘆かむ　(巻十四・三四七四)　東歌

「植竹の」は竹林のことで、竹の根本から「本」への枕詞とした。家じゅう大騒ぎして私が旅立ったら、妻は嘸歎き悲しむことだろう、というので、代匠記以来、防人などに出立の時の

歌ででもあろうかといっている。この巻に、「霞ゐる富士の山傍に我が来なば何方向きてか妹が歎かむ」(三三五七)の例がある。この歌を私は嘗て、女と言い争うか何かして、あらあらしく騒いで女の家を立退く趣に解したことがある。即ち植竹の幹の本迄響くように荒々しく怒って立退くあとで、妹を可哀くおもって反省した趣にしたのであった。そして、「背向に寝しく今しくやしも」(巻七・一四一二)などをも参照にしたのであったが、今回は契沖以下の先輩の注釈書に従うことにしたけれども、必ずしも防人出立とせずに、民謡的情事の一場面としても味うことが出来るのである。

○

麻苧らを麻笥に多に績まずとも明日来せざめ
やいざせ小床に　(巻十四・三四八四)　東歌

麻苧の糸を娘が績んでいるのに対って男がいいかける趣の歌で、「ら」は添えたものである。「ふすさに」は沢山の意。巻八(一五四九)にある、「なでしこの花ふさ手折り吾は去なむ」の「ふさ」、巻十七(三九四三)にある、「我背子がふさ手折りける」の「ふさ」も同じ語であろうか。一首は、麻苧をそんなに沢山笥に紡がずとも、また明日が無いのではないから、さあ小床に行こう、というのである。「いざせ」の「いざ」は呼びかける語、「せ」は「為」で、この場

合は行こうということになる。「明日きせざめや」を契沖は、「明日着セザラメヤ」と解いたが、それよりも「明日来せざらめや也。明日来といふは、凡て月日の事を来歴ゆくと言ひて、明日の日の来る事也」という略解(宣長説)の穏当を取るべきであろう。これも田園民謡で、直接法をしきりに用いているのがおもしろく、特に結句の「いざ・せ・小床に」というのはただの七音の中にこれだけ詰めこんで、調子を破らないのは、なかなか旨いものである。

○

児もち山若かへるでの黄葉まで寝もと吾は思
ふ汝は何どか思ふ　〔巻十四・三四九四〕　東　歌

「児持山」は伊香保温泉からも見える山で、渋川町*の北方に聳えている。一首は、あの子持山の春の楓の若葉が、秋になって黄葉するまでも、お前と一しょに寝ようと思うが、お前はどうおもう、というので、誇張するというのは既に親しんでいる証拠でもあり、その親しみが露骨でもあるから、一般化し得る特色を有つのである。「汝は何どか思ふ」と促すところは、会話の語気その儘であるので感じに乗ってくるのである。「吾をぞも汝に依すとふ、汝はいかに思ふや」(巻十三・三三〇九)という長歌の句は、この東歌に比して間が延びて居るように感ずるのである。

○

高き峰に雲の着く如す我さへに君に着きなな
高峰と思ひて　〔巻十四・三五一四〕　東　歌

高い山に雲が着くように、私までも、あなたに着きましょう、あなたを高い山だとおもって、というので、何か諧謔の調のあるのは、親しみのうちに大勢してうたえるようにも出来ており、民謡特有の無遠慮な直接性があるのである。高峰を繰返してもいるが、結句の「高峰ともひて」には親しい甘いところがあっていい。

○

我が面の忘れむ時は国溢り峰に立つ雲を見つ
つ偲ばせ　〔巻十四・三五一五〕　東　歌

あなたが旅にあって、若しも私の顔をお忘れになるような時は、国に溢れて立つ雲の峰を御覧になっておもい出して下さいませ、というので、これは寄雲恋というように分類しているが、雲の峰を常に見ているのでこういう聯想になったものであろう。この誇張らしいいい方は諧謔でない重々しいところがあるので感が深いようである。この歌の次の、「対馬の嶺は下雲あら

なふ上の嶺にたなびく雲を見つつ偲ばも」(巻十四・三五一六)は、男の歌らしいから、防人の歌でもあって、前のは防人の妻ででもあろうか。なお、「面形の忘れむ時は大野ろにたなびく雲を見つつ偲ばむ」(同・三五二〇)も類似の歌であるが、この「国溢り」の歌が一番よい。なお、「南吹き雪解はふりて、射水がはながる水泡の」(巻十八・四一〇六)、「射水がは雪解溢りて、行く水のいやましにのみ、鶴がなくなごえの菅の」(同・四一一六)の例もあり、なお、「君が行く海辺の宿に霧立たば吾が立ち嘆く息と知りませ」(巻十五・三五八〇)等、類想のものが多い。

○

昨夜こそは児ろとさ宿しか雲の上ゆ鳴き行く
鶴の間遠く思ほゆ　〔巻十四・三五二二〕　東　歌

「雲の上ゆ鳴き行く鶴の」は「間遠く」に続く序詞であるから、一首は、あの娘とは昨晩寝たばかりなのに、だいぶ日数が立ったような気がするな、というので、こういう発想は東歌でないほかの歌にもあるけれども、「雲の上ゆ鳴き行く鶴の」は、なかなかの技巧である。

○

防人に立ちし朝けの金門出に手放れ惜しみ泣
きし児らはも　〔巻十四・三五六九〕　東歌・防人

末勘国防人の歌。「金門」は既にあったごとく「門」である。「手放れ」は手離で、別れることだが、別れに際しては手を握ったことが分かる。これは人間の自然行為で必ずしも西洋とは限らぬ。そこで、此処は、「た」は添辞とせずに、「手」に意味を持たせるのである。併しそれは字面の問題で、実際の気持は別を惜しむことで、そこで、「泣きし児らはも」が利くのである。これは、君命を帯びて辺土の防備に行くのだが、その別を悲しむ歌である。これも彼等の真実の一面、また、「大君の辺にこそ死なめ和には死なじ」も真実の一面である。全体がめそめそばかりではないのである。

○

葦の葉に夕霧立ちて鴨が音の寒き夕し汝をば
偲ばむ　〔巻十四・三五七〇〕　東歌・防人

これも防人の歌で、葦の葉に夕霧が立って、そこに鴨が鳴く、そういう寒い晩には、という

ので、具象的にいっている。そして、「汝をば偲ばむ」というのだから、いまだそういう場合にのぞまない時の歌である。東歌の歌調に似ない巧なところがあるから、幾らか指導者があったのかも知れない。併しもとの作はやはり防人本人で、哀韻の迫ってくるのはそのためであろう。「葦べゆく鴨の羽交に霜ふりて寒き夕は大和しおもほゆ」(巻一・六四)という志貴皇子の御歌に似ている。

○

東歌の選鈔は大体右の如くであるが、東歌はなお特殊なものは幾つかあり、秀歌という程でなくとも、注意すべきものだから次に記し置くのである。

さ寝らくはたまの緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢の如　(巻十四・三三五八)
足柄の土肥の河内に出づる湯の世にもたよらに児ろが言はなくに　(同・三三六八)
入間道の大家が原のいはゐづら引かばぬるぬる吾になぬ絶えそね　(同・三三七八)
我背子を何どかもいはむ武蔵野のうけらが花の時無きものを　(同・三三七九)
筑波嶺にかが鳴く鷲の音のみをか鳴き渡りなむ逢ふとは無しに　(同・三三九〇)
小筑波の嶺ろに月立し逢ひだ夜は多なりぬをまた寝てむかも　(同・三三九五)
伊香保ろの傍の榛原ねもころに奥をな兼ねそまさかし善かば　(同・三四一〇)
上毛野伊奈良の沼の大藺草よそに見しよは今こそまされ　(同・三四一七)

薪樵る鎌倉山の木垂る木をまつと汝が言はば恋ひつつやあらむ　(同・三四三三)
うらも無く我が行く道に青柳の張りて立てればもの思ひ出つも　(同・三四四三)
草蔭の安努な行かむと墾りし道阿努は行かずて荒草立ちぬ　(同・三四四七)
ま遠くの野にも逢はなむ心なく里の真中に逢へる夫かも　(同・三四六三)
佐野山に打つや斧音の遠かども寝もとか子ろが面に見えつる　(同・三四七三)
諾児汝は吾に恋ふなも立と月の流なへ行けば恋しかるなも　(同・三四七六)
橘の古婆のはなりが思ふなむ心愛しいで吾は行かな　(同・三四九六)
河上の根白高萱あやにあやにさ宿さ寐てこそ言に出にしか　(同・三四九七)
岡に寄せ我が刈る草の狭菱草のまこと柔は寝ろとへなかも　(同・三四九九)
安斉可潟潮干の緩に思へらば朮が花の色に出めやも　(同・三五〇三)
青嶺ろにたなびく雲のいさよひに物をぞ思ふ年のこの頃　(同・三五一一)
一嶺ろに言はるものから青嶺ろにいさよふ雲のよそり妻はも　(同・三五一二)
夕されば小山を去らぬ布雲の何か絶えむと言ひし児ろはも　(同・三五一三)
沼二つ通は鳥が巣我がこころ二行くなもと勿よ思はりそね　(同・三五二六)
妹をこそあひ見に来しか眉曳の横山辺ろの鹿なす思へる　(同・三五三一)
垣越しに麦食むこうまのはつはつに相見し子らしあやに愛しも　(同・三五三七)

青柳のはらろ川門に汝を待つと清水は汲まず立所平すも　（同・三五四六）
たゆひ潟潮満ちわたる何処ゆかも愛しき夫ろが吾許通はむ　（同・三五四九）
塩船の置かれば悲しさ寝つれば人言しげし汝を何かも為む　（同・三五五六）
悩しけ人妻かもよ漕ぐ船の忘れは為無な弥思ひ増すに　（同・三五五七）
彼の児ろと宿ずやなりなむはた薄裏野の山に月片寄るも　（同・三五六五）

巻第十五

○

あをによし奈良の都にたなびける天の白雲見れど飽かぬかも　〔巻十五・三六〇二〕　作者不詳

新羅に使に行く入新羅使以下の人々が、出帆の時には別を惜しみ、海上にあっては故郷を懐い、時には船上に宴を設けて「古歌」を吟誦した。その古歌幾つかが纏まって載っているが、此歌もその一つで雲を詠じた歌だと注してある。一首は、奈良の都の上にたなびいて居る、天の白雲の豊大な趣を讃美した歌であるが、作者も分からず、どういう時に詠んだものかも分かっていない。ただ雲を詠んだものとして、豊かな大きい調子があるので吟誦にも適し、また奈良の家郷を偲ぶのにふさわしいものとして選ばれたものであろう。この新羅使は天平八年であるが、その時にもうこの歌の如きは古調に響いたのであったのかも知れない。此処に、人麿作五つばかり幾らか変化しつつ載って居り、左注でその事を注意しているところを見ると、この歌も、上の句の、「あをによし奈良の都に」の句は変化したもので、原作は、「奈良の都に」などでなく、山のうえとか海上とか、或は序詞などで続けたものか、そういうものだったかも知

れない。いずれにしても、「天の白雲見れど飽かぬかも」の句は形式的な感じもあるが、なかなかよいものである。

○

わたつみの海に出でたる飾磨河絶えむ日にこそ吾が恋止まめ　〔巻十五・三六〇五〕　作者不詳

この歌も新羅使の一行が、船上で「古歌」として吟誦したもので、恋の歌と注してある。「飾磨河」は播磨で、今姫路市を流れる船場川だといわれている。巻七（一一七八）の或本歌に、「飾磨江は漕ぎ過ぎぬらし天づたふ日笠の浦に波立てり見ゆ」とあるのも同じ場処であろう。一首の意は、海にそそぐ飾磨川の流は絶ゆることは無いが、若し絶ゆることがあったら、はじめて俺の恋は止まるだろう、というので、「ひさかたの天つみ空に照れる日の失せなむ日こそ吾が恋ひ止まめ」（巻十二・三〇〇四）をはじめ同じ結句の歌は数首ある。そして此程度の歌ならば、他の巻には幾らもあると思うが、当時既に古歌として取扱った歌として、また、第二句「海にいでたる」の句の稱拙愛すべき特色とを以て選出して置いた。

○

百船の泊つる対馬の浅茅山時雨の雨にもみだひにけり　〔巻十五・三六九七〕　新羅使

新羅使の一行が、対馬の浅茅浦に碇泊した時、順風を得ずして五日間逗留した。諸人の中で働いて作歌した三首中の一つである。浅茅浦は今俗に大口浦といっている。モミヅは其頃多行四段にも活用し其をまた波行に活用せしめた。「もみだひにけり」は時間的経過をも含ませている。歌は平凡で取立てていうほどではないが、実際に当って作ったという争われぬ強みがあるので、読後身に沁むのである。

○

天離る鄙にも月は照れれども妹ぞ遠くは別れ来にける　〔巻十五・三六九八〕　新羅使

前の歌の続きであるが、五日滞在のうちには時雨も晴れて月の照った夜もあったのであろう。「鄙にも月は照れれども」という句に哀韻があるのは、都の月光という相対的な感じもあり、いつのまにか秋になった感じもあり、都の月光と相愛の妻との関係などもあって、そういう哀

韻を伴うのであろうか。此歌とても特に秀歌というものではないが、不思議に心をひくのは、実地の作だからであろう。人麿の歌に、「去年見てし秋の月夜は照らせども相見し妹はいや年さかる」(巻二・二一一)がある。

○

竹敷のうへかた山は紅の八入の色になりにけるかも　(巻十五・三七〇三)　新羅使(大蔵麿)

一行が竹敷浦(今の竹敷港*)に碇泊した時の歌が十八首あるその一つで、小判官大蔵忌寸麿の作である。「うへかた山」は上方山で今の城山であろう。「八入の色」は幾度も染めた真赤な色というのである。単純だが、「くれなゐの八入の色」で統一せしめたから、印象鮮明になって佳作となった。「くれなゐの八入の衣朝な朝な穢るとはすれどいや珍しも」(巻十一・二六二三)がある。この時の十八首の中には、大使阿倍継麿が、「あしひきの山下ひかる黄葉の散りの乱は今日にもあるかも」(巻十五・三七〇〇)、副使大伴三中が、「竹敷の黄葉を見れば吾妹子が待たむといひし時ぞ来にける」(同・三七〇一)、大判官壬生宇太麻呂が、「竹敷の浦廻の黄葉われ行きて帰り来るまで散りこすなゆめ」(同・三七〇二)という歌を作って居り、対馬娘子、玉槻という者が、「もみぢ葉の散らふ山辺ゆ榜ぐ船のにほひに愛でて出でて来にけり」(同・三七〇四)という歌を作っ

たりしている。天平八年夏六月、武庫浦を出帆したのが、対馬に来るともう黄葉が真赤に見える頃になっている。彼等が月光を詠じ黄葉を詠じているのは、単に歌の上の詩的表現のみでなかったことが分かる。対馬でこの玉槻という遊行女婦などは唯一の慰めであったのかも知れない。この一行のある者は帰途に病み、大使継麿のごときは病歿している。また新羅との政治的関係も好ましくない切迫した背景もあって注意すべき一聯の歌である。帰途に、「天雲のたゆたひ来れば九月の黄葉の山もうつろひにけり」(同・三七一六)、「大伴の御津の泊に船泊てて立田の山を何時か越え往かむ」(同・三七二二)などという歌を作って居る。

○

あしひきの山路越えむとする君を心に持ちて安けくもなし　(巻十五・三七二三)　狭野茅上娘子

中臣朝臣宅守が、罪を得て越前国に配流された時に、狭野茅上娘子の詠んだ歌である。娘子の伝は審かでないが、宅守と深く親んだことは是等一聯の歌を読めば分かる。目録に蔵部女嬬とあるから、低い女官であっただろう。一首の意は、あなたがいよいよ山越をして行かれるのを、しじゅう心の中に持っておりまして、あきらめられず、不安でなりませぬ、という程の歌である。「君を心に持つ」は貴方をば心中に持つこと、心に抱き持つこと、恋しくて忘れられぬ

こと、あきらめられぬことというぐらいになるが、「君を心に持つ」と具体的に云ったので、親しさが却って増したようにおもわれる。「吾妹子に恋ふれにかあらむ沖に住む鴨の浮宿の安けくもなし(なき)」(巻十一・二八〇六)、「今は吾は死なむよ吾妹逢はずして念ひわたれば安けくもなし」(巻十二・二八六九)等、用例は可なりある。

○

君が行く道の長路を繰り畳ね焼き亡ぼさむ天の火もがも　〔巻十五・三七二四〕　狭野茅上娘子

同じく続く歌で、あなたが、越前の方においでになる遠い路をば、手繰りよせてそれを畳んで、焼いてしまう天火でもあればいい。そうしたならあなたを引き戻すことが出来ましょう、という程の歌で、強く誇張していうところに女性らしい語気と情味とが存じている。娘子は古歌などをも学んだ形跡があり、文芸にも興味を持つ才女であったらしいから、「天の火もがも」などという語も比較的自然に口より発したのかも知れない。そして、「焼き亡ぼさむ天の火もがも」という句は、これだけを抽出してもなかなか好い句である。天火は支那では、劫火などと似て、思いがけぬところに起る火のことを云って居る。史記孝景本記に、「三年正月乙巳天火燔二雒陽東宮大殿城室一」とあり、易林に「天火大起、飛鳥驚駭」とある如きである。併しその

火が天に燃えていてもかまわぬだろう。いずれにしても「天の火」とくだいたのは好い。なお娘子には、「天地の至極の内にあが如く君に恋ふらむ人は実あらじ」(巻十五・三七五〇)というのもある程だから、情熱を以て強く宅守に迫って来た女性だったかも知れない。また贈答歌を通読するに、宅守よりも娘子の方が巧である。そしてその巧なうちに、この女性の息吹をも感ずるので宅守は気乗したものと見えるが、宅守の方が受身という気配があるようである。

○

あかねさす昼は物思ひぬばたまの夜はすがらに哭のみし泣かゆ　〔巻十五・三七三二〕　中臣宅守

これは中臣宅守が娘子に贈った歌だが、この方は気が利かない程地味で、骨折って歌っているが、娘子の歌ほど声調にゆらぎが無い。「天地の神なきものにあらばこそ吾が思ふ妹に逢はず死せめ」(巻十五・三七四〇)、「逢はむ日をその日と知らず常闇にいづれの日まで吾恋ひ居らむ」(同・三七四二)などにあるように、「天地の神」とか、「常闇」とか詠込んでいるが、それほど響かないのは、おとなしい人であったのかも知れない。

○

帰りける人来れりといひしかばほとほと死に
き君かと思ひて（巻十五・三七七二）　狭野茅上娘子

娘子が宅守に贈った歌であるが、罪をゆるされて都にお帰りになった人が居るというので、嬉しくて死にそうでした、それがあなたかと思って、というのであるが、天平十二年罪を赦されて都に帰った人には穂積朝臣老以下数人いるが、宅守はその中にはいず、続紀にも、「不レ在二赦限一」とあるから、此時宅守が帰ったのではあるまい。この「殆と死にき」をば、殆しの意にして、胸のわくわくしたと解する説もあり、私も或時にはそれに従った。併し、「天の火もがも」を肯定するとすると、「ほとほと死にき」を肯定してもよく、その方が甘く切実で却っておもしろいと思って今回は二たびそう解釈することとした。この歌は以上選んだ娘子の歌の中では一番よい。

「ほとほとしにき」は、原文「保等保登之爾吉」であって、「ホトホトシニキハ、驚テ胸ノホトバシルナリ」（代匠記精撰本）というのが第一説で、古義もそれに従った。鈴屋答問録に、「ほと」は俗言の「あわ（は）てふためく」の「ふた」に同じいとあるのも参考となるだろう。それから、「ほとんど死たりとなり。うれしさのあまりになるべし」（拾穂抄）は第二説で、「殆将死

なり。あまりてよろこばしきさまをいふ」（考）、「しにきは死にき也」（略解）。古事記伝、新考、新訓等もこの第二説である。集中、「君を離れて恋に之奴倍之」（巻十五・三五七八）があるから、「之爾」を「死に」と訓んで差支のないことが分かる。

○

春さらば挿頭にせむと我が思ひし桜の花は散りにけるかも　〔巻十六・三七八六〕　壮士某

むかし桜子という娘子がいたが、二人の青年に挑まれたときに、ひとりの女身を以て二つの門に往き適う能わざるを嘆じ、林中に尋ね入ってついに縊死して果てた。二人の青年がそれを悲しみ作った歌の一つである。桜子という娘の名であったから、桜の花の散ったことになして詠んだ、取りたてていう程のものでない、妻争い伝説歌の一つに過ぎないが、素直に歌ってあるので見本として選んで置いた。この伝説は真間の手児名、葦屋の菟原処女の伝説などと同じ種類のものである。「かざしにせんとは、我妻にせんとおもひしと云心也」(宗祇抄)とある如く、また桜児という名であったから、「散りにけるかも」と云った。

○

事しあらば小泊瀬山の石城にも隠らば共にな思ひ吾背　〔巻十六・三八〇六〕　娘子某

むかし娘がいたが、父母に知らせず窃かに一人の青年に接した。青年は父母の呵嘖を恐れて、稍猶予のいろが見えた時に、娘が此歌を作って青年に与えたという伝説がある。「小泊瀬山」の「を」は接頭詞、泊瀬山、今の初瀬町あたり一帯の山である。「石城」は石で築いた廓で此処は墓のことである。この歌も普通の歌で、男がぐずぐずしているのに、女が強くなる心理をあらわしたものである。前の歌は実徳の上からいえば、貞になり、これもまた貞の一種になるかも知れない。親をも措いて男に従うという強い心に感動せられて伝説が成立すること、他の歌の例を見ても明かである。「な思ひ、我が背」の口調は強いが、女らしい甘い味いがある。毛詩に、「死則同レ穴」とあるのは人間共通の合致であるだろう。

○

安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を吾が思はなくに　〔巻十六・三八〇七〕　前の采女某

葛城王が陸奥国に派遣せられたとき、国司の王を接待する方法がひどく不備だったので、王が怒って折角の御馳走にも手をつけない。その時、嘗て采女をつとめたことのある女が侍していて、左手に杯を捧げ右手に水を盛った瓶子を持ち、王の膝をたたいて此歌を吟誦したので、王の怒が解けて、楽飲すること終日であった、という伝説ある歌である。葛城王は、天武天皇の御代に一人居るし、また橘諸兄が皇族であった時の御名は葛城王であったから、そのいずれとも不明であるが、時代からいえば天武天皇の御代の方に傾くだろう。併し伝説であるから実は誰であってもかまわぬのである。また、「前の采女」という女も、嘗て采女として仕えたという女で、必ずしも陸奥出身の女とする必要もないわけである。「安積山」は陸奥国安積郡、今の福島県安積郡日和田町*の東方に安積山という小山がある。其処だろうと云われている。木立などが美しく映っている広く浅い山の泉の趣で、上の句は序詞である。そして「山の井の」から「浅き心」に連接せしめている。「浅き心を吾が思はなくに」が一首の眼目で、あなたをば深く思いつめて居ります、という恋愛歌である。そこで葛城王の場合には、あなたを粗略にはおもいませぬというに帰着するが、此歌はその女の即吟か、或は民謡として伝わっているのを吟誦したものか、いずれとも受取れるが、遊行女婦は作歌することが一つの款待方法であったのだから、このくらいのものは作り得たと解釈していいだろうか。この一首の言伝えが面白いので選んで置いたが、地方に出張する中央官人と、地方官と、遊行女婦とを配した短篇のような

趣があって面白い歌である。伝説の文の、「右手持レ水、撃二之王膝一」につき、種々の疑問を起しているが、二つの間に休止があるので、水を持った右手で王の膝をたたくのではなかろう。「之」は助詞である。

○

寺寺の女餓鬼申さく大神の男餓鬼賜りて其の子生まはむ　〔巻十六・三八四〇〕　池田朝臣

池田朝臣（古義では真枚だろうという）が、大神朝臣奥守に贈った歌である。一首の意は、寺々に居る女の餓鬼どもは大神の男餓鬼を頂戴してその子を生みたいと申しておりますよ、というので、大神奥守は痩男だったのでこの諧謔が出たのであろう。「寺々の女餓鬼」というのは、その頃寺院には、画だの木像だのがあって、三悪道の一なる餓鬼道を示したものがあったと見える。前に、「相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼のしりへに額づく如し」（巻四・六〇八）とあったのを参考すれば、木像のようにおもわれる。何れにせよ、この諧謔が自然流露の感じでまことに旨い。古今集以後ならば誹諧歌、滑稽歌として特別扱をするところを、大体の分類だけにして、特別扱をしないのは、万葉集に自由性があっていい点である。また、当時は仏教興隆時代だから、餓鬼などということを人々は新事物として興味を感じていたものであっただろう。ウマハ

ムはウマムという意でウマフという四段活用の動詞である。

○

仏造る真朱足らずは水たまる池田の朝臣が鼻の上を穿れ　〔巻十六・三八四一〕　大神朝臣

これは大神朝臣が池田朝臣に酬いた歌である。「真朱」は仏像などを彩色するとき用いる赤の顔料で、朱（丹砂、朱砂）のことである。「水たまる」は池の枕詞に使った。応神紀に、「水たまるよさみの池に」の用例がある。また池田の朝臣の鼻は特別に赤かったので、この諧謔の出来たことが分かる。前には餓鬼のことをいったから、此歌でも仏教関係の事物を持って来た。前の歌も旨いが、この歌も諧謔の上乗である。

○

法師らが鬚の剃杭馬つなぎいたくな引きそ法師半かむ　〔巻十六・三八四六〕　作者不詳

僧侶にからかった歌で、鬚がいい加減に延びた、今謂う無精鬚というのを捉えて、それを「剃杭」といって、その杭に馬を繋いでも、ひどく引っぱるなよ、法師が半分になってしまう

だろうから、というのである。この歌の結句は、原文、「僧半甘」と書いてあり、旧訓ナカラカモ。拾穂抄・代匠記・考も同訓である。代匠記初稿本に、「ながらにならんといふ心なり」、考に「法師引かされ半分にならんと云」と解し、略解でホフシ・ナカラカムと訓み（古義同訓）、「ながらは半分の意にて、ながらにならんと戯れ言ふ也」と解した。然るに、古義が報じた一説に「法師は泣かむ」と訓んだのもあり、黒川春村はホフシ・ナカナム、と訓み、敷田年治ホフシハ・ナカムと訓み、井上（通泰）博士はホフシ・ナゲカムと訓んだ。近時新注釈書はホフシハ・ナカムの訓を採用して殆ど定説になろうとしている。

けれども、「法師は泣かむ」では諧謔歌としては平凡でつまらぬ。そこで、「法師半かむ」と訓み、代匠記初稿本や考の解釈の如く、「半分になってしまうだろう」と解釈する方が一番適切のようにおもえる。そんならどうしてこういう動詞が出来たかというに、「半」という名詞を「半かむ」と活用せしめたので、恰も「枕」という名詞を、「枕かむ」と活用せしめたのと同じである。然らば、半き・半く等の活用形がある筈だろうといわんが、其処が滑稽歌の特色で、普通使わない語を用いたのであっただろう。それゆえ、この歌に応えた、「檀越や然かもな言ひそ里長らが課役徴らば汝も半かむ」（巻十六・三八四七）という歌の例と、万葉にただ二例あるのみである。この応え歌は、「檀那よ、そう威張りなさるな、若し村長さんが来て、税金や労役の事でせめ立てるなら、あなたも半分になってしまいましょう。どうです」というので、二つとも

結句は、「半かむ」でなくては面白くない。またいずれの古鈔本も「半甘」で、他の書き方のものはない。愚案は、昭和十三年一月アララギ、童馬山房夜話参看。

○

吾が門に千鳥しば鳴く起きよ起きよ我が一夜
づまひとに知らゆな〔巻十六・三八七三〕　作者不詳

もう門のところには、千鳥がしきりに鳴いて夜が明けました。あなたよ、起きなさい。私がはじめてお会したあなたよ、人に知られぬうちにお帰りください。原文には、「一夜妻」とあるから、男の歌で女に向って「一夜妻」といったようにも取れるが、全体が男を宿めた女の歌という趣にする方がもっと適切だから、そうすれば、「一夜夫」ということになる。この歌は民謡風な恋愛歌で作者不明のものだから、無名歌として掲げているのである。「千鳥しば鳴く起きよ起きよ」のところは巧で且つ自然である。「一夜夫」と解するのは考・古義の説で、「妻はかり宇、夫也。初て一夜逢し也」(考)とあるが、これは遠く和歌童蒙抄の説まで溯り得る。あとは多く「一夜妻」説である。「人ノ妻ヲ忍ビテアリケルニ」(仙覚抄)、「一夜妻はかりそめに女を引き入れて逢ひしなり」(新考)云々。

巻第十七

○

あしひきの山谷越えて野づかさに今は鳴くらむ鶯のこゑ　〔巻十七・三九一五〕　山部赤人

山部宿禰赤人詠二春鶯一歌一首であるが、明人と書いた古写本もある(西本願寺本・神田本等)。「野づかさ」は野にある小高い処、野の丘陵をいう。「野山づかさの色づく見れば」(巻十・二二〇三)の例がある。一首は、もう春だから、鶯等は山や谷を越え、今は野の上の小高いところで鳴くようにでもなったか、というので、一般的な想像のように出来て居る歌だが、不思議に浮んで来るものが鮮かで、濁りのない清淡とも謂うべき気持のする歌である。それだから、家の内で鶯の声を聞いて、その声の具合でその場所を野づかさだと推量する作歌動機と解釈することも出来るし、そうする方が「山谷越えて」の句にふさわしいようにもおもうが、併しこの辺のことはそう穿鑿せずとも鑑賞し得る歌である。「ひさぎ生ふる清き河原に」の時にも少し触れたが、つまりあのような態度で味うことが出来る。巻十七の歌をずうっと読んで来て、はじめて目ぼしい歌に逢着したとおもって作者を見ると赤人の作である。赤人の作中にあっては左程

でもない歌だが、その他の人の歌の中にあると斯くの如く異彩を放つ、そういう相待上の価値ということをも吾等は知る必要があるのである。

○

降る雪の白髪までに大君に仕へまつれば貴くもあるか　〔巻十七・三九二二〕　橘諸兄

聖武天皇の天平十八年正月の日、白雪が積って数寸に至った。左大臣橘諸兄が大納言藤原豊成及び諸王諸臣を率て、太上天皇(元正天皇)の御所に参候して雪を掃うた。時に詔あって酒を賜い肆宴をなした。また、「汝諸王卿等聊か此の雪を賦して各その歌を奏せよ」という詔があったので、それに応え奉った、左大臣橘諸兄の歌である。「降る雪の」は正月のめでたい雪に縁ってこの語があるのだが、「白髪」の枕詞の格に用いた。「白髪までに」は白髪になるまでということで簡潔ないい方である。「貴くもあるか」は、貴く畏くありがたいというので、自身を貴く感ずるというのはやがて大君を貴み奉るその結果となるので、これも特有のいい方である。この歌は、謹んで作っているので、重厚なひびきがあり、結句の「貴くもあるか」が一首の中心句をなして居る。この時、紀朝臣清人は、「天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか」(巻十七・三九二三)を作り、紀朝臣男梶は、「山の峡そことも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れれば」(同・三九二四)を作り、大伴家持は、「大宮の内にも外にも光るまで零らす白雪見れど飽かぬかも」(同・三九二六)を作って居る。

○

たまくしげ二上山に鳴く鳥の声の恋しき時は来にけり　〔巻十七・三九八七〕　大伴家持

大伴家持は、天平十九年春三月三十日、二上山の賦一首を作った、その反歌である。この二上山は越中射水郡(今は射水・氷見両郡)今の伏木町*の西北に聳ゆる山である。もう一つの反歌は、「渋渓の埼の荒磯に寄する波いやしくしくに古へ思ほゆ」(巻十七・三九八六)というのであるが、この「たまくしげ」の歌は、毫も息を張ることなく、ただ感を流露せしめたという趣の歌である。「興に依りて之を作る」と左注にあるが、興の儘に、理窟で運ばずに家持流の語気で運んだのはこの歌をして一層なつかしく感ぜしめる。既に出した、大伴坂上郎女の歌に、「よの常に聞くは苦しき喚子鳥声なつかしき時にはなりぬ」(巻八・一四四七)と稍似て居るが、家持の方が単純で素直である。

○

婦負の野の薄おし靡べ降る雪に宿借る今日し
悲しく思ほゆ　〔巻十七・四〇一六〕　高市黒人

これは、高市連黒人の歌だが、天平十九年に三国真人五百国という者が誦し伝えたのを、越中にいた家持が録しとどめたもので、「婦負の野」は、和名鈔には禰比とあり、今でも婦負郡をネイグンといっている。婦負の野は現在射水郡小杉町から呉羽山にわたる間の平地だろうと云われている。黒人は人麿などと同時代の歌人だが、地名を詠込んであるのを見ると、越中まで来たと考えていいであろう。この一首で、「悲しく思ほゆ」の句が心を牽く。当時の羇旅の実際からこの句が来たからであろう。山部赤人の歌に、「印南野の浅茅おしなべさ宿る夜の日長くあれば家し偲ばゆ」(巻六・九四〇)というのがあるが、此歌と関係あるとすると、黒人の此一首も軽々に看過出来ないこととなる。結句は原文「於毛倍遊」でオモハユとも訓んでいる。そうすれば、「おもはる」と同じで、「はろばろに於忘方由流可母」(巻五・八六六)、「かぢ取る間なく京師し於母倍由」(巻十七・四〇二七)等の例もあるが、四〇二七の「倍」は「保」とも書かれて居り、また「おもほゆ」の用例の方が大部分を占めている。

○

珠洲の海に朝びらきして漕ぎ来れば長浜の浦
に月照りにけり　〔巻十七・四〇二九〕　大伴家持

大伴家持作。「珠洲郡より発船して治布に還りし時、長浜湾に泊てて、月光を仰ぎ見て作れる歌一首」という題詞と、「右件の歌詞は、春の出挙に依りて諸郡を巡行す。当時属目する所之を作る」という左注との附いている歌である。治布は治府即ち国府か(全釈)。左注の「出挙」は春、官の稲を貸すこと。「朝びらき」は、朝に船が港を出ることで、「世の中を何に譬へむ朝びらき榜ぎ去にし船の跡なきごとし」(巻三・三五一)という沙弥満誓の歌があること既にいった如くである。この歌も、何の苦も無く作っているようだが、うちに籠るものがあり、調ものびのびとこだわりのないところ、家持の至りついた一つの境界であるだろう。特に結句の、「月照りにけり」は、ただ一つ万葉にあって、それが家持の句だということもまた注目に値するのである。

○

あぶら火の光に見ゆる我が縵さ百合の花の笑

まはしきかも　〔巻十八・四〇八六〕　大伴家持

天平感宝元年五月九日、越中国府の諸官吏が、少目の秦伊美吉石竹の官舎で宴を開いたとき、主人の石竹が百合の花を鬘に造って、豆器という食器の上にそれを載せて、客人に頒った。その時大伴家持の作った歌である。結句の、「笑まはしきかも」は、美しく楽しくて微笑せしめられる趣である。美しい百合花をあらわすのに、感覚的にいうのも家持の一特徴だが、「あぶら火の光に見ゆる」と云ったのは、流石に家持の物を捉える力量を示すものである。「我が縵」といったのは、自分の分として頂戴した縵という意味である。

○

天皇の御代栄えむと東なるみちのく山に金花咲く　〔巻十八・四〇九七〕　大伴家持

大伴家持は、天平感宝元年五月十二日、越中国守の館で、「陸奥国より金を出せる詔書を賀ぐ歌一首并に短歌」を作った。長歌は百七句ばかりの長篇で、結構も言葉も骨折ったものであり、それに反歌三つあって、此は第三のものである。一首の意は、天皇(聖武)の御代は永遠に栄える瑞象としてこのたび東の陸奥の山から黄金が出た、というので、それを金の花が咲いたと云った。この短歌は余り細かく気を配らずに一息にいい、言葉の技法もまた順直だから荘重に響くのであって、賀歌としてすぐれた態をなしている。結句に「かも」とか「けり」とか「やも」とかが無く、ただ「咲く」と止めたのも此場合甚だ適切である。此等の力作をなすに当り、家持は知らず識らず人麿・赤人等先輩の作を学んで居る。

続紀には、天平二十一年二月、陸奥始めて黄金を貢いだことがあり、これは東大寺大仏造営のために役立ち、詔にも、開闢以来我国には黄金は無く、皆外国からの貢として得たもののみであったのに、朕が統治する陸奥の少田郡からはじめて黄金を得たのを、驚き悦び貴びたもう旨が宣せられてある。また長歌には、「大伴の遠つ神祖の、其の名をば大来目主と、負ひ持ち て仕へし官、海行かば水漬く屍、山ゆかば草むす屍、おほきみの辺にこそ死なめ、顧みはせじと言立て」(巻十八・四〇九四)云々とあるもので、家持は生涯の感激を以て此の長短歌を作っているのである。

○

この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか心足ひに　〔巻十八・四一二三〕　大伴家持

天平感宝元年閏五月六日以来、旱となって百姓が困っていたのが、六月一日にはじめて雨雲の気を見たので、家持は雨乞の歌を作った。此はその反歌で、長歌には、「みどり児の乳乞うがごとく、天つ水仰ぎてぞ待つ、あしひきの山のたをりに、彼の見ゆる天の白雲、海神の沖つ宮辺に、立ち渡りとの曇り合ひて、雨も賜はね」云々とあるものである。「この見ゆる」の「この」は「彼の」、「あの」という意である。「ほびこり」は「はびこり」に同じく、「との曇り」は雲の棚びき曇るである。「心足らひに」は心に満足する程に、思いきりというのに落着く。一首は大きくゆらぐ波動的声調を持ち、また海神にも迫るほどの強さがあって、家持の人麿から学んだ結果は、期せずしてこの辺にあらわれている。

○

雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき児もがも　〔巻十八・四一三四〕　大伴家持

天平勝宝元年十二月、大伴家持の作ったもので、越中の雪国にいるから、「雪の上に照れる月夜に」の句が出来るので、こういう歌句の人麿の歌にも無いのは、人麿はこういう実際を余り見なかったせいもあるだろう。作歌のおもしろみは這般の裡にも存じて居り、作者生活の背景ということにも自然関聯してくるのである。下の句もまた、越中にあって寂しい生活をしているので、都をおもう情と共にこういう感慨がおのずと出たものと見える。

○

春の苑くれなゐにほふ桃の花した照る道に出で立つ嬬嫗　（巻十九・四一三九）　大伴家持

大伴家持が、天平勝宝二年三月一日の暮に、春苑の桃李花を見て此歌を作った。「くれなゐにほふ」は赤い色に咲き映えていること、「した照る道」は美しく咲いている桃花で、桃樹の下かげ迄照りかがやくように見える、その下かげの道をいう。「橘のした照る庭に殿立てて酒宴いますわが大君かも」（巻十八・四〇五九）、「あしひきの山下ひかる黄葉の散りのまがひは今日にもあるかも」（巻十五・三七〇〇）の例がある。春園に赤い桃花が満開になっていて、其処に一人の嬬嫗の立っている趣の歌で、大陸渡来の桃花に応じて、また何となく支那の詩的感覚があり、美麗にして濃厚な感じのする歌である。こういう一種の構成があるのだから、「いで立つをとめ」と名詞止にして、堅く据えたのも一つの新工夫であっただろう。そしてこういう歌風は時代的に漸次に発達したと考えられるが、家持あたりを中心とした一団の作者によって進展したものと考える方がよいようであるし、支那文学乃至美術の影響がようやく浸潤したようにおもえるのである。曹子建の詩に、「南国に佳人あり、容華桃李の若し」の句がある。なおこういう感覚的な歌には、「なでしこが花見る毎にをとめ等が笑ひのにほひ思ほゆるかも」（巻十八・四一一四）、「秋風に靡く河傍の和草のにこよかにしも思ほゆるかも」（巻二十・四三〇九）などがあり、共に家持の歌だから、この桃の花の歌同様家持の歌の一傾向であったと謂い得るとおもう。

○

春まけて物がなしきにさ夜更けて羽ぶき鳴く鴫誰が田にか住む　（巻十九・四一四一）　大伴家持

天平勝宝二年三月一日、大伴家持が、「翻び翔る鴫を見て」作った歌である。一首の意は、春になって何となく憂愁をおぼえるのに、この夜更に羽ばたきをしながら鴫が一羽鳴いて行った。あゝあの鴫は誰の田に住んでいる鴫だろうか、というのである。「誰が田にか住む」の一句は、恋愛情調にかようものだが、民謡的な一般性を脱して個的な深みが加わって居り、この細みある感傷は前にも云ったように、家持に至って味われる万葉の新歌境なのである。そして家持は娘子などと贈答している歌よりこういう独居的歌の方が出来のよいのは、心の沈潜によるたまものに他ならぬのである。

この歌の近くに、「春まけてかく帰るとも秋風に黄葉づる山を超え来ざらめや」（巻十九・四一

四五)、「夜くだちに寝覚めて居れば河瀬尋め情もしぬに鳴く千鳥かも」(同・四一四六)という歌があり、共に家持の歌であるが、やはり同様の感傷の細みが出来て来ている。「山を超え来ざらめや」、「河瀬尋め」のあたりの語気は、中世紀の幽玄歌に移行するようでも、まだまだ実質を保って、空虚な観念に墜落していない。

○

ものの ふの八十をとめ等が汲み乱ふ寺井の上の堅香子の花　〔巻十九・四一四三〕　大伴家持

大伴家持作、堅香子草の花を攀ぢ折る歌一首という題詞がある。堅香子は山慈姑で薄紫の花咲き、根から澱粉の上品を得る。寺に泉の湧くところがあって、其ほとりに堅香子の花が咲いている。これは単独でなく群生している。その泉に多くの娘たちが水を汲みに来て、清くとおる声で話しあう、それが可憐でいかにも楽しそうである。物部が多くの氏に分かれているので、「八十」の枕詞とした。此処の「八十をとめ」は、多くの娘たちということ、「まがふ」は、入りまじることだから、此処は入りかわり立ちかわり水汲みに来る趣である。これも前の桃の花の歌に同じく、我妹子にむかって情を告白するのでなく、若い娘等の動作にむかって客観的美を認めて、それにほんのりした情を抒べているのである。こういう手法もまた家持の発明と

解釈することが出来る。前にあった、「かはづ鳴く甘南備河にかげ見えて今か咲くらむ山振の花」(巻八・一四三五)もまた名詞止だが、幾分色調の差別があるようだ。

○

あしひきの八峰の雉なき響む朝けの霞見れば かなしも　〔巻十九・四一四九〕　大伴家持

大伴家持作、暁に鳴く雉を聞く歌、という題詞がある。山が幾重にも畳まっている、その山中の暁に雉が鳴きひびく、そして暁の霧がまだ一面に立ち籠めて居る。その雉の鳴く山を一面にこめた暁の白い霧を見ると、うら悲しく身に沁むというのである。この悲哀の情調も、恋愛などと相関した肉体に切なものでなく、もっと天然に投入した情調であるのも、人麿などになかった一つの歌境と謂うべきで、家持の作中でも注意すべきものである。「八岑越え鹿待つ君が」(巻七・一二六二)、「八峰には霞たなびき、谿べには椿花さき」(巻十九・四一七七)等の如く、畳まる山のことである。なお集中、「神さぶる磐根こごしきみ芳野の水分山を見ればかなしも」(巻七・一一三〇)、「黄葉の過ぎにし子等と携はり遊びし磯を見れば悲しも」(巻九・一七九六)、「朝鴉はやくな鳴きそ吾背子が朝けの容儀見れば悲しも」(巻十二・三〇九五)等の例があるが、家持には家持の領域があっていい。

この歌の近くに、「朝床に聞けば遙けし射水河朝漕ぎしつつ唱ふ船人」（巻十九・四一五〇）という歌がある。この歌はあっさりとしているようで唯のあっさりでは無い。そして軽浮の気の無いのは独り沈吟の結果に相違ない。

○

丈夫は名をし立つべし後の代に聞き継ぐ人も
語り継ぐがね　〔巻十九・四一六五〕　大伴家持

大伴家持作、慕レ振二勇士之名一歌一首で、山上憶良の歌に追和したと左注のある長歌の反歌である。憶良の歌というのは、巻六（九七八）の、「士やも空しかるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして」というのであった。憶良の歌は病牀にあって歎いたものだが、家持のは、父祖の功績をおもい現在自分の身上を顧みての感慨を吐露したものである。長歌には、「ますらをや空しくあるべき」という句が入ったり、「足引の八峰踏み越え、さしまくる心さやらず、後の代の語りつぐべく、名を立つべしも」という句が入ったり、兎に角憶良の歌を模倣しているのは、憶良の歌を読んで感奮したからであろう。

一首の意は、大丈夫たるものは、まさに名を立つべきである。後代その名を聞く人々が、またその名を人々に語り伝えるように、そうありたいものだ、というのである。「がね」は、そう

いうようにありたいと希望をいい表わしている。「里人も謂ひ継ぐがねよしゑやし恋ひても死なむ誰が名ならめや」（巻十二・二八七三）、「白玉を包みてやらば菖蒲花橘にあへも貫くがね」（巻十八・四一〇二）等の例がある。なお笠金村が塩津山で作った歌、「丈夫の弓上ふり起し射つる矢を後見む人は語り継ぐがね」（巻三・三六四）があって、家持はそれをも取入れて居る。つまり此一首は憶良の歌と金村の歌との模倣によって出来ていると謂ってもいい程である。家持は先輩の作歌を読んで勉強し、自分の力量を段々と積みあげて行ったものであるが、彼は先輩の歌のどういうところを取り用いたかを知るに便利で且つ有益なる歌の一つである。憶良の歌の、「空しかるべき」は切実な句であるが、それは長歌の方に入れたから、これでは「名をし立つべし」とした。憶良の歌に少し及ばないのは既にこの二句の差に於てあらわれている。

○

この雪の消のこる時にいざ行かな山橘の実の
照るも見む　〔巻十九・四二二六〕　大伴家持

大伴家持が、天平勝宝二年十二月雪の降った日にこの歌を作った。山橘は藪柑子で赤い実が成るので赤玉ともいっている。一首は、この大雪が少くなった残雪の頃にみんなして行こう。そして山橘の実が真赤に成っているのを見よう、というので、雪の中に赤くなっている藪柑子

の実は感興を催したものである。「いざ行かな」と促した語気に、皆と共に行こうという、気乗のしたことがあらわれているし、「実の照るも見む」は美しい句で、家持の感覚の鋭敏を示すものである。なお、家持には、「消のこりの雪にあへ照る足引の山橘を裏につみ来な」(巻二十・四四七二)という歌もあって、山橘に興味を持っていることが分かる。この巻十九の歌の方が優っている。

○

韓国に往き足らはして帰り来む丈夫武男に御酒たてまつる　〔巻十九・四二六二〕　多治比鷹主

天平勝宝四年閏三月、多治比真人鷹主が、遣唐副使大伴胡麿宿禰を餞して作った歌である。「行き足らはして」は遣唐の任務を充分に果してという意。「御酒」は、祝杯をあげることで、キは酒の古語で、「黒酒白酒の大御酒」(中臣寿詞)などの例がある。この一首は、真面目に緊張して歌っているので、こういう寿歌の体を得たものである。この歌で注意すべきは、「行き足らはして」の句と、「御酒たてまつる」という四三調の結句とであろう。この作者の歌はただ一首万葉集に見えている。

○

新しき年の始に思ふどちい群れて居れば嬉しくもあるか　〔巻十九・四二八四〕　道祖王

天平勝宝五年正月四日、石上朝臣宅嗣の家で祝宴のあった時、大膳大夫道祖王が此歌を作った。初句、「あらたしき」で安良多之の仮名書の例がある。この歌は、平凡な歌だけれども、新年の楽宴の心境が好く出ていて、結句で、「嬉しくもあるか」と止めたのも率直で効果的である。それから、「おもふどちい群れてをれば」も、心の合った親友が会合しているという雰囲気を籠めた句だが、簡潔で日本語のいい点をあらわしている。類似の句には、「何すとか君を厭はむ秋萩のその初花のうれしきものを」(巻十・二二七三)がある。

○

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも　〔巻十九・四二九〇〕　大伴家持

天平勝宝五年二月二十三日、大伴家持が興に依って作歌二首の第一である。一首は、もう春の野には霞がたなびいて、何となくうら悲しく感ぜられる。その夕がたの日のほのかな光に鶯

が鳴いている、というので、日の入った後の残光と、春野に「おぼほし」というほどにかかっている靄とに観入して、「うら悲し」と詠歎したのであるが、この悲哀の情を抒べたのは既に、人麿以前の作歌には無かったもので、この深く沁む、細みのある歌調は家持あたりが開拓したものであった。それには支那文学や仏教の影響のあったことも確かであろうが、家持の内的「生」が既にそうなっていたとも看ることが出来る。「うらがなし」を第三句に置き休止せしめたのも不思議にいい。

「朝顔は朝露おひて咲くといへど夕影にこそ咲きまさりけれ」(巻十・二一〇四)、「夕影に来鳴くひぐらし幾許も日毎に聞けど飽かぬ声かも」(同・二一五七)などの例がある。なお、「醜霍公鳥、暁のうらがなしきに」(巻八・一五〇七)は同じく家持の作だから同じ傾向のものと看るべく、「春の日のうらがなしきにおくれゐて君に恋ひつつ顕しけめやも」(巻十五・三七五二)は狭野茅上娘子の歌だから、やはり同じ傾向の範囲と看ることが出来、「うらがなし春の過ぐれば、霍公鳥いや敷き鳴きぬ」(巻十九・四一七七)もまた家持の作である。

○

わが宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも　〔巻十九・四二九一〕　大伴家持

同じく第二首である。「いささ群竹」はいささかな竹林で、庭の一隅にこもって竹林があった趣である。一首は、私の家の小竹林に、夕がたの風が吹いて、幽かな音をたてている。あわれなこの夕がたよ、というので、これも後世なら、「あわれ」とでもいうところで、一種の寂しい悲しい気持である。この歌は結句で、「この夕かも」と名詞に「かも」をつづけているが、これも晩景を主としたいい方で、この歌の場合やはり動かぬものかも知れない。「つるばみの解洗ひ衣のあやしくも殊に着欲しきこの夕かも」(巻七・一二一四)という前例がある。

小竹に風の渡る歌は既に人麿の歌にもあったが、竹の葉ずれの幽かな寂しいものとして観入したのは、やはりこの作者独特のもので、中世紀の幽玄の歌も特徴があるけれども、この歌ほど具象的でないから、真の意味の幽玄にはなりがたいのであった。「梅の花散らまく惜しみ吾が苑の竹の林に鶯鳴くも」(巻五・八二四)は天平二年大伴旅人の家の祝宴で阿氏奥島の作ったものであるから此歌に前行して居り、「御苑生の竹の林に鶯はしば鳴きにしを雪は降りつつ」(巻十九・四二八六)は此歌の少し前即ち一月十一日家持の作ったものである。

鹿持雅澄の古義では、「いささ群竹」を「いささかの群竹」とせずに、「五十竹葉群竹」と解し、また近時沢瀉博士は「い笹群竹」と解し、「ゆざさの上に霜の降る夜を」(巻十・二三三六)の「ゆざさ」などの如く、「笹」のこととした。なお少しく増補するに、古今集物名に、「いささめに時まつ間にぞ日は経ぬる心ばせをば人に見えつつ」とあるのは、「笹」を咏込むために、「い

ささめ」を用いた。但しこれは平安朝の例である。

○

うららに照れる春日に雲雀あがり情悲しも
独しおもへば　〔巻十九・四二九二〕　大伴家持

同じく家持が天平勝宝五年二月二十五日に作ったものである。一首は、麗らかに照らしている春の光の中に、雲雀が空高くのぼる、独居して、物思うとなく物思えば、悲しい心が湧くのを禁じ難い、というので、万葉集の大部分の歌が対詠歌、相待的な愬えの歌であるのに、この歌は、不思議にも独詠的な歌である。歌に、「独しおもへば」というのが其を証しているが、独居沈思の態度は既に支那の詩のおもかげでもあり、仏教的静観の趣でもある。これも家持の到り着いた一つの歌境であった。

前言にもいった天平二年の旅人宅の歌に、山上憶良の、「春されば先づ咲く宿の梅の花ひとり見つつや春日くらさむ」（巻五・八一八）には、ややこの歌と類似点があるが、それ以外のものの多くは恋愛情調で、対者（男女）を予想したものが多い、従って人間的肉体的なものが多い。然るにこの歌になると、すでにその趣がちがって、自然観入による、その反応としての詠歎になっている。

巻十九（四一九二）の霍公鳥并藤花を詠じた長歌に、「夕月夜かそけき野べに、遙遙に鳴く霍公鳥」とあるのも亦家持の作、「雲雀あがる春べとさやになりぬれば都も見えず霞たなびく」（巻二十・四四三四）も亦家持の作で、この方は巻十九のよりも制作年代が遅い（天平勝宝七歳三月三日）のは注意すべきである。なお、その三月三日には安倍沙美麿が、「朝な朝なあがる雲雀になりてしか都に行きてはや帰り来む」（同・四四三三）という歌を作っているが、やはり家持の影響とおもわれるふしがある。

この歌の左に、「春日遅遅として、鶯鶏正に啼く。悽惆の意、歌に非ずば、撥ひ難し。仍りて此の歌を作り、式ちて締緒を展ぶ」云々という文が附いている。鶯鶏は雲雀と訓ませており、和名鈔でもそうだが、実は鶯に似た鳥だということである。

○

あしひきの山行きしかば山人の朕に得しめし
山づとぞこれ　〔巻二十・四二九三〕　元正天皇

大和国添上郡山村（今の帯解町辺）に行幸（元正天皇）あらせられた時、諸王臣に和歌を賦して奏すべしと仰せられた。その時御みずから作りたもうた御製である。（この御製歌は天平勝宝五年五月はじめて輯録されたから、孝謙天皇の御代になって居り、従って万葉集には元正天皇を先ノ太上天皇と記し奉っている。そして此歌の次に舎人親王の和え奉った御歌が載って居り、親王は聖武天皇の天平七年に薨去せられたから、此行幸はそれ以前で元正天皇御在位中のことということになる。）

一首の意は、朕が山に行ったところが山に住む仙人どもがいろいろと土産を呉れた。此等はその土産である、というので、この山裏というのは、山の仙人の持つようなものをぼんやりと聯想し得るのであるが、宣長は、「山づとぞ是とのたまへるは、即御歌を指して、のたまへる也」（略解）と云ったのは、「それ諸王卿等、宜しく和歌を賦して奏すべしと、即ち御口号に曰く」

と詞書にある、その「御口号」をば直ぐ山裏と宣長が取ったからこういう解釈になったのであろう。併し山裏の内容はただ山の仙人に関係ある物ぐらいにぼんやり解く方がいいのではあるまいか。そこで下の舎人親王の「心も知らず」の句も利くのである。舎人親王の和え御歌は、「あしひきの山に行きけむ山人の心も知らず山人や誰」（巻二十・四二九四）というので、前の「山人」は天皇の御事、後の「山人」は土産をくれた山の仙人の事であろう。そこで、「山に御いでになった陛下はもはや仙人でいらせられるから俗界の私どもにはもはや御心の程は分かりかねます。一体その山裏と仰せられるのは何でございましょう。またそれを奉った仙人というのは誰でございましょう」というので、御製歌をそのまま受けついで、軽く諧謔せられたのであった。御製歌は、「山村」からの聯想で、直ぐ「山人」とつづけ、神仙的な雰囲気をこめたから、不思議な清く澄んだような心地よい御歌になった。

○

木の暗の繁き尾の上をほととぎす鳴きて越ゆ
なり今し来らしも　〔巻二十・四三〇五〕　大伴家持

大伴家持が霍公鳥を詠んだもので、鬱蒼と木立の茂っている山の上に霍公鳥が今鳴いている、あの峰を越して間も無く此処にやって来るらしいな、というので、気軽に作った独詠歌だが、

流石に練れていて旨いところがある。それは、「鳴きて越ゆなり」と現在をいって、それに主点を置いたかと思うと、おのずからそれに続くべき、第二の現在「今し来らしも」と置いて、一首の一番大切な感慨をそれに寓せしめたところが旨いのである。霍公鳥の歌は万葉には随分あるが、此歌は平淡でおもしろいものである。家持の作った歌の中でも晩期のものだが、稍自在境に入りかかっている。

○

我が妻も画にかきとらむ暇もが旅行く我は見
つつ偲ばむ　〔巻二十・四三二七〕　防人

天平勝宝七歳二月、坂東諸国の防人を筑紫に派遣して、先きの防人と交替せしめた。その時防人等が歌を作ったのが一群となって此処に輯録せられている。此歌は長下郡、物部古麿という者の作ったものである。一首は、自分の妻の姿をも、画にかいて持ってゆく、その描く暇が欲しいものだ。遙々と辺土の防備に行く自分は、その似顔絵を見ながら思出したいのだ、というので、歌は平凡だが、「我が妻も画にかきとらむ」という意響が珍らしくもあり、人間自然の意響でもあろうから、此に選んで置いた。「父母も花にもがもや草枕旅は行くとも撃ごて行かむ」(巻二十・四三二五)も意響は似ているが、この方には類想のものが多い。また、「母刀自も玉

にもがもや頂きて角髪の中にあへ纏かまくも」(同・四三七七)というのもある。

○

大君の命かしこみ磯に触り海原わたる父母を
置きて　〔巻二十・四三二八〕　防人

これも防人の歌で、助丁、丈部造人麿という者が作った。一首は、天皇の命を畏こみ体して、船を幾たびも磯に触れあぶない思をし、また浪あらく立つ海原をも渡って防人に行く。父も母も皆国元に残して、というのであるが、かしこみ、触り、わたる、おきてという具合に稍小きざみになっているのは、作歌的修練が足りないからである。併し此歌では、「磯に触り」という語と、「父母を置きて」という語に心を牽かれて取っておいた。この男は妻のことよりも「父母」のことが第一身に応えたのであっただろう。また「磯に触り」の句は、「大船を榜ぎの進みに磐に触り覆らば覆れ妹によりてば」(巻四・五五七)という例があるが、「磯毎にあまの釣舟泊てにけり我船泊てむ磯の知らなく」(巻十七・三八九二)があるから、幾度も碇泊しながらという意もあるだろう。しかし「触り」に重きを置いて解釈してかまわない。一寸前にも云ったが、防人の歌に父母のことを云ったのが多い。「水鳥の立ちのいそぎに父母に物言ず来にて今ぞ悔しき」(巻二十・四三三七)、「忘らむと野行き山行き我来れど我が父母は忘れせぬかも」(同・四三四

四)、「橘の美衣利の里に父を置きて道の長道は行きがてぬかも」(同・四三四一)、「父母が頭かき撫で幸く在れていひし言葉ぞ忘れかねつる」(同・四三四六)等である。

○

百隈の道は来にしをまた更に八十島過ぎて別れか行かむ　〔巻二十・四三四九〕　防人

防人、助丁刑部直三野の詠んだ歌である。一首の意は、これまで陸路を遙々と、いろいろの処を通って来たが、これからいよいよ船に乗って、更に多くの島のあいだを通りつつ、とおく別れて筑紫へ行くことであろうというので、難波から船出するころの歌のようである。専門技倆的に巧でないが、真率に歌っているので人の心を牽くものである。この歌には言語の訛が目立たず、声調も順当である。

○

蘆垣の隈所に立ちて吾妹子が袖もしほほに泣きしぞ思はゆ　〔巻二十・四三五七〕　防人

上総市原郡、上丁刑部直千国の作である。出立のまぎわに、蘆の垣根の隅の処に立って、

袖もしおしおと濡れるまで泣いた、妻のことが思出されてならない、というので、「蘆垣の隈所」というあたりは実際であっただろう。また、「泣きしぞ思はゆ」も上総の東国語であるだろう。或は前にも「おも倍由」というのがあったから、必ずしも訛でないかも知れぬが、「泣きしぞ思ほゆる」というのが後の常識であるのに、「ぞ」でも「思はゆ」で止めている。「しほほ」も特殊で、濡れる形容であろうが、また、「しおしおと」とか、「しぬに」とも通うのかも知れない。

○

大君の命かしこみ出で来れば我ぬ取り着きて
いひし子なはも　〔巻二十・四三五八〕　防人

上総周淮郡、上丁物部竜の作。下の句は、「我に取り着きて言ひし子ろはも」というのだが、それが訛ったのである。「我ぬ取り着きていひし子なはも」の句は、現実に見るような生々したところがあっていい。当時にあっては今の都会の女などに比して、感動の表出が活潑で且つ露骨であったとおもうのは、抑制が社会的に洗練せられないからであるが、歌として却って面白いのが残っている。「道のべの荊の末に這ほ豆のからまる君を離れか行かむ」(同・四三五二)も同じような場面だが、この豆蔓の方は間接に序詞を使って技巧的であるが、それでも、豆蔓のか

らまるところは流石に真実でおもしろい。

○

筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ昼もかなしけ　〔巻二十・四三六九〕　防人

常陸那賀郡、上丁大舎人部千文の作である。「夜床」をユドコと訛ったから、「百合」のユに連続せしめて序詞とした。併し、「筑波嶺のさ百合の花の」までは、ただの空想でなく郷土的実際の見聞を本としたのが珍らしいのである。「かなしけ」は、「かなしき」の訛。一首の意は、夜の床でも可哀いい妻だが、昼日中でもやはり可哀いくて忘れられない、というので、その言い方が如何にも素朴直截で愛誦するに堪うべきものである。このいい方は巻十四の東歌に見るような民謡風なものだから、或はそういう既にあったものを書き記して通告したとも取れるが、若しこの千文という者が作ったとすると、東歌なども東国の人々によって作られたことが分かり、興味も亦深いわけである。「旅行に行くと知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ」(巻二十・四三七六)の結句が、「悔しき」の訛で、「かなしき」を「かなしけ」と云ったのと同じである。

○

あられ降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は来にしを　〔巻二十・四三七〇〕　防人

前と同じ作者である。鹿島の神は、現在茨城県鹿島郡鹿島町に鎮座する官幣大社鹿島神宮で、祭神は武甕槌命にまします。千葉県香取郡香取町*に鎮座する官幣大社香取神宮(祭神経津主命即ち伊波比主命)と共に、軍神として古代から崇敬至ったものであった。防人等は九州防衛のため出発するのであるが、出発に際しまた道すがらその武運の長久を祈願したのであった。土屋文明氏によれば、常陸の国府は今の石岡町**にあったから、そこから鹿島郡軽野を過ぎ、下総国海上郡に出たようだから、途中鹿島の神に参拝することが出来たのである。

一首の意は、武神にまします鹿島の神に、武運をば御いのりしながら、天皇の御軍勢のなかに私は加わりまいりましたのでござりまする、というのである。

結句の「を」は感歎の助詞で、それを以て感奮の心を籠めて結句としたものである。併し若しこの「来にしを」を、「来たものを」、「来たのに」というように余言を籠もらせたと解釈するなら、「皇御軍のために我は来しますらをなるを、夜昼ともに悲しと思ひし妻を留めて置つれば心弱く顧せらるゝ事を云ひ残して含めるなるべし」(代匠記)か「鹿島の神に祈願て官軍に出

て来しものをいかでいみじき功勲を立てずして帰り来るべしや」(古義)かのいずれにかになる。「あられ降り」を「鹿島」の枕詞にしたのは、霰が降って喧しいから、同音でつづけた。カマカマシ、カシカマシ、カシマシとなったのだろうと云われて居る。こういう技巧も既に一部に行われていたものか、或はこの作者の発明か。

○

ひなぐもり碓日の坂を越えしだに妹が恋しく
忘らえぬかも　〔巻二十・四四〇七〕　防人

他田部子磐前という者の作。「ひなぐもり」は、日の曇り薄日だから、「うすひ」の枕詞とした。一首は、まだようやく碓氷峠を越えたばかりなのに、もうこんなに妻が恋しくて忘れられぬ、というのであろう。当時は上野からは碓氷峠を越して信濃に入り、それから美濃路へ出たのであった。この歌は歌調が読んでいていかにも好く、哀韻さえこもっているので此辺で選ぶとすれば選に入るべきものであろう。「だに」という助詞は多くは名詞につくが、必ずしもそうでなく、「棚霧らひ雪も降らぬか梅の花咲かぬが代に添へてだに見む」(巻八・一六四二)、「池のべの小槻が下の細竹な苅りそね其をだに君が形見に見つつ偲ばむ」(巻七・一二七六)等の例がある。

○

防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しさ
物思ひもせず　〔巻二十・四四二五〕　防人の妻

昔年の防人の歌という中にあるから、天平勝宝七歳よりもずっと前のものだということが分かる。またこれは防人の妻の作ったもののようである。一首は、見おくりの人だちの立こんだ中に交って、防人に行くのは誰ですか、どなたの御亭主ですか、などと、何の心配もなく、たずねたりする人を見ると羨しいのです、というので、そういう質問をしたのは女であったことをも推測するに難くはない。まことに複雑な心持をすらすらと云って除けて、これだけのそっの無いものを作りあげたのは、そういう悲歎と羨望の心とが張りつめていたためであろう。「物思ひもせず」と止めた結句も不思議によい。

○

小竹が葉のさやぐ霜夜に七重着る衣にませる
子ろが膚はも　〔巻二十・四四三一〕　防人

これも昔年の防人歌だと注せられている。一首は、笹の葉に冬の風が吹きわたって音するよ

うな、寒い霜夜に、七重もかさねて着る衣の暖かさよりも、恋しい女の膚の方が暖い、というので、膚を中心として、「膚はも」と詠歎したのは覚官的である。また当時の民間では、七重の衣という言葉さえ羨しい程のものであっただろうから、こういう云い方も伝わっているのである。この歌も民謡風で防人が出発する時の歌などに似ないこと、前に出した、「かなしけ妹ぞ昼もかなしけ」(巻二十・四三六九)の場合と同じである。ただの東歌に類した民謡をば、蒐集した磐余伊美吉諸君が、進上された儘に防人の歌としたものであろう。

○

雲雀あがる春べとさやになりぬれば都も見えず霞たなびく　〔巻二十・四四三四〕　大伴家持

これは家持作だが、天平勝宝七歳三月三日、防人を検校する勅使、并に兵部使人等、同に集える飲宴で、兵部少輔大伴家持の作ったものである。一首は、雲雀が天にのぼるような、春が明瞭に来たのだから、都も見えぬまでに霞も棚びいている、というので、調がのびのびとして、苦渋が無く、清朗とでもいうべき歌である。「さやに」は清に、明かに、明瞭に、はっきりと、などの意で、この句はやはり一首にあっては大切な句である。なぜ家持はこういう歌を作ったかというに、その時来た勅使(安倍沙美麿)が、「朝なさな揚る雲雀になりてしか都に行きてはや

帰り来む」(巻二十・四四三三)という歌を作ったので其に和したものである。勅使の歌が形式的申訣的なので家持の歌も幾分そういうところがある。併し勅使の歌がまずいので、家持の歌が目立つのである。なお此時家持は、「含めりし花の初めに来しわれや散りなむ後に都へ行かむ」(同・四四三五)という歌をも作っているが、下の句はなかなか旨い。

○

剣刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて来にしその名ぞ　〔巻二十・四四六七〕　大伴家持

大伴家持は、天平勝宝八歳、「族に喩す歌」長短歌を作った。これは淡海真人三船の讒言によって、出雲守大伴古慈悲が任を解かれた、古慈悲は大伴の一家で宝亀八年八月に薨じた者だが、出雲守を罷めさせられた時に家持がこの歌を作った。歌は句々緊張し、寧ろ悲痛の声ということの出来る程であり、長歌には、「聞く人の鑒にせむを、惜しき清きその名ぞ、凡に心思ひて、虚言も祖の名断つな、大伴の氏と名に負へる、健男の伴」というような句がある。この一首は、剣太刀をば愈ますます励み研げ、既に神の御代から、清かに武勲の名望を背負い立って来たその家柄であるぞ、というので、「清けく」は清く明かにの意である。この短歌は、長歌の方でいろいろ細かく云ったから、大要的に結論を云ったようなものだが、やはり句々が緊張していて

いい。大伴家の家運が下降の向きにある時だったので、ことに悲痛の響となったのであろう。この短歌も威勢のよいのと同時に底に悲哀の韻をこもらせているのはそのためである。

○

現身は数なき身なり山河の清けき見つつ道を
尋ねな　〔巻二十・四四六八〕　大伴家持

大伴家持が、「病に臥して無常を悲しみ修道を欲して作れる歌」二首の一つである。「数なき」は、年齢の数の無いということ、年寿の幾何もないこと、幾ばくも生きないことである。人間というものはそう長生をするものではない。よって、濁世を厭離し、自然山川の清い風光に接見しつつ、仏道を修めねばならぬ、というのである。「道を尋ねな」と日本語流にくだいたのも、既に当時の人の常識になっていたともおもうが、なかなかよい。この歌には前途の安心を望むが如くであって、実は悲哀の心の方が深く滲みこんでいる。また仏教的の本性清浄観をただ一気にいっているようで、実は病痾を背景とする実感が強いのであるから、読者はそれを見のがしてはならない。この歌と並んで、「渡る日のかげに競ひて尋ねてな清きその道またも遇はむため」(巻二十・四四六九)という歌をも作っている。「わたる日の影に競ひて」は、日光のはやく過ぎゆくにも負けずに、即ち光陰を惜しんでの意。「またも遇はむため」は来世にも亦この仏果

に逢わんためという意で、やはり力づよいものを持っている。こういうものになると一種の思想的抒情詩であるからむずかしいのだが、家持は一種の感傷を以てそれを統一しているのは、既に古調から脱却せんとしつつ、なお古調のいいものを保持しているのである。

○

いざ子ども戯わざな為そ天地の固めし国ぞや
まと島根は　〔巻二十・四四八七〕　藤原仲麿

天平宝字元年十一月十八日、内裏にて肆宴をしたもうた時、藤原朝臣仲麿の作った歌である。仲麿は即ち恵美押勝であるが、橘奈良麿等が仲麿の専横を悪んで事を謀った時に、仲麿の奏上によってその徒党を平げた。その時以後の歌だから、「いざ子ども」は、部下の汝等よ、というので、「いざ子どもはやく日本へ」(巻一・六三)、「いざ子ども敢へて榜ぎ出む」(巻三・三八八)、「いざ子ども香椎の潟に」(巻六・九五七)等諸例がある。「戯わざなせそ」は、戯れ業をするな、巫山戯たまねをするな、というので、「うち靡ひ縁りてぞ妹は、戯れてありける」(巻九・一七三八)の例がある。一首は、ものどもよ、巫山戯たことをするなよ、この日本の国は天地の神々によって固められた御国柄であるぞ、というので、強い調子で感奮して作っている歌である。併し、「戯わざな為そ」という句は、悪い調子を持っていて慈心が無い。とげとげしくて増上の気配

があるから、そこに行くと家持の歌の方は一段と大きく且つ気品がある。「剣大刀いよよ研ぐべし」や、「丈夫は名をし立つべし」の方が、同じく発奮でも内省的なところがあり、従って慈味が湛えられている。仲麿は作歌の素人なために、この差別があるともおもうが、抒情詩の根本問題は、素人玄人などの問題などではない。よって此歌を選んで置いた。

○

大き海の水底深く思ひつつ裳引きならしし菅原の里　〔巻二十・四四九一〕　石川女郎

「藤原宿奈麿朝臣の妻、石川女郎愛薄らぎ離別せられ、悲しみ恨みて作れる歌年月いまだ詳ならず」という左注のある歌である。宿奈麿は宇合の第二子、後内大臣まで進んだ。「菅原の里」は大和国生駒郡、今の奈良市の西の郊外*にある。昔は平城京の内で、宿奈麿の邸宅が其処にあったものと見える。一首は、大海の水底のように深く君をおもいながら、裳を長く引き馴らして楽しく住んだあの菅原の里よ、というので、こういう背景のある歌として哀深いし、「裳引ならしし菅原の里」あたりは、女性らしい細みがあっていい。ただこういう背景が無いとして味えば、歌柄の稍軽いのは時代と相関のものであろう。

○

初春の初子の今日の玉箒手に取るからにゆらぐ玉の緒　〔巻二十・四四九三〕　大伴家持

天平宝字二年春正月三日、孝謙天皇、王臣等を召して玉箒を賜い肆宴をきこしめした。その時右中弁大伴家持の作った歌である。正月三日（丙子）は即ち初子の日に当ったから「初子の今日」といった。玉箒は玉を飾った箒で、目利草（著草）で作った。古来農桑を御奨励になり、正月の初子の日に天皇御躬ずから玉箒を以て蚕卵紙を掃い、鋤鍬を以て耕す御態をなしたもうた。そして豊年を寿ぎ邪気を払いたもうたのちに、諸王卿等に玉箒を賜わった。そこでこの歌がある。現に正倉院御蔵の玉箒の傍に鋤があってその一に、「東大寺献天平宝字二年正月」と記してあるのは、まさに家持が此歌を作った時の鋤である。「ゆらぐ玉の緒」は玉箒の玉を貫いた緒がゆらいで鳴りひびく、清くも貴い瑞徴として何ともいえぬ、というので、家持も相当に骨折ってこの歌を作り、流麗な歌調のうちに重みをたたえて特殊の歌品を成就している。結句は全くの写生だが、音を以て写生しているのは旨いし、書紀の瓊音瑲々などというのを、純日本語でいったのも家持の力量である。但し此歌は其時中途退出により奏上せなかったという左注が附いている。

○

水鳥の鴨の羽の色の青馬を今日見る人はかぎり無しといふ　〔巻二十・四四九四〕　大伴家持

同じく正月七日の侍宴(白馬の節会)の為めに、大伴家持が兼ねて作った歌だと左注にある。「水鳥の鴨の羽の色の」は「青」と云わんための序である。「青馬」は公事根源に、「白馬の節会をあるひは青馬の節会とも申すなり。其の故は馬は陽の獣なり。青は春の色なり。これによりて、正月七日に青馬を見れば、年中の邪気を除くという本文侍るなり」とある。馬の性は白を本とするといったから、当時アヲウマと云って、白馬を用いていたという説もあるが、私には精しい事は分からない。「限りなしといふ」とは、寿命が限無いというのであるが、この結句は一首の中心をなすものであり、据わりも好いし、恐らく、これと同じ結句は万葉にはほかになかろうか。中味は、「今日見る人は」とこの句のみだが、割合に落着いていて佳い歌である。家持は、こういう歌を前以て作っていたということを正直に記してあるのも興味あり、このくらいの歌でも、即興的に口を突いて出来るものでないことは実作家の常に経験するところであるが、このあたりの家持の歌の作歌動機は、常に儀式的なもののみであるのも、何かを暗指しているような気がしてならない。「いふ」で止めた例は、「赤駒を打ちてさ緒引き心引きいかな

る兄か吾許来むと言ふ」(巻十四・三五三六)、「渋渓の二上山に鷲ぞ子産とふ翳にも君が御為に鷲ぞ子生とふ」(巻十六・三八八二)があるのみである。

○

池水に影さへ見えて咲きにほふ馬酔木の花を袖に扱入れな　〔巻二十・四五一二〕　大伴家持

大伴家持の山斎属目の歌だから、庭前の景をそのまま詠んでいる。「影さへ見えて」の句も既にあったし、家持苦心の句ではない。ただ、「馬酔木の花を袖に扱入れな」というのが此歌の眼目で佳句であるが、「引き攀ぢて折らば散るべみ梅の花袖に扱入れつ染まば染むとも」(巻八・一六四四)の例もあり、家持も「白妙の袖にも扱入れ」(巻十八・四一一一)、「藤浪の花なつかしみ、引き攀ぢて袖に扱入れつ、染まば染むとも」(巻十九・四一九二)と作っているから、あえて此歌の手柄ではないが、馬酔木の花を扱入れなといったのは何となく適切なようにおもわれる。併し全体として写生力が足りなく、諳記により手馴れた手法によって作歌する傾向が見えて来ている。そして其に対して反省せんとする気魄は、そのころの家持にはもう衰えていたのであっただろうか。私はまだそうは思わない。

○

あらたしき年の始めの初春の今日降る雪のいや重け吉事　〔巻二十・四五一六〕　大伴家持

天平宝字三年春正月一日、因幡国庁に於て、国司の大伴家持が国府の属僚郡司等に饗した時の歌で、家持は二年六月に因幡守に任ぜられた。「新しき」はアラタシキである。新年に降った雪に瑞兆を託しつつ、部下と共に前途を祝福した、寧ろ形式的な歌であるが、「の」を以て続けた、伸々とした調べはこの歌にふさわしい形態をなした。「いや重け吉事」は、益々吉事幸福が重なれよというので、名詞止めにしたのも、やはりおのずからなる声調であろうか。また、「吉事」という語を使ったのも此歌のみのようである。謝恵連の雪賦に、盈レ尺則呈二瑞於豊年一云々の句がある。

此歌は新年の吉祥歌であるばかりでなく、また万葉集最後の結びであり、万葉集編輯の最大の功労者たる家持の歌だから、特に選んで置いたのであるが、この「万葉秀歌」で、最初に選んだ、「たまきはる宇智の大野に馬なめて」の歌に比して歌品の及ばざるを私等は感ぜざることを得ない。家持の如く、歌が好きで勉強家で先輩を尊び遜って作歌を学んだ者にしてなお斯くの如くである。万葉初期の秀歌というもののいかなるものだかということはこれを見ても分かるのである。

万葉後期の歌はかくの如くであるが、若しこれを古今集以後の幾万の歌に較べるならば、これはまた徹頭徹尾較べものにはならない。それほど万葉集の歌は佳いものである。家持のこの歌は万葉集最後のものだが、代匠記に、「抑此集、初ニ雄略舒明両帝ノ民ヲ恵マセ給ヒ、世ノ治マレル事ヲ悦ビ思召ス御歌ヨリ次第ニ載テ、今ノ歌ヲ以テ一部ヲ祝ヒテ終ヘタレバ、玉匣フタミ相称ヘル験アリテ、蔵ス所世ヲ経テ失サルカナ」と云っている。

参考地名一覧

頁

二　＊　大阪府吹田市垂水町、兵庫県神戸市垂水区東・西垂水町。

三　＊　奈良県生駒郡斑鳩町稲葉車瀬。

七　＊　奈良県北葛城郡広陵町百済。

一四　＊　奈良県桜井市黒崎町。

一九　＊　奈良県高市郡明日香村。

二四　＊　奈良県桜井市。

〃　＊＊　奈良県高市郡明日香村細川、稲淵。

二五　＊　奈良県高市郡明日香村冬野、稲淵。

三三　＊　奈良県御所市朝妻町。

三八　＊　奈良県五条市東・西・南阿田町。

四三　＊　奈良県北葛城郡香芝町下田。

四四　＊　奈良県桜井市初瀬町。

四六　＊　京都市右京区大原野町上羽。

五九　＊　京都府宇治市木幡町。

一〇四　＊　千葉県市原市姉崎町。

一二四　＊　群馬県渋川市。

一三三　＊　長崎県対馬の浅茅湾。

一三四　＊　長崎県下県郡美津島町竹敷。

一四二　＊　福島県郡山市日和田町。

一四九　＊　富山県高岡市伏木町。

一六八　＊　奈良市山町。

一七五　＊　千葉県佐原市香取。

〃　＊＊　茨城県石岡市。

一八二　＊　奈良市菅原町。

改版に際して

本書は、昭和十三年十一月二十日第一刷発行以来、現在までに、上巻は四十三刷五十一万部、下巻は四十刷四十万部をこえる部数に達した。さきに昭和二十八、九年に改版した紙型が痛んだので、今回四度版を起こすことになった。この機会に、著者の原文の尊重を基本として、現代の読者のために読みやすく親しみやすい形にしたいという岩波書店編集部の希望があり、斎藤家でも賛成せられたので、編集部と協議して、次のような変更を行なうことにした。

一、字体は、すべて当用漢字字体表による新字体を採用した。

一、かなづかいは、歌、および引用の歌句、文章は旧版の歴史的かなづかいのままとし、著者の文章は現代かなづかいとした。

一、万葉集において、江戸時代以来、野、角、慕ぶ、楽しなどと訓まれてきた一群の語は、橋本進吉博士の上代特殊かなづかいの説によって、現在では一般に、野、角、慕ぶ、楽しなどに、つまりヌをノに訓み改めることになっている。しかし本書の著者は、この問題については旧来のようにヌとすべきであるという強い意見を持っていたので、この点に関してはもとのままにしておくことにした。

一、原則として当用漢字表にない漢字の用いられた語、特に現在多くの人々に難読と思われる語、また固

有名詞で必要と思われるものなどには、ふりがなをつけた。これらは初出の語につけることにしたが、しばしば現われる語には、繰り返してふりがなをつけた場合もある。もともと旧版にある固有名詞のふりがなには、現在ではいかがと思われるものも見当るが、すべてもとのままとした。

一、引用文にも、難読と思われるところには、ふりがなをつけたが、この場合、もともと旧版にあるふりがなは、片かな、平がな、それぞれそのままとし、今回新しく加えたふりがなは、原文が片かなであると、平がなであるとにかかわらず、すべて平がなとした。

一、旧版の小活字のところは、その内容により、原拠を示す場合などの外は、多く本文と同じ大きさの活字とした。

一、引用された歌の巻数や国歌大観の番号の示し方が、まちまちになっていたところは、今回改めて統一した。長歌の句切れについても、今回原則として五七の二句を一つにして読点を付けることに統一した。

一、本書に現われた地名のその後変更されているものは、参考までに本文に＊を付し、現在の地名を本文の終りに一覧として掲げておくことにした。なお、原則として重出のものについては、これを省いた。

一、旧版の誤りで、単に文字を改める程度のものは、これを正したが、著者の文章を変改することになる場合は、これを避けてもとのままとした。本書以後の学説の進展によって、改められるべきところもあるわけであるが、しかしそれらの多くは、本書として重要な点ではないようである。以上改版のことにつき、岩波書店榎本和歌男氏、山田洋子氏の尽力を感謝する。（昭和四十三年十一月　柴生田　稔）

斎藤茂吉

1882-1953年
1910年東京帝国大学医科大学卒業
専門―精神医学，歌人
著書―『赤光』『あらたま』『寒雲』
『白き山』『童馬漫語』
『柿本人麿』
『斎藤茂吉全集』(全36巻)

万葉秀歌 下巻 (全2冊)　岩波新書(赤版)6

1938年11月20日　第 1 刷発行
1948年 1 月20日　第 10 刷改版発行
1954年 1 月 7 日　第 23 刷改版発行
1968年12月25日　第 41 刷改版発行
2013年 9 月20日　第101刷発行

著　者　斎藤茂吉（さいとう もきち）
発行者　岡本　厚
発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
案内 03-5210-4000　販売部 03-5210-4111
http://www.iwanami.co.jp/
新書編集部 03-5210-4054
http://www.iwanamishinsho.com/
印刷・三秀舎　カバー・半七印刷　製本・中永製本

ISBN 4-00 400003 3　Printed in Japan

岩波新書新赤版一〇〇〇点に際して

ひとつの時代が終わったと言われて久しい。だが、その先にいかなる時代を展望するのか、私たちはその輪郭すら描きえていない。二〇世紀から持ち越した課題の多くは、未だ解決の緒を見つけることのできないままであり、二一世紀が新たに招きよせた問題も少なくない。グローバル資本主義の浸透、憎悪の連鎖、暴力の応酬――世界は混沌として深い不安の只中にある。

現代社会においては変化が常態となり、速さと新しさに絶対的な価値が与えられた。消費社会の深化と情報技術の革命は、種々の境界を無くし、人々の生活やコミュニケーションの様式を根底から変容させてきた。ライフスタイルは多様化し、一面では個人の生き方をそれぞれが選びとる時代が始まっている。同時に、新たな格差が生まれ、様々な次元での亀裂や分断が深まっている。社会や歴史に対する意識が揺らぎ、普遍的な理念に対する根本的な懐疑や、現実を変えることへの無力感がひそかに根を張りつつある。そして生きることに誰もが困難を覚える時代が到来している。

しかし、日常生活のそれぞれの場で、自由と民主主義を獲得し実践することを通じて、私たち自身がそうした閉塞を乗り超え、希望の時代の幕開けを告げてゆくことは不可能ではあるまい。そのために、いま求められていること――それは、個と個の間で開かれた対話を積み重ねながら、人間らしく生きることの条件について一人ひとりが粘り強く思考することではないか。その営みの糧となるものが、教養に外ならないと私たちは考える。歴史とは何か、よく生きるとはいかなることか、世界そして人間はどこへ向かうべきなのか――こうした根源的な問いとの格闘が、文化と知の厚みを作り出し、個人と社会を支える基盤としての教養となった。まさにそのような教養への道案内こそ、岩波新書が創刊以来、追求してきたことである。

岩波新書は、日中戦争下の一九三八年二月に赤版として創刊された。創刊の辞は、道義の精神に則らない日本の行動を憂慮し、批判的精神と良心的行動の欠如を戒めつつ、現代人の現代的教養を刊行の目的とする、と謳っている。以後、青版、黄版、新赤版と装いを改めながら、合計二五〇〇点余りを世に問うてきた。そして、いままた新赤版が一〇〇〇点を迎えたのを機に、人間の理性と良心への信頼を再確認し、それに裏打ちされた文化を培っていく決意を込めて、新しい装丁のもとに再出発したいと思う。一冊一冊から吹き出す新風が一人でも多くの読者の許に届くこと、そして希望ある時代への想像力を豊かにかき立てることを切に願う。

（二〇〇六年四月）

岩波新書より

文学

面白い本　成毛眞
近代秀歌　永田和宏
杜甫　川合康三
白楽天　川合康三
古典力　齋藤孝
読書力　齋藤孝
食べるギリシア人　丹下和彦
和本のすすめ　中野三敏
老いの歌　小高賢
魯迅　藤井省三
ラテンアメリカ十大小説　木村榮一
王朝文学の楽しみ　尾崎左永子
正岡子規　言葉と生きる　坪内稔典
季語集　坪内稔典
文学フシギ帖　池内紀
ヴァレリー　清水徹
ぼくらの言葉塾　ねじめ正一
季語の誕生　宮坂静生
和歌とは何か　渡部泰明
ミステリーの人間学　廣野由美子
小林多喜二　ノーマ・フィールド
いくさ物語の世界　日下力
漱石　母に愛されなかった子　三浦雅士
中国の五大小説 下　水滸伝・金瓶梅・紅楼夢　井波律子
中国の五大小説 上　三国志演義・西遊記　井波律子
中国文章家列伝　井波律子
三国志演義　井波律子
歌仙の愉しみ　大岡信・丸谷才一
新折々のうた 総索引　大岡信編
新折々のうた 2・8　大岡信
第五～九 折々のうた　大岡信
折々のうた　大岡信
中国名文選　興膳宏
日本の神話・伝説を読む　佐佐木隆
アラビアンナイト　西尾哲夫
グリム童話の世界　高橋義人
小説の読み書き　佐藤正午
笑う大英帝国　富山太佳夫
森鷗外 文化の翻訳者　長島要一
チェーホフ　浦雅春
英語でよむ万葉集　リービ英雄
源氏物語の世界　日向一雅
古事記の読み方　坂本勝
花のある暮らし　栗田勇
一億三千万人のための小説教室　高橋源一郎
ダルタニャンの生涯　佐藤賢一
漢詩　松浦友久
伝統の創造力　辻井喬
翻訳はいかにすべきか　柳瀬尚紀
一葉の四季　森まゆみ
フランス恋愛小説論　工藤庸子
太宰治　細谷博
陶淵明　一海知義
短歌パラダイス　小林恭二

隅田川の文学　久保田淳
漱石を書く　島田雅彦
短歌をよむ　俳句　穂村弘
西行　高橋英夫
新しい文学のために　大江健三郎
短編小説礼讃　阿部昭
ドストエフスキー　江川卓
四谷怪談　廣末保
中国の妖怪　中野美代子
徒然草を読む　永積安明
万葉群像　北山茂夫
茂吉秀歌 上・下　佐藤佐太郎
政治家の文章　武田泰淳
日本の近代小説　中村光夫
平家物語　石母田正
紫式部　清水好子
源氏物語　秋山虔
新唐詩選　吉川幸次郎・三好達治
ホメーロスの英雄叙事詩　高津春繁
ギリシア神話　高津春繁
文学入門　桑原武夫
万葉秀歌 上・下　斎藤茂吉

随筆

ヘタウマ文化論　山藤章二
なつかしい時間　長田弘
百年の手紙　梯久美子
本へのとびら　宮崎駿
人間と国家 上・下　坂本義和
ある政治学徒の回想
ぼんやりの時間　辰濃和男
文章のみがき方　辰濃和男
四国遍路　辰濃和男
文章の書き方　辰濃和男
思い出袋　鶴見俊輔
活字たんけん隊　椎名誠
活字のサーカス　椎名誠
道楽三昧　小沢昭一・神崎宣武聞き手
仕事道楽 スタジオジブリの現場　鈴木敏夫
人生読本 落語版　矢野誠一
ブータンに魅せられて　今枝由郎
悪あがきのすすめ　辛淑玉
怒りの方法　辛淑玉
水の道具誌　山口昌伴
スローライフ　筑紫哲也
森の紳士録　池内紀
沖縄生活誌　高良勉
シナリオ人生　新藤兼人
老人読書日記　新藤兼人
伝言　永六輔
夫と妻　永六輔
職人　永六輔
大往生　永六輔
現代人の作法　中野孝次
ジャズと生きる　穐吉敏子
日本の「私」からの手紙　大江健三郎
あいまいな日本の私　大江健三郎
沖縄ノート　大江健三郎
ヒロシマ・ノート　大江健三郎
日記 十代から六十代までのメモリー　五木寛之
山への挑戦　堀田弘司
勝負と芸 わが囲碁の道　藤沢秀行
メキシコの輝き　黒沼ユリ子
プロ野球審判の眼　島秀之助
昭和青春読書私史　安田武
ヒマラヤ登攀史 第三版　深田久弥
南極越冬記　西堀栄三郎
羊の歌 正・続　加藤周一
知的生産の技術　梅棹忠夫
論文の書き方　清水幾太郎
一日一言　桑原武夫編
インドで考えたこと　堀田善衛
追われゆく坑夫たち　上野英信
岩波新書をよむ　岩波新書編集部編

芸術

ラジオのこちら側で　ピーター・バラカン
小さな建築　隈研吾
デスマスク　岡田温司
コルトレーン　ジャズの殉教者　藤岡靖洋
雅楽を聴く　寺内直子
歌謡曲　高護
『七人の侍』と現代　四方田犬彦
四コマ漫画　清水勲
漫画の歴史　清水勲
琵琶法師　兵藤裕己
日本庭園　小野健吉
歌舞伎の愉しみ方　山川静夫
自然な建築　隈研吾
シェイクスピアのたくらみ　喜志哲雄
演出家の仕事　栗山民也
肖像写真　多木浩二
世界の音を訪ねる　久保田麻琴
Jポップとは何か　鳥賀陽弘道
宝塚というユートピア　川崎賢子
瀧廉太郎　海老澤敏
東京遺産　森まゆみ
日本の色を染める　吉岡幸雄
プラハを歩く　田中充子
無村　藤田真一
愛すべき名歌たち　阿久悠
コーラスは楽しい　関屋晋
ぼくのマンガ人生　手塚治虫
日本の近代建築 上・下　藤森照信
日本の舞踊　渡辺保
千利休　無言の前衛　赤瀬川原平
やきもの文化史　三杉隆敏
色彩の科学　金子隆芳
マリリン・モンロー　亀井俊介
茶の文化史　村井康彦
床の間　太田博太郎
日本の耳　小倉朗
絵を描く子供たち　北川民次
名画を見る眼 正・続　高階秀爾
音楽の基礎　芥川也寸志
日本美の再発見（増補改訳版）　ブルーノ・タウト　篠田英雄訳

自然科学

川と国土の危機　水害と社会　高橋裕
適正技術と代替社会　田中直
四季の地球科学　尾池和夫
キノコの教え　小川眞
地下水は語る　守田優
宇宙から学ぶ　ユニバソロジのすすめ　毛利衛
宇宙からの贈りもの　毛利衛
心と脳　安西祐一郎
職業としての科学　佐藤文隆
宇宙論への招待　佐藤文隆
津波災害　河田惠昭
高木貞治　近代日本数学の父　高瀬正仁
太陽系大紀行　野本陽代
偶然とは何か　竹内敬
ぶらりミクロ散歩　田中敬一
超ミクロ世界への挑戦　田中敬一
冬眠の謎を解く　近藤宣昭
人物で語る化学入門　竹内敬人
ダーウィンの思想　内井惣七
宇宙論入門　佐藤勝彦
タンパク質の一生　永田和宏
疑似科学入門　池内了
火山噴火　鎌田浩毅
ウナギ　地球環境を語る魚　井田徹治
数に強くなる　畑村洋太郎
人物で語る物理入門 上・下　米沢富美子
日本の地震災害　伊藤和明
性転換する魚たち　桑村哲生
逆システム学　金子勝　児玉龍彦
宇宙人としての生き方　松井孝典
私の脳科学講義　利根川進
ペンギンの世界　上田一生
木造建築を見直す　坂本功
市民科学者として生きる　高木仁三郎
科学の目 科学のこころ　長谷川眞理子
コンクリートが危ない　小林一輔
地震予知を考える　茂木清夫
水族館のはなし　堀由紀子
生命と地球の歴史　丸山茂徴　磯崎行雄
科学論入門　佐々木力
ブナの森を楽しむ　西口親雄
細胞から生命が見える　柳田充弘
摩擦の世界　角田和雄
からだの設計図　岡田節人
孤島の生物たち　小野幹雄
大地動乱の時代　石橋克彦
日本酒　秋山裕一
日本列島の誕生　平朝彦
生物進化を考える　木村資生
大地の微生物世界　服部勉
花と木の文化史　中尾佐助
栽培植物と農耕の起源　中尾佐助
宝石は語る　砂川一郎

母乳　山本高治郎
動物園の獣医さん　川崎泉
星の古記録　斉藤国治
コマの科学　戸田盛和
分子と宇宙　木原太郎
物理学とは何だろうか 上・下　朝永振一郎
相対性理論入門　内山龍雄
火山の話　中村一明
数の体系 上・下　彌永昌吉
人間であること　時実利彦
人間はどこまで動物か　A・ポルトマン　高木正孝訳
植物たちの生　沼田真
アラビア科学の話　矢島祐利
科学の方法　中谷宇吉郎
日本の地形　貝塚爽平
数学の学び方・教え方　遠山啓
数学入門 上・下　遠山啓
無限と連続　遠山啓
世界の酒　坂口謹一郎
釣りの科学　檜山義夫
原子力発電　武谷三男編
物理学はいかに創られたか 上・下　アインシュタイン　インフェルト　石原純訳
零の発見　吉田洋一

福祉・医療

トラウマ　宮地尚子
自閉症スペクトラム障害　平岩幹男
看護の力　川嶋みどり
心の病 回復への道　野中猛
重い障害を生きるということ　高谷清
肝臓病　渡辺純夫
感染症と文明　山本太郎
新型インフルエンザ 世界がふるえる日　山本太郎
ルポ 認知症ケア最前線　佐藤幹夫
ルポ 高齢者医療　佐藤幹夫
医の未来　矢崎義雄編
介護保険は老いを守るか　沖藤典子
パンデミックとたたかう　押谷仁　瀬名秀明
健康不安社会を生きる　飯島裕一編著
健康ブームを問う　飯島裕一編著
疲労とつきあう　飯島裕一
長寿を科学する　祖父江逸郎
温泉と健康　阿岸祐幸
介護 現場からの検証　結城康博
医療の値段　結城康博
腎臓病の話　椎貝達夫
「尊厳死」に尊厳はあるか　中島みち
がんとどう向き合うか　額田勲
がん緩和ケア最前線　坂井かをり
人はなぜ太るのか　岡田正彦
児童虐待　川崎二三彦
生老病死を支える　方波見康雄
認知症とは何か　小澤勲
鍼灸の挑戦　松田博公
障害者とスポーツ　高橋明
生体肝移植　後藤正治
放射線と健康　舘野之男
定常型社会 新しい「豊かさ」の構想　広井良典
日本の社会保障　広井良典
生活習慣病を防ぐ　香川靖雄
血管の病気　田辺達三
医の現在　高久史麿編
アルツハイマー病　黒田洋一郎
居住福祉　早川和男
高齢者医療と福祉　岡本祐三
看護 ベッドサイドの光景　増田れい子
信州に上医あり　南木佳士
医療の倫理　星野一正
腸は考える　藤田恒夫
ルポ 体験世界の高齢者福祉　山井和則
障害者は、いま　大野智也
光に向って咲け　粟津キヨ
リハビリテーション　砂原茂一
指と耳で読む　本間一夫
村で病気とたたかう　若月俊一

環境・地球

欧州のエネルギーシフト　脇阪紀行
グリーン経済最前線　井田徹治・末吉竹一郎
低炭素社会のデザイン　西岡秀三
環境アセスメントとは何か　原科幸彦
生物多様性とは何か　井田徹治
キリマンジャロの雪が消えていく　石弘之
地球環境報告　石弘之
地球環境報告Ⅱ　石弘之
酸性雨　石弘之
イワシと気候変動　川崎健
森林と人間　石城謙吉
世界森林報告　山田勇
地球の水が危ない　高橋裕
中国で環境問題にとりくむ　定方正毅
地球持続の技術　小宮山宏
日本の渚　加藤真
環境税とは何か　石弘光
ゴミと化学物質　酒井伸一
山の自然学　小泉武栄
地球温暖化を防ぐ　佐和隆光
地球温暖化を考える　宇沢弘文
地球環境問題とは何か　米本昌平
水俣病は終っていない　原田正純
水俣病　原田正純

情報・メディア

震災と情報　徳田雄洋
デジタル社会はなぜ生きにくいか　徳田雄洋
メディアと日本人　橋元良明
本は、これから　池澤夏樹編
インターネット新世代　村井純
インターネットⅡ　村井純
インターネット　村井純
ジャーナリズムの可能性　原寿雄
ITリスクの考え方　佐々木良一
ユビキタスとは何か　坂村健
ウェブ社会をどう生きるか　西垣通
IT革命　西垣通
メディア社会　佐藤卓己
現代の戦争報道　門奈直樹
未来をつくる図書館　菅谷明子
メディア・リテラシー　菅谷明子
テレビの21世紀　岡村黎明
インターネット術語集Ⅱ　矢野直明
インターネット術語集　矢野直明
広告のヒロインたち　島森路子
Windows入門　脇英世
フォト・ジャーナリストの眼　長倉洋海
日米情報摩擦　安藤博
職業としての編集者　吉野源三郎

宗教

マルティン・ルター　徳善義和
教科書の中の宗教　藤原聖子
『教行信証』を読む　親鸞の世界へ　山折哲雄
親鸞をよむ　山折哲雄
国家神道と日本人　島薗進
聖書の読み方　大貫隆
寺よ、変われ　高橋卓志
日本宗教史　末木文美士
法華経入門　菅野博史
イスラム教入門　中村廣治郎
ジャンヌ・ダルクと蓮如　大谷暢順
蓮如　五木寛之
密教　松長有慶
仏教入門　三枝充悳
ヒンドゥー教とイスラム教　荒松雄
イエスとその時代　荒井献
国家神道　村上重良
お経の話　渡辺照宏
日本の仏教　渡辺照宏
仏教（第二版）　渡辺照宏・鈴木大拙・北川桃雄訳
禅と日本文化

カラー版

カラー版 北斎　大久保純一
カラー版 浮世絵　大久保純一
カラー版 四国八十八カ所　石川文洋
カラー版 ベトナム戦争と平和　石川文洋
カラー版 知床・北方四島　大島秦一・司紀之・本間浩昭
カラー版 西洋陶磁入門　大平雅巳
カラー版 すばる望遠鏡の宇宙　海部宣男・宮下暁彦写真
カラー版 ブッダの旅　丸山勇
カラー版 難民キャンプの子どもたち　田沼武能
カラー版 ハッブル望遠鏡の宇宙遺産　野本陽代
カラー版 ハッブル望遠鏡が見た宇宙　野本陽代・R・ウィリアムズ
カラー版 細胞紳士録　藤田恒夫・牛木辰男
カラー版 メッカ　野町和嘉
カラー版 似顔絵　山藤章二
カラー版 シベリア動物誌　福田俊司
カラー版 妖怪画談　水木しげる

哲学・思想

哲学のヒント　藤田正勝
空海と日本思想　篠原資明
論語入門　井波律子
トクヴィル 現代へのまなざし　富永茂樹
和辻哲郎　熊野純彦
西洋哲学史 近代から現代へ　熊野純彦
西洋哲学史 古代から中世へ　熊野純彦
現代思想の断層　徳永恂
宮本武蔵　魚住孝至
いま哲学とはなにか　岩田靖夫
西田幾多郎　藤田正勝
善と悪　大庭健
丸山眞男　苅部直
世界共和国へ　柄谷行人
ラッセルのパラドクス　三浦俊彦
古代中国の文明観　浅野裕一
悪について　中島義道
ポストコロニアリズム　本橋哲也
偶然性と運命　木田元
ハイデガーの思想　木田元
現象学　木田元
私とは何か　上田閑照
戦争論　多木浩二
キケロ　高田康成
プラトンの哲学　藤沢令夫
術語集Ⅱ　中村雄二郎
臨床の知とは何か　中村雄二郎
術語集　中村雄二郎
哲学の現在　中村雄二郎
マックス・ヴェーバー入門　山之内靖
民族という名の宗教　なだいなだ
権威と権力　なだいなだ
ニーチェ　三島憲一
「文明論之概略」を読む 上・中・下　丸山真男
日本の思想　丸山真男
文化人類学への招待　山口昌男
生きる場の哲学　花崎皋平
アリストテレス　山本光雄
近代日本の思想家たち　林茂
諸子百家　貝塚茂樹
孔子　貝塚茂樹
孟子　金谷治
知者たちの言葉　斎藤忍随
朱子学と陽明学　島田虔次
デカルト　野田又夫
ソクラテス　田中美知太郎
現代論理学入門　沢田允茂
哲学入門　三木清

言語

百年前の日本語　今野真二
女ことばと日本語　中村桃子
テレビの日本語　加藤昌男
日本語雑記帳　田中章夫
英語で話すヒント　小松達也
仏教漢語50話　興膳宏
漢語日暦　興膳宏
語感トレーニング　中村明
曲り角の日本語　水谷静夫
日本語の古典　山口仲美
日本語の歴史　山口仲美
日本語と時間　藤井貞和
ことばと思考　今井むつみ
漢文と東アジア　金文京
外国語学習の科学　白井恭弘
日本語の源流を求めて　大野晋
日本語の教室　大野晋
日本語練習帳　大野晋
日本語の起源 (新版)　大野晋
日本語の文法を考える　田中克彦
エスペラント　田中克彦
名前と人間　田中克彦
言語学とは何か　田中克彦
ことばと国家　田中克彦
英文の読み方　行方昭夫
漢字伝来　大島正二
漢字と中国人　大島正二
日本の漢字　笹原宏之
日本の英語教育　山田雄一郎
ことばの由来　堀井令以知
コミュニケーション力　齋藤孝
聖書でわかる英語表現　石黒マリーローズ
横書き登場　屋名池誠
言語の興亡　R・M・W・ディクソン 大角翠訳
中国現代ことば事情　丹藤佳紀
ことば散策　山田俊雄
ことばの履歴　山田俊雄
日本人はなぜ英語ができないか　鈴木孝夫
教養としての言語学　鈴木孝夫
日本語と外国語　鈴木孝夫
ことばと文化　鈴木孝夫
心にとどく英語　マーク・ピーターセン
日本人の英語 正・続　マーク・ピーターセン
翻訳と日本の近代　丸山真男 加藤周一
日本語ウォッチング　井上史雄
仕事文の書き方　高橋昭男
日本語はおもしろい　柴田武
日本の方言　柴田武
日本語 (新版) 上・下　金田一春彦
外国語上達法　千野栄一
記号論への招待　池上嘉彦
外国人とのコミュニケーション　J・V・ネウストプニー
翻訳語成立事情　柳父章
日本語はどう変わるか　樺島忠夫
言語と社会　ピーター・トラッドギル 上田滋訳

漢字　白川静
四字熟語ひとくち話　岩波書店辞典編集部編
ことわざの知恵　岩波書店辞典編集部編
ことばの道草　岩波書店辞典編集部編

心理・精神医学

自殺予防　高橋祥友
だまされる心　安斎育郎
痴呆を生きるということ　小澤勲
〈こころ〉の定点観測　なだいなだ編著
純愛時代　大平健
やさしさの精神病理　大平健
豊かさの精神病理　大平健
快適睡眠のすすめ　堀忠雄
夢分析　新宮一成
精神病　笠原嘉
生涯発達の心理学　高橋惠子・波多野誼余夫
心病める人たち　石川信義
コンプレックス　河合隼雄

教育

教師が育つ条件　今津孝次郎
大学とは何か　吉見俊哉
赤ちゃんの不思議　開一夫
日本の教育格差　橘木俊詔
社会力を育てる　門脇厚司
子どもの社会力　門脇厚司
子どもが育つ条件　柏木惠子
障害児教育を考える　茂木俊彦
誰のための「教育再生」か　藤田英典編
教育改革　藤田英典
教育力　齋藤孝
思春期の危機をどう見るか　尾木直樹
子どもの危機をどう見るか　尾木直樹
学力を育てる　志水宏吉
幼児期　岡本夏木
子どもとことば　岡本夏木
「わかる」とは何か　長尾真
学力があぶない　大野晋・上野健爾
ワークショップ　中野民夫
ニューヨーク日本人教育事情　岡田光世
子どもとあそび　仙田満
子どもと学校　河合隼雄
子どもと自然　河合雅雄
子どもの宇宙　河合隼雄
教育とは何か　大田堯
からだ・演劇・教育　竹内敏晴
教育入門　堀尾輝久
日本教育小史　山住正己
乳幼児の世界　野村庄吾
自由と規律　池田潔
私は二歳　松田道雄
私は赤ちゃん　松田道雄

1430 **㈱貧困大国アメリカ**
堤 未果 著
食、自治体、政治、メディア、未来まで巨大企業の「商品」にされたアメリカ！ 世界が向かう先を象徴する身の毛立つ最新報告。

1431 **民族紛争**
月村太郎 著
世界各地で続発する民族紛争。どのように発生、激化し、終結へと向かうのか。八つの事例を詳しく解説、紛争研究の論点を整理する。

1432 **アジア力の世紀**
―どう生き抜くのか―
進藤榮一 著
生産・通商ネットワーク化がアジア地域のプレゼンスを押し上げる。中国脅威論やTPP等のリスクに向き合う日本がとるべき道は？

1433 **転倒予防**
―転ばぬ先の杖と知恵―
武藤芳照 著
転倒はいのちへの黄色信号です。老化は足から。ラジオの明快解説で評判の著者が、転倒に負けない身体づくりを伝授します。

1434 **先生！**
池上彰 編
「先生！」――これから喚起されるエピソードは？ 池上さんの呼びかけに各界で活躍の二七名が答える。子どもと先生の関係は多様！

1435 **柳宗悦**
―「複合の美」の思想―
中見真理 著
政治経済的弱者やマイノリティに対する温かい眼差しと文化の多様性と互いの学び、非暴力を重視した思想家としての柳を浮彫りに。

1436 **おとなが育つ条件**
―発達心理学から考える―
柏木惠子 著
旧態依然の「あるべき」像に縛られたままの日本のおとなたち。どうすれば突破できるか。長い老後をいかに生きるかの処方箋。

1437 **富士山**
―大自然への道案内―
小山真人 著
美麗な山容、清らかな湧水。長年、富士を見つめてきた著者をガイド役に、その豊かな自然を旅する。［カラー口絵14頁］

(2013.8)

斎藤茂吉著

万葉秀歌

下巻

岩波新書

R3

万葉秀歌 下巻 斎藤茂吉著

R3